特105
243

神戸又新日報
掲載小説

# 男（をとこ）

【編終】

山羽
本様
英荷
春香
畫作

始

特105
243

神戸又新日報
掲載小説

# 男（をとこ）

【編終】

山羽
本様
英荷
春香
畵作

大正
3. 4. 6
内交

## 樋口隆文館新刊小説目次


渡邊默禪作　千枝子
同　人作　封人窟
同　人作　俠妓小鶴
同　人作　千里眼
同　人作　風流菩薩
同　人作　櫻井策一
伊原青々園作　迷ひ子
島村抱月譯　其女の
鹿島櫻巷作　戀の敗者
同　人作　海の豪傑
新田靜灣作　愛と財
同　人作　富の力
伊藤銀月作　予……
根本吐芳作　三人の仇
羽樣荷香作　男……
須藤南翠作　浮木舟
須藤南翠作　闇のうつゝ
山田松琴作　競べ操
和田天華作　戀の意氣地
同　人作　靜子
同　人作　浪らくら
同　人作　二人の女
安岡夢郷作　罪の子
同　人作　地獄谷
稻花生作　金齒の於墨
中村兵衛作　父なき子
同　人作　甚九郎稻荷
五竹園作　香形錄
小島孤舟作　梅花
同　人作　浪がしら
花冠者作　思はぬ戀
春秋園作　俠妓胡蝶



樋口隆文館の出版物は東西各地の新聞紙上にて多大の好評を博したる物に付それを讀んでも至極面白い

◎須藤南翠作　浮木舟　春秋園作　俠妓胡螺

# 男〔終編〕

羽様荷香

（一）

直也は宍戸を誘ふて門内に入つた。

「宍戸俺の名は何處までも神木朱衣ちやぞ、番人の夫婦が居る、覺られんやうにして呉れ」

良輔は頷いて。

「オイ神木……かはゝゝゝ何だか云ひ難いな、嘘は苦しいものだね」

「それ位ゐの事が苦しいか、俺を見い、俺は一切悉く嘘偽ちや」

「汝が嘘を吐くといふのは柄に無いね……何したといふのだ」

「今に解る、默つて隨いて來い」

二階へ一緒に上つた、直也の姿が見ねると今迄欄干から眺めて居た薫が。

『神木先生』

と聲をかけた。

『オヤ此少年は……』

宍戸は自分に對して鄭寧に禮をする薫の顏を瞬もせず眺めて。

『オイ榊……ぢやない神木、この少年は彼ぢやないかあの大野代議士の』

『左樣だ』

と直也は障子も襖も悉く明け放して秘密を立聞く隙を無くすると、宍戸と對つて坐つた。

『俺が敎へて居た薫といふ少年ぢや』

『左樣だらう二三度下宿屋へ連れて來たから知つてる、この少年と一緒に居るのか……』

良輔はます〳〵深くなる疑惑に眉を寄せて。

『俺には薩張何の事だか解なくなつた、早く云て呉れこの事情を、オイ……神木』

『此處なら榊と云つても可い…俺が活きた大作といふのは此少年ぢや』

と茲に初めて直也は大野家の家庭敎師を廢めた以來の顚末を一つも漏らさず友に打明けた、宍



戸は奇扨に變轉して行く直也の周圍の事情に驚かさるゝと共に深く何事にか感じて時々太い溜息を漏しつつ熱心に耳を傾けて居た。

『俺はこの事業を筆で描く小說よりも遙かに意味があると信ずるのぢや、俺の文藝上の立場は固陋と嘲ほうが陳腐と罵らうがそんな批評には屈しない、斷じて何處までも人道主義である人道を離れて俺の小說は無い、これが作の上の信念ぢや、この信念は俺を動かして、筆を投じさせた弱い女と幼い小兒が悲慘極まる運命に虐待るゝ社會相を傍觀する事は俺の筆の主張と一致せぬ事を知つた、モ一つ進んでは聰明な智識と名譽の地位を有つ大野廣之の如き人間が誤まれる思想に捉へられて惡に墮する彼な人間を現實に救ふて美くしい覺醒を與ふるといふ事は男の事業として最も價値があると思ふのぢや、廣之を救ふ事が出來れば喜代子も信明も……權柄を弄して一代の人心を蠱毒するといふ巽元卿の如きも悉く正義の大旆の下に膝づかせる時機が屹度來ることを信ずるからな……俺は深い決心を持つてこの生きた大作に全筆を執つて居る眞最中ぢや、この少年は俺の事業の表象ぢやこの少年と病める夫人と、惡に向つて走りつゝある大野廣之とこの三人の親子を以前の如く平和に結合せしめる事がこの活小說の大團圓ぢや、それが目出度々々に終るか、或は悲劇の結末をつくるか、それは一に俺

の努力にあると思ふ』

『その小説の原稿料は何程だ』

と良輔は突然に云つた。

『原稿料といふか……數字の標準で計算される樣な淺薄な……小さな頭ぢや無いのだはッは丶丶丶』

直也は哄笑した、其手を握つて。

『榊ッ、汝は實に……俺なぞの凡俗から見れば實に神の心其儘の高潔ぢや、同情に報酬を求める世の中に汝の樣な……オイ榊俺の疑つたのは許して呉れ』

『絶交は取消して呉れるだらうなはッはは丶丶』

『俺が絶交さるべきぢや……』

『可いか、そんな事情だから充分秘密を保つて呉れ、敵前ぢやからな』

『無論だ安心して呉れ、併し汝にして假裝だッて能くこゝまで忍んだね、それが實に感心だよ』

『苦しいさ、醜辱汚辱を通り越して、獸畜に伍するの感慨ぢや……がこの探險は俺に莫大な智



識を與へて呉れたよ、上流社會の腐敗と紳士と稱する徒輩の道義の頽廢……そんな事は悉皆俺の寫生帖に印象されたから』

『左樣だらう』

と宍戸は何か考へつゝ。

『オイ榊、俺は汝に賴みがある、俺の樣な者の繪でも汝は愛してゐの『涙』の口繪を描して呉れたね』

『俺の文を愛して呉れる汝に負けはしない、汝の繪が欲しいばつかりにゐの「涙」では出版元に頭を下げたぞ』

『感謝する、賴みといふのはモ一つ繪を描せて呉れ』

（二）

『繪を描せて呉れといふか』

と直也は友の詞を怪しんだ。

『小説の繪だ、活きた小説の挿繪を是非俺に描して貰ひたい』

宍戸は希望を貫かでは退かぬ態度で。

『人道の爲に筆を投じて起つ汝を見と俺は實に愉快な感情か此胸に充滿だ……此心は汝が文壇に引張出して名譽を得させたいと努めた俺の從來の考へと決して矛盾せぬのだ……汝ひとりでこの危險な戰鬪を續けて居るのを見て俺が何して傍觀が出來るものか、だから唯繪で可い挿繪に依て印象を强するといふ位の程度で可い、俺にも事業の應援をさせて呉れ、何かの用に使つて手傳はせて呉れ、それで無いと俺の精神が濟まぬ、友といふ事が無意味になる』

『オ、宍戸、俺は永い間こんな感情を忘れて居た……人間の眞實の囁きに遠ざかつて居た……恐らく此別莊も斯な對話は始めて聞くのだらう』

『人道の敵を降伏させる正義の軍の戰鬪員に加へて呉れ、可いか榊』

直也は腕を組んで思案して居たが忽ち膝を打つた。

『オイ宍戸汝あの喜代子に面識は無いな、物を云つた事はあるまいな』

『今日馬車に乘る所を見たのが始てだ』

『先方は氣は注くまい』



『知るものか、知る氣遣ひは無いさ』

『俺をあの招待會に出したのが汝といふ事を聞いて知つてはすまいか』

『大丈夫だ、あの事は松岡學士ほか誰も知る筈は無いよ』

『それだと妙だ、……汝斯して呉れんか此少年の買人になつて呉れんか』

『買人？買人とは何だ』

『まだそこまで話さなんだな、俺の戰ひは天祐を享けて一歩づゝ勝利に近づいて居るのぢや、流石の喜代子の奴め此子供には弱つて今度大野の歸つたのを何説きつけたか遂に他人に遣つて了うといふところまで運せよつたのぢや』

『恐ろしい手腕を有つてる奴だね、すると大野代議士はモウ此小供に對して親の愛は無いのだね』

『さあそれぢや、その事が俺は早く確めたい、早く大野に接近して彼といふ物が先づ研究したいのぢやが、一方病む夫人と此子供の方が焦眉の急ぢやから』

『子の愛が無くなつたら無論夫人に對する愛も全く消へて了つたのだな……離緣する位だから愛情は早くから無いに極つて居るのだらうが』

『それが覆はれて居るのぢや、俺は大野の心を覆ふた物を引剝つて遣る決心ぢやが、それについて一層早く此少年の話を進捗させねばならぬ、喜代子は俺に向つて少年の所置を計つたのぢや、そこで俺は一切罪惡の秘密が纏綿する所謂罪の子を貰ひ受けて何時とは知れず殺して了う恐ろしい機關があるといふ出鱈目の話をすると、彼奴め喜んでそれへ渡して呉れといふのだ』

『結局殺して呉れといふも同じだね……驚くべき毒婦だなァ』

『ナニ自分の他を見ないのさ、大野夫人となつて觀樂を貪ぼりたい虛榮の滿足が得たいといふ一念は所謂山を見ざるものだね、寧ろ憫むべき奴だ……そこで俺はその子殺しの機關といふ小説的想像を事實の上に設備しなけァならんのだ、小説で描くよりは總て却々骨が折れるよはゝゝゝゝ』

『彼奴らを欺かうといふのは骨だ、能く失敗しないで來たね』

『大野廣之の前へ連れられたら一度に化けの皮が剝げるのぢやがそれを喜代子が爲し得ないで何處までも俺を暗黑の裡に置いて味方と頼むのが彼の運の盡きで此方の天祐ぢや』

『俺は其子殺しの機關にならうか』



と宍戸が乘出した。

『それぢや、俺も喜代子が知らんのを幸ひに其奴を遣つて貰ほうかと思う』

『遣る、遣る、俺が子殺機關を成功させて見せるぞ』

『俺と巧く詞を合はせて呉れゝば可い、そして渡した此子は密と夫人の所へ連れて行つて呉れ』と兩人は猶細々と手筈を謀し合せた。

（三）

日比野公園の夜を逍遙する三人連の姿はそこの共同椅子に憩うた。

『この邊ね、約束の所？』

『此處です、モウ直に來るです、間違へる氣遣ひは無い、先方は金儲けの商賣だからはゝゝ』

『神木さん大きな聲をしちや厭よ、妾何だか氣味が惡いものね……』

聲は喜代子である、直也と兩人で薫を連れてこの夜の公園に現はれた目的は？、

『殊勝な事を云ひますね、氣味を惡がるのはこの椅子かも知れない』

と云つて直也は又笑つた、喜代子は暗い彼方を透して。

『誰か來たぢやありませんか』

『ウム來た樣です、あれでせう、貴女遇ひますかね』

『イヱ妾顏を見られては……』

『それぢや斯なさい、顏を見せないで話だけお聞なすつたら可らう、話は聞いて貰はぬと僕が中間で可い加減な事をして居る樣に思はれちや詰らぬから』

足音は近づいた、喜代子は急に身を轉して椅子の後ろに低う屈んだ。

『來たかね』

『ヘイ神木さんで』

と枯すれた低い聲、取打帽を脫いで何度も叩頭をする、筒袖を着て前掛をした商人風の男である。

『君この子供だ、足が不自由だが』

『ヘイ代物は何でもヘヴヘヽヽヽ』

闇の中で笑つた聲は無氣味だつた。



『お約束の物さへ頂戴いたせば』

『お約束の物さへ受取れア子供は貰はいでも可いだらう』

『ヘッヘヽヽヽ出來れば左樣願ひたいもんでヘッハヽヽヽ』

『甘い事を云ふね、さ金だ、手を出した』

と直也は懷中から紙に包んだ物を出して』

『ヘイ有難う、一寸お待ちなすつて』

これも腰を探つて取出した物は、ハッと光つて小さな懷中電燈だつた、それを直也に持つて貰つて渡された紙幣を能く檢めた。

『ヘイ確に五枚五百圓ございます』

『請取を呉れるのかね』

『イヱ手前の方の規則として一切書類は認めません、すべて直接の取引でございますから、それでないと何方にも迷惑のかゝる樣な……ヘイ』

『ナル程用意周到だね、それは左樣だらう、ぢやア子供を請取つて呉れたまへそれから籍の方の手續は今日から一年經つた日に僕の方から行けば可いのだね君の所まで』

『ヘイそこらは先日お話を致した通りでございます、一年間は唯預かるといふ事に表面だけ拵えて置くのでございます』

『遠方が希望といふ事も解つてるね、一切音信不通といふことも』

『何も被も能く承知でございますよ、手前共これが商賣ですもの、ハアこの子は斯だなと睨んだら滅多に間違ッこはありませんから、お頼の先方様の御迷惑になる様なヘマな取扱ひは決して致しません』

『ヘィ、其段は御安心下さいませよ』

『可し、それぢやァ連れてつて呉れたまへ』

『ヘイ……オイ坊さんへ、、、何にも知らずに眠つてござるね、オイ目を覺しなオイ目を』

と椅子に足ブラ下げて腰を掛けて居る薫を搖り動かした。

『寢て居るかね、罪の無いものぢや』

『オイ起きなッたら』

邪慳にグイと手を捉まへて引下ろす。

『オイ君そう荒つぽく爲るなよ、可愛相に』



『ヘッヘ、、、可愛いの憐れのは此商賣の禁句でさ、さあ俺に隨いて來るのだぜ、神木さん御免下さいませよ』

薫が何か云つて抗爭ふ樣子なのを男は有無なく引立て彼方の闇へ沒して了つた。

『はッは、、、これで一段落ぢや、喜代子さんモウ出ても可しい』

『連れて行つたのね、あ、妾これで此胸の塊りが除れちやつてよ』

と喜代子が身體を伸した。

## （四）

喜代子はホッとして椅子に腰を下すと。

『神木さんお骨折をかけましたね』

『ナニ斯な事ァ……併し約束の物は可いでせうな』

『お金？』

『金ですよ、今の男も子供より先に金ばかり喧しく云つたですね、悉く金だ、彼の男も金、僕

も金……貴女も畢竟黄金だ、ねね左様でせう』

『ほゝほそれは左様だけれど……神木さん今度のは少額にして下さいよッィ此間五百圓といふ物貴方に渡してるわ』

『はゝゝ、彼金は彼金です、彼金は一切の秘密口止料の前金です、今夜のは臨時科程外の働きぢやからね』

『何程位ゐ要るの……』

『何程と云つて二割は當然の要求ぢやが貴女も大分疲弊して居られる樣ぢやから特別に一割に負けて五十圓お出しなさい』

『五十圓も要るの……お察しの通り妾此頃スッカリ貧乏だから、貴方に皆な吐き出すんだもの』

『僕に吐き出すのは馬鹿令嬢から奪る分の十分の一にも當らないでせう』

『そんな事があるものですかよ、雛子さんだッて貴方が何時まで經つても悩ませんだものね、お金なぞ出しやしませんよ』

『巧い事を……それから邪魔な小供がいよいよ手離れになつたから今後は貴女は好きな活動が



『出來る、幾干でも儲かるぢやありませんか、お出しなさい』

『出しはしますがね』

難義な顔をして紙入を探る。

『貴方そんなに何に費つて了うの』

『はゝゝ僕だつて費るですよ、遊蕩にも出掛けにやならぬからね、貴女の用事で原稿は些つとも書けないから收入は唯貴女に縋るばかりだから』

『だから貴方目を瞑つて早く雛子さんを承諾して下さいよ、直に五萬や十萬の金は自分の所有になるわ、妾だつて助かるから』

『僕も金は欲しいから屢々勇氣を鼓舞するですがね、あの眼鏡越しに妙な目をして見られるとッィ躊躇するですよはッはゝゝ』

『夫は兄の云ふ通り又他でねえほゝほ』

『他で女を拵へるのですか、僕女を拵へる事なぞは至つて不得手ですからね』

『嘘を仰有いよ白々と、清香のお手際は？』

『清香ですかはゝゝゝ彼女はッィ酒の上でね』

『酒の上か何の上か知らないけど妾の兄の目を晦すんだもの凄いわねえ』

『歸るですか』

と直也に促した。

『は歸りませう』

と立上りつゝ裸の儘の紙幣を渡す、直也は受取つて。

『其中一氣呵成に遣付るです、大野氏と貴女との結婚より早く遣りますかね』

『無論ですわ、そんなに引張られて何なりますかよ、白痴の一心ッて妾モウ欺し切れなくなつてるから、子供がこれで片附いたから之からはあのお姫様の方の始末をつけなければ……妾明日から煩く參ります』

喜代子は公園前で俥に乘つた、直也は電車を待つ風をして車が遠くなつた頃公園に引返した、今の椅子の所に佇つて口笛を鳴らすと、彼方の木蔭から薫を連れて出て來たのは商人風に變裝した宍戸良輔であつた。

『大成功だ、巧く遣つて呉れた』

『都合よく行つたね』



と直也と良輔は手を握つた』

『先生僕これでお母様の所へ行けるの』

『ウム行ける行ける、今直連れて行つて貰うぞ、能く敎へた通りにして呉れたぬ、これで今迄敎へた嘘言はモウ云はいでも可しい、君の様な少年に嘘僞を吐けと敎へるのは方便の爲でも實に苦しかつたよ、これからお母様の所で嘘言は云はいでも可ろしい叩かれる氣遣ひも無い伸々と活潑に大きくなるのぢや』

『先生も來て敎へて呉れるねね』

『行くよ、以前の通りに敎へに行く』

『お父様も歸つて呉れるの』

『……お父様か……』

『お父様も居つて……お母様も居つて…先生も居つて……それからあの音蔵も居つて……直の様に皆な揃ふて一つ所に居ると僕嬉しいけれど……』

『オイ宍戸』

と直也は友を顧みて。

『少年の理想は神の聲ぢや、俺は一日も早くこの尊い理想を成就させて遣らなければならぬ』

## （五）

母よ先生よと憧がれた薫の望みは達せられた、慈愛の膝下に置れた彼には同情の薫陶も濃やかに注がれた、直也は別莊を出ては喜代子らに覺られぬ樣にして綾子母子の詫住ひを訪ひ永い間師の敎に離れて居た少年に對つて學問の事を行ひ勵すのであつたが、深く期する所のある彼は自己が信ずる公正な態度で絹子や音藏の見る前に綾子母子を訪ふ事を何の顧慮も用ひず同情の命ずるが儘に行動いて盡し盡して止まぬのであつた。

綾子の病氣は心臟を刺す苦惱であつた薫といふものが無事に我手に戻つた爲に醫師も藥も及ばぬ慰藉の奏功は驚くばかりさしもの病ひも薄皮を剝ぐやうに日一日と快方に向ふのである。

直也は先刻來て綾子の病室の次室で――煤けた天井と黑い疊に光線も不充分な、背てあつた小石川の邸宅の二階を特にそれに造作へた敎室の光景を偲ぶと涙が零れるやうな穢く狹くろしい四疊半――蜜柑箱の机を中に薫に學科を授けて居る嚙んで含めるやうな訓諭の詞と訓諭を忘れ



まじと繰返す薫の聲には、師弟の情誼が靄然と籠る、破れた襖を隔てゝ綾子は母と同じ情緒の顏を見合せては遣瀨ない嘆息を互ひに吐いた。

『……第三孝行』

と薫は修身書の一節を音讀する。

『……渡邊登はうちが貧しい上に、父が病氣になつたので、うちの生計を助けるために繪をかく事を稽古しました、又長い間父の看病をして少しも怠りませんでした……父母の恩は山よりも高く海よりも深し……』

『可しい』

本を疊ませて。

『今讀んだ話を書いてお見せなさい』

『先生、登ッて人お父樣が病氣？……僕はお母樣が病氣だ』

と鉛筆の手をとめて仰視ぐ、痩せた頰が少し肉づいたやうだ。

『貧乏といふ苦艱に負けないで孝行と勉强をして遂に渡邊華山といふ豪い畫の名人になり、國の爲にも大層役に立つ人になつたのぢや』

『先生、僕貧乏？、お母様はお父様が居ないから貧乏人でせう』

『人間は財産家になる時もあれば貧乏人になる時もある、財産家になつても威張つては可ぬ、貧乏しても決して屈してはならぬ、財産家でも精神の穢いのがある、貧乏に暮しても人間の道を守る豪い人が居る、登といふ人はそれぢや、登は貧しかつた爲に奮發して豪い人になつたのぢやから貧乏は反つて幸福であつた、艱難は汝を玉にすといふ事が其先に書いてあるその事ぢや、難義苦勞といふ砥石が自分を磨いて呉れる、玉のやうな光輝の出る豪い人間にして呉れるのぢや、登のやうに貧しい君は幸福である、登に負けないやうに孝行と勉强をして登よりもズンと豪い人間にならねば可んぞ』

『……先生』

『ナニ……』

『……僕お母様だけに孝行をすれば可いの、お父様は居ないから……登のお父様は病氣だけれど僕のお父様は……』

直也は急に曇つて少年の面を注意深く凝と見て。

『君のお父様も病氣ぢや精神の病氣に罹つて居られる、それを愈して上げるのが君の孝行をする方法は能く勉强して居れば解つて來る』



薫は熱心に耳を傾けて居たが。

『先生僕屹度孝行をするからお父様に遇はせて下さいよ……お父様が居たらお母様が惡い事は些とも無いから……僕お父様の惡い事を云つてお母様に謝罪らせるから……僕が歸つて……それからお父様が歸つて皆な一緒に居たらお母様の病氣は愈るでせう、ね先生』

詞は幼い舌に縛れたが强い精神は一句づつに籠つた。

『ウムお父様には僕が遇はせる、僕が屹度遇はせるからね、その精神を忘れては可んぞ』

## （六）

直也は大野廣之に接近する機會を捉まへたい爲にこの二三日心をそれに碎いた、廣之の歸京を幸ひ直接に對面して一應彼の意思を聞いた上で、綾子と薫に同情した自分の立場を明かにし、貞節な妻を逐ひ可憐な子を苦しめる非人道沒人情の所業を攻め、我舌爛るゝまでも彼の迷ひを說破らねば置ぬ豫ての決心を果すのは此時であると思つた。

廣之の居所は判然せぬ、佐藤男爵と提へて頻りに秘密の會合を催して居るらしい事は想像されるのであるが、それには喜代子も影身の如く付添ふのであるから直也は容易に近づく事が出來ぬ、佐藤兄妹に知らさず廣之に遇ひたいといふ希望は遂げられさうにも無い。

けれども廣之が一度の對面一度の忠告で己が非を悔ゆる男とは思はれぬ、彼が惡の根底は決してそんな淺いものではあるまい、從つて自分の事業は繫續される戰鬪であるから、折角苦心して此方の計略に乘せて居る佐藤兄妹の前に今神木朱衣の假面を脱いで了うのは餘程考へ物である、奸智に長た兄妹は秘密を握られた敵に對して有ゆる防衛手段を講じるだらうそれが窮鼠猫を咬む比諭で大野廣之までを逃す結果になりはすまいか。

先づ佐藤兄妹に覺られぬやうにして廣之に遇ひたい、廣之が自分の赤誠に動かぬ時に至つて始めて兄妹の秘密を提げて強い醒覺の刺戟を與へやう、これが大事を踏んだ方略である。

直也は斯考へた、で佐藤兄妹を避けて廣之に面會すべく種々骨を折つたが、廣之の滯京は一週日と聞くのに今日はモウ二日を餘さぬ、高輪の寺田の別莊や待合如月や、それから佐藤男爵の邸前にも度々偵察に出掛けて見た、廣之の姿は其度に見られる、が兄が居なければ妹、妹の居ぬ時は屹度兄、と兄妹は交る々々離れた時が無い、空しく敵の本陣を望んで其要害に阻まるゝ



思ひで直也は口惜しがつたモウ此上は最後の手段である、兄妹を驚かして直ちに廣之に肉薄しやう、それは何處が可いか？と今は場所の思案最中へ彼の藝妓清香からの手紙が届いた、清香は其後音藏の宛で二度ばかり直也へ消息を通じた、其度に直也は音藏と綾子らの見る前で其手紙を讀んだ、今度のも文句は例時の如く人々に聞ねた。

直也は手紙を讀み了つて左も愉快氣に笑つた、廣之との面會に佐藤兄妹の邪魔が無い場合があつたら報せて呉れと頼んで遣つて置いた其返事である。

『それぢやアあの藝妓の骨折で旦那と先生樣を』

『まあ能、深切にねい、妾早く清香さんにも遇てお禮を云はねばなりません』

と綾子と音藏が云つた。

『彼の義俠は感謝すべきです、あんな社會に如彼いふ女が居るといふ事は一寸信じられんですな』

と云つて直也は又手紙を繰返した、文意に依ると。

廣之には染次といふ馴染藝妓が居る、彼の大金を拐帶した小仙の後は此女を相手にして信明と共に待合遊びを續けた、染次と清香とは仲の善い女同士の、今度廣之が歸京してからも男爵と

共に遊びに來る事はモウ信明と絶縁て其座敷へは出ぬ清香の耳へ染次から告げられた、清香は直也から手紙で頼まれた事を運びたい爲に染次に頼んで廣之が單獨で遊びに來た時を報せて呉れる事にしてあつた、恰度明日の夜は明後日出立の名殘を惜しむために廣之獨りで來る約束になつて居る事遇はせる手順は其場で拵へるから日の暮から密かに斯々の待合へ來て呉れ其處には自分が待つて居る、といふのであつた。廣之に遇へる！、直也は心の勇みを晴やかに笑つた

『ほッほゝゝゝ此一戰の感ぢや、安心して僕の報告を待つて下さい』

## （七）

佐藤兄妹に誘はれて始めて待合といふものを知つた、これで二度目である、暗い夜艶めかしい巷を彷徨ひながら奇怪に展がつて行く我身の事情を顧ると自分を呆れる失笑を禁め得ぬのである、嘗つて性慾描寫の道理らしい名に隠れて卑しい耽弱に墜ちた文士が居る、華やかな燈火の軒に佇つ我を世間は何と誤解するだらうか、これよりも猶大きく深く誤解するに相應しい男爵別莊の滯在……喜代子雛子との交際……友思ひの宍戸が絶交を振冠つて逼つたのも思へば道理



である、この潔くない疑惑の谷底に身を置くも今暫時である、大野廣之に面會の今宵から谷まつた綾子母子の運命も我周圍も風に散る霧雲の如く開けて行かねばならぬ、最後の努力の第一歩は今である。直也は敎へられた待合の門を潜る時さすがに躊躇ふ心を斯叱りつけて勇ましく案内された座敷へ通つた、其處には清香が唯一人で待つて居た、自分を見て笑みながら座を立つ姿は暗黑から出て花を眺めるやうに美しう直也に見へた、嘗て犯した罪を懺悔するとは云へ綾子母子や自分の爲に榮華の地位を犧牲にして顧みない彼の情操には直也は藝妓即ち醜業婦といふ侮蔑の念を抱いて居た其反動として格別に尊敬を拂はずには居られなかつた、女性に對しては絶對に反抗を有つ理由のある自分は凛々しい眞節を守る綾子と床しい情操を有つ清香の二人の爲に始めて心靈を搖り動さるゝ感があると始終直也は思つた。尊敬と愛は手を引いて來る餘り目にも止めなかつた女の美しい姿を今宵始めて美しいと意識したことを直也は心に恥ぢた其後の事なぞを話す清香の聲も調子も酒に醉つて自棄な態度で信明兄妹を欺いた其夜とは人が變つた樣である。

『有難う、それぢやア九時か十時頃に此家へ大野が獨りで來るといふのですな』

『妾染矢ッていふ妓を能く打合せをして置きましたからね、それ迄此處で待つて破居て大野さ

んが入つて來るところを捉まへたら可いでせう、眞逆蠻奴の外に斯な所に待つてる人が有らうとは大野さんだつて思やしませんわね』

『來さへすれば必らず捉まへる、併し又男爵が隨いて來るのぢや無いだらうかね』

『大丈夫、そんな事は有りませんの、大野さんの秘密遊びよ、あの喜代子さんに知れない樣にコッソリ來るのですよ』

『互ひに秘密と秘密の競爭を遣つて居るのだね』

と直也は情ない顏をした。

『それはモウ平氣ですわ、妾の事だつて兄弟で巧く大野さんに隱して居るのですね、唯厭になつたから絕緣にしたつて左樣云つてるらしいのよ、貴方の事が知れちや大變だから』

『嘘僞の塊りが彼奴們に形を現はして居るのだ、それで互ひに幸福を望むのだから可愛相ですね』

清香は其詞を承けて泌々と云つた。

『榊さん、本統に嘘僞りのない程氣樂なことはありませんわね、妾貴方に懺悔してから良心ばかりか身體まで荷を下したやうな心持で、氣分が清々するのを覺へるのですものね、早く斯な心持を喜代子さん達に知らせたいと思ひますわほゝほ』



『まだ〳〵暗い秘密を澤山有つて居るのだらう、彼們の一擧一動悉く正義人道の前に顏の向けられぬ內證事ぢや』

『有りますとも、喜代子さんには一時俳優買ひの秘密も有つたのですもの』

『今は大野を獲たい爲にそればかり熱して居る樣だね』

『何ですか知れたもんぢや……彼な方になるとそれを稼業の黑人よりか遙か豪いのですわ』

と云つて清香はソッと直也を見ると。

『だから彼な方の別莊なんかに被居る貴方も御用心遊ばせよ』

ほゝほゝと語尾は笑ひに紛らせたが眞面目な聲で情を含んで云つた。

## （八）

大野廣之の姿は果して直也の待ち構へた待合へ現はれた、彼の入つた室の隣には襖一重を隔て直也が座つて居る、清香の働きで染次の來るのも態と隙取らせてあつた。

廣之が洋服を脫いで浴衣に着換る時女中は清香から渡された名刺を持つて入つて來た。

『あの此お方がお目にかゝりたいと仰有つて……』

『俺に？』

密かに潜つた待合の夜を驚かす名刺の主は？、廣之は不審氣に名刺を取つた。

「榊直也……」

口の中で讀んだ彼の顏色は忽ち變つた、それが常のやうに鎭まると。

『隨けて來たのか……俺が此處に居るといふ事を云つたのか』

『ハイ、イエあの先刻からお越になつて……』

と女中は曖昧な返詞をする、廣之は默て考へて居たが名刺を輕く投ると。

『可しい遇つて遣らう、此處へ通せ』

女中が立つた後ろから染次は來ても別の座蒲團に置けといふ注意をして彼は座蒲團の上へ裕かに胡坐した。

直也が入つて來た、それを見ると廣之は何の隔意も無いやうな快濶な調子。

『ヤア榊さんはッはゝゝ珍らしい人に變つた所で遇つた、サア此席へ、斯な所で禮讓は止さう、ズッと比帝へ來て下さい』



『失敬します』

と勸められた薄團に坐る。

『待合の訪問は奇拔な事を遣られたね、何して此處を突止めたのですかね』

『貴方に密かに御面談したい事があつて機會を待つて居たのです』

『密かに？左樣ですか……密かになら此處に限るね頗る密かな所だはッはゝゝはゝ』

廣之は身體を搖つて笑つた。

『君には子供が非常な御厄介になつたが妙な事から疎遠になつたのは甚だ殘念でした、あの當時は君も知つての通り政變の眞最中でね、俺の身體は二大政黨間の引張凧で家庭の事なぞは全で拋棄てあつた、其間に妙な問題を起して老人なぞが勝手に騷いだのぢやが俺は格別意には留めんかつた』

『大野さん、妙な事といふのは僕と夫人との間に不義の關係があると云はれたあれですか』

『はッはゝゝそんな事らしかつたね』

と廣之は他人事の樣に云つて。

『併し俺はそんな家庭の紛擾に頭腦を遣ふほど閑は無つた、尤も君や家内がそんな事を爲し得

る程大膽な人々とも信じなかつたですがはッはゝゝゝ』

直也は力の籠つた聲で。

『すると貴方が夫人を離別されたのはそれが原因ぢや無いですか』

『綾子の離縁かね、あの事は俺の母に一切任せてあつたから』

『イヤ貴方の夫人綾子さんの離縁問題ですぞ』

『さあその事は俺の餘り關係せん、尤も綾子と俺との縁は當時既に切れて居たのです、俺は離縁の相談に承諾を與へたばかりですよ』

『縁が切れて居たと云ふのですか』

廣之は事も無けに頷いた。

『趣味も希望も一致せぬ事を俺ら夫婦の間に認めたのです、それで縁を切つたのだが、その事に就て何かお話があるのですかね』

『無論其事です、僕は貴方の母堂から聞くに堪へぬ無禮な誹謗を受けたのです、不義の寃罪を被せられたのです、で貴方が薫君まである仲の夫人を離別された原因は其にあるといふ事を信じて居たのですが……すると貴方は僕と夫人との間に置れた疑惑に就ては全く信じて居なかつたと云ふのですな、大野さんそれを明確に答へて頂きたい』



## （九）

嚴格な詞で責問する直也の態度とは全然反對の、廣之は娯樂の茶談でもする暢氣な調子で、努めて相手の話題の腰を折らうとする、悠然紙莨の煙を上げつゝ。

『榊さん、君は今に教師の生活を遣つて居るのですかね』

『僕ですか』

と直也は問ふに答へず又しても他を云はうとする廣之の態度に憤としたが感情を制へて。

『教師といふ柄ぢやないですから廢しました……大野さん只今お尋ねした事に就て貴方は僕に答へて下さる義務があると信ずるですが』

『尋ねた事？ウム今の離縁談ですか……義務がある？』

『僕及び貴方の人格上の大問題ですぞ他の事なら兎も角疑はれた僕と疑ふた貴方と……』

『ハッはゝゝゝ』

と廣之は突然嘲笑つて我に突かゝる詞を遮つた。

『君、君そんな事は……そんな下らん過去の問題は廢さうぢやないか』

『下らん？貴方は此問題を下らん過去の事にして了ふ事が出來ると思つて居るですか、これは現在にも將來にも繫がる重大な事柄ですぞ、大野さん僕は貴方に紳士としての應接を望みます』

直也の詞は激した、鋭く聳つた肩、巨きな體軀は壓する如く前へ逼つた。

『はッはゝゝゝ、君大きな聲をしちやア可ん、此處は紳士も大臣も無い待合ですよ、彼方にも此方にも快樂の夢が幾つも轉がつて居やうといふ秘密の場所ぢや、まあ靜かにして呉れたまへ、そんな聲を出すと野暮の肩書を頂戴して緣起鹽と一つに撮み出されるはッはゝはゝ』

廣之は紙卷を捨ると浴衣の胸を膨らせて無作法な懷手をし、後の床柱に倚つた。

『下らんと云つたのが君の氣に觸つたら許して呉れたまへ、それから序にモ一ッ母の分も俺から謝つて置う、妙な疑ひを君にかけたといふ事だね、あれも許して呉れたまへ、俺が改めて謝罪しやう』

『不義は全く誤解であつたといふのですな、事實で無い事を信ずるから謝罪すると云ふのです



な』

廣之は一寸頷いたが絶にず輕い笑みを含んで居る。

『確と左樣ですか……イヤそれで可しい僕は貴方の口から直接に其詞を聞く以上に名譽回復の手段を求めますまい、それで滿足して置くです』

『はッはゝゝゝ誤解や疑惑といふものは煩い程何處にでも有る、俺なぞはそんな物には一切交渉を絶つて居るのですが……それで御用は終ひですかね』

と四邊を眺めて背中を柱から離すと。

『久振りにお話も承はりたいが此處ぢや可ん、野郎同士が對向になつて話す所ぢや無い、又機會があつたら……』

廣之の去れがしに云ふ挨拶を直也は耳に入れぬ風で、體軀をドッシリと座蒲團に落つかせた。

『大野さん、僕が斯な所にまで貴方を尋ね出して面會を願つたのはそればかりの用事ぢや無いです、此處がお互の對話に場所が惡ければ席を變へて頂きたい、是非共今夜お話をしなければならぬ必要があるです』

『まだ話があるといふのですか……そいつは困るね、そんな君一

と不快な顔をして。

『それは君殺生だよ、今日は許して呉れたまへ、又會見の場所をつくつて俺の方からお知せする事にしやうから…』

『貴方は明朝旅行の途に上るのでせう』

『……それを君知つて居るのですか』

何してそんな事まで此男が知つて居るかを廣之は怪しみながら。

『旅行はするが直又歸るのです、其節に……』

『大野さん、今夜此處が可けなければ明日の旅行を廢めて頂きたい』

『はッはゝゝゝ戯談ぢやない君俺の自由を束縛する事は出來ぬよ』

『僕が束縛するのぢや無い、人道と正義の繩で貴方の五躰は自縛されて居るのですぞ』

直也の聲は敵を叱咤する如く響いた。



## （一〇）

『俺が縛られて居る……人道と正義の繩で？』

と廣之は自己に對つて云はれた詞を繰反しながら一向に感じのない、何を云ふかの顔付で居る。

『左樣です、僕は縛られて居る大野廣之といふ人を救はんが爲に今夜此處に現はれたのです、貴方は自己の良心に反いて行動してる人だ、それは實に危險である、人道の背反である、正義に對する謀叛です、僕は貴方に對つて忠告し反省を促す爲に面會を願つたのです』

『俺を說きに來たのですか、左樣ですか』

と相變らず笑みを止めない、寬大な態度で廣之は再び柱に背を倚せて。

『君は誰に賴まれて俺を說きに來たのですかね、誰からの依賴で……』

『誰からの依賴も受けないです、僕自ら人道の爲に、僕自ら正義の爲に』

と直也は一句一句に膝を進める。

『はゝあ、左樣すると君自身が正義である人道であると云はれたのたね』

『然です』

明確と答へた直也の聲は凛然として重い威嚴を備へて居た。

『少なくとも貴方の前にはこの榊直也は正義と信じ人道と呼ぶに躊躇しません忠告者の資格あることを自信するものです』

『それでいかなる御忠告ですな……といふ順序になるのだが』

と云つて廣之は兩手で立てた片膝を抱いてグイ〳〵搖りながら。

『榊さん、正義人道上の忠告と來てはいよ〳〵此處ぢや可ん、待合の四疊半ぢや餘りに記錄を破り過るといふもんぢや、全體何の事か知らんが兎に角忠告といふ事は好意ぢやから俺は有難くお禮を云つて置いて、其内容を聞く事だけは今度にして貰ひませう、此次お目にかゝる時に緩りお話を聞うぢやないか、左樣して呉れたまへ、既に待合に入つた所を押へた君に隱すのは野暮ぢや、俺は事業の爲に疲れた身體を此處へ暫時の休養を求めに來のだからね』

『はッはッはゝゝゝ』

と今度は直也が高らかに笑つた。

『大野さん、貴方の事業と云はれるのは地下の黃金を掘り起す事でせうな、變節の報酬に貰はれた鑛山の發掘に從事さるゝ事でせうな』



廣之は何も答へなかつた。

『貴方は不義不正の富を獲やうとして地下の黃金を志さるゝ樣だが、貴方を富す財寶は決して地下には無い、目に見ぬ地の底を探る爲に斯る醜怪な行動を演じてそれを休養とさるゝ貴方は何故眼前に積まれた際限の無い……掘つても盡きぬ無盡藏の財寶を採られないですか』

『そんな物がありますかね、有れば敎へて貰ひたい、俺は今は民友黨でも無ければ同志黨でも無い、極端な拜金宗ぢや金儲けの事業なら何でも手を出すからはッはッはゝゝゝ』

呆けたやうな事を云つて笑つた廣之の顏を卑しい物に見据て。

『貴方が忘れられたら敎へませう、貞節なる綾子夫人、孝順なる薫君……この妻この子は貴方の爲に貴重類ひなき財寶ぢやないですか、黃金と較べる事の出來ない貴方の財寶ぢやありませんかッ』

『君ッ』

と廣之は手を振つた。

『既に離緣した女に關して俺は他から何等の干渉も忠告も受ける理由はない、これは一寸斷つ

て置く』

『貴方は拒んでも僕には忠告の任務があるです』

『はゝゝゝ、君は面白い事を云ふね、妻を何しやうが子供を何しやうがそれは夫たり親たる俺の勝手で且つ家庭内の私事ぢや、他人の容喙を許すべきぢやない、そんな忠告なら俺は更に聞く耳を有たぬ左様思つて臭れたまへ』

直也は敢然たる意氣込を竹篦返しの詞に見せた。

『はゝゝゝ、大野さん、妻子は貴方の所有ぢやが人道は貴方の勝手には歩けぬ、弱者を虐げる暴力に對つては正義の宣戰が天から降りますぞ、忠告には耳を貸さぬといふ態度をとられるのなら僕は貴方と闘ふて見る決心です、左様思つて下さい』

（一一）

火を噴く如き熱烈な詞は直也の意氣を示して餘りあるものであつた、廣之はそれを正面に受けぬ例の捕捉らぬ態度で應らつた。



『君は何解して居られるか知らんが敢て弱者を虐げるの人道に反くのといふやうな行爲は俺には決して無い……が一歩を譲つて俺の行爲が問題だとするとしてだね正義だの人道だのといふことは人々の解釋に依て何にでも見られる、俺の正義が世間の正義と不幸にして一致しなかつたと云て直に俺を悪人といふ事は出來まい或は世間の方が遙に悪のかも知れぬ夫は人間に批判の出來るものぢやない神や佛といふ者がある者としてだ飛行機にでも乗た神佛が高い所から鳥眼觀した審判ならば知ぬ事善悪の標準は何處の世界にだつて定つては居まいぢやないかはッはゝゝゝ』

直也は口から出任を云てのける廣之の辯を默つて聞くには堪へなかつた。

『大野さん、今昔の感といふ事を云ふですな、嘗て僕は貴方が議會の雄辯に敬意を拂つて居たその貴方の口から只今の様な詞を聞うとは豫期しなかつた貴方はそれが自已の非を飾るに足る辨疏と思ふですか』

組んだ腕を解くと疊を突いてズッと出る。

『貴方に注意が願ひたい、重ねて云ふが僕は何人にも頼まれたのぢやないですぞ、僕は人道上傍觀して居ることの出來ぬ悲酸な人事の爲に蹶起したのです、報酬の爲に動くのぢやない、

爲にする所あつて斯な事をするのぢやないですから、貴方も其考へで僕に對つて下さい、僕の此胸に存ずる或物は總てに於て現在の貴方よりも強い……遙かに強い力ですぞ、正義の力の前に貴方は早かれ遲かれ跪づかねばならぬ事を覺悟して居て下さい……それは即ち貴方の覺醒が來る時です、迷ひの夢が破れる時です』

『はッは、、、俺の目から見ると君達は相變らず迷ひに迷ふて居るやうぢやが……手製の正義人道は須らく自家用の銘を打つべきで決して人に强ひるべき物ぢや無い……』

『痲醉の毒酒と知らず歡樂の盃を傾ける者を見て其口を覆へて遣るのは人間生の相互義務です……貴方の正義人道は綾子夫人を離別された事に何の反省をも貴方に要めぬのですか、貴方は弱者を虐げぬと云はれたですな、それなら僕がお質問しやう、十餘年間不遇の民黨に籍を置いて辛酸の逆境に立れた時貴方と共に備さに苦勞された夫人が内助の功……その内助の力が無つたら今日の地位は得られないとは嘗て僕貴方の口から直接に聞いた事がある、地方遊說の或時には饑渴の境に瀕して夫人自ら勞働に同じき事をされたとこれも貴方が代議士當選の時に各新聞が爭ふて揭げた美談ではないですか……その夫人を一朝にして離別される、それは貴方が不義不正極まる變節を敢てするに當つて丈夫の如き節操を持して夫の非行を諫止



せんとした夫人が邪魔になる爲の殘虐な行爲ぢやありませんか、その非を覆ふ爲には不義の寃罪に泣かせ、無邪氣な少年を家庭の風波に沈めて顧みない、遂には陰險手段を弄して夫人をして家なく子をして母を失ふの悲酸に陷らしめる……こればかりを數ふるも許す可らざる貴方の大罪です、然るにこればかりぢや無い、貴方は非を遂げんが爲にます〳〵惡に墮ちて顧みない、罪なくして家を逐はれた夫人は病ひと生活難の爲に陋巷に殆んど窮死の狀態で居られる、最も敎養に大切な發育盛りの薫君は殘酷な犧牲となつて虐待の苦の下に泣いて居る……この慘憺たる事情に引かへて貴方の所業は何といふ醜態ですか、貴婦人の假面を冠つた佐藤男爵の妹喜代子と……』

『榊さん』

と默つて聞いて居た廣之は詞を遮つて。

『君の忠告は有難いが大分見當が違つて居る、俺は他人の誤解は拋つて置く主義ぢやが折角君が好意を以て熱心に說かれるのぢやからそれに對して答辯をしやう、併し此處ぢや可ん』

と一寸考へて。

『斯しやう、俺は明日の出發を一日延ばす事としやう左樣して大いに君と談じやう、ね、さう

して呉れたまへ」

## （一二）

直也は明日の希望を抱いて愉快に別荘へ歸つて來た、モウ夜は遲かつた、枕に就てからも勇躍む感情は容易に眠れぬほど彼を昂奮させた。

大野廣之は嘗めの剛頑な不遜な態度に似ず直也の熱誠籠めた忠告に心を動搖させられたか、郷里に出發の鑛山事業に忙がしい日を一日割いて明日の午後改めて某所に直也と會見する事を約したのである時間も場所も總て此方の云ふが儘に任せて、人の好意に對する尊敬の意は充分に現はれて居た、直也は居るに不愉快な待合の夜を更して强いて廣之を追窮する事の反つて愚かな所爲であることを思ふて堅く會見の詞を番へて別れたのである。

希望に滿る其日は來た、晴れた天氣も直也の爲には喜ばしい暗示と勇まれた、いかにして其人に近づくかの難關は昨日に通越して彼が所謂至誠一貫主義で衝突る時機は眼の前に來た、議會三絶の譽れある廣之の雄辯も直也には何の警戒も與へなかつた。



彼は只至誠である、正は邪に勝ち善は惡を亡ぼすといふ强烈な信念の外には何も有ぬ、この唯一の信念は敵を破るに絶對の威力である、假令廣之にいかなる辯口と手段があるにせよ一氣に說破して迷妄の曇吹き散し良心の醒覺に悔悟の涙を流す彼を導いて綾子と薫の前に連れねば置ぬ、それは今日の豫定である、益なき時間は早く經て、待たるゝ會見の時刻早く來よと直也は忙はしく起ちつ坐つ半日を呪ふが如く過した。

約束の場所は上野の某所、時刻は午後一時と定めた、午砲の音は直也を蹶起せしめた、彼はさつさと別莊の門を出やうとする時、門合頭に一輛の俥が止つた。

『あらお出掛け？』

優しい聲と共に透し幌は疊まれた、喜代子であつた、直也は忌はしさに强く舌打して佇止る。

『何方へ？、妾急にお話しをしなければならない事があるのよ』

『僕も約束した事があるですから今日は……』

『困るわ』

と喜代子は美しい眉を寄せて。

『約束ッてお友達と？』

『左様です……一時の汽車で國へ歸る友人を見送る事にしてあるです、是非遇なけらならぬ用事があるですから』

喜代子の門内に進まうとするに逆らつて直也は外へ外へと氣の急く足を進ませる喜代子は後ろへ隨く形になつて。

『あら見送り……貴方も、新橋？』

『……左様です』

『まあ可笑しいことね、妾も今新橋で見送りを濟せての歸途ですわ』

と帶の間から時計を出して。

『一時ですね貴方のは、それぢや神木さん斯なさいな、妾の此俥で行つてらつしやいよ、妾お歸りを待つてるわ』

『イヤそれには及ばんです、そこから電車に乘るです其方が早い』

『お乘りなさいよそんな……電車なんか見つともないぢやありませんか……そしてスグ歸つて下さるでせうね』

『一寸遲くなるかも知れないです、他に止むを得ない用事があるから』



『あらあんな事を……困るわねえ妾……此方の用事も急ぐのだから、神木さん貴方にそんな止むを得ないッた用事なぞありはしないわ』

『はッはゝゝゝ僕だつて時には用事も出來するです……時間が無い、僕は行つて來るです、ナル可く早く歸るですから』

駈出しもしさうな直也、捉まへもしかねまじき喜代子、門前で暫時云ひ合つた。

『困つ了うわ、貴方が不在になる事を知つてたら朝から來るのだつたに……大野を送らないで』

『大野を？』

直也は大野といふ詞を聞咎めて振向けられたやうに振顧つた。

## （一三）

大野を見送つたといふ喜代子の詞は直也の皷膜に怪しう響いた。

『喜代子さん貴方は誰を新橋に送つたといふのですか』

『あの大野が十時の急行で彼方へ出發ましたからね』

『エッ大野氏が……大野廣之氏が？』

直也の顏色が變つたのに氣付かず。

『その方へ行かなければ早く來られるのでしたけど……』

『大野廣之氏があの山口へ出立したといふのですか喜代子さんそれは眞實ですかッ』

『ほゝほ何したの貴方』

と直也の聲が餘りに激しく異樣に聞えたので喜代子は怪しんで。

『妾が自身に送つて來たのだから確かですわ、貴方嘘と思つて？』

『……』

『此地の用事が案外早く埒が明いたので急いで歸へつたのですよ、彼地は一時も手離の出來ない大事な時ですからね、今度歸つたのも秘密だからッて今日もコッソリ出發たのです、妾だけが送つた限ですわ』

喜代子は例の夫人氣取で話した、直也は彼方へ向いてキリ〳〵と齒を嚙んだ。

『……左樣ですか……コッソリ出發たのですか……それは實に殘念でしたな……』

『エ』



『イヤ……貴女は實に殘念だらうしお察しするですはッはッはゝゝゝ』

直也は笑ひに紛らして髮も逆立つ許りの憤怒を覺られまじとした、明らかに廣之の爲に手綺麗に欺かれて了つたのである會見の場所と時刻をさへも定めた堅い約束は當初からの嘯着を飾る巧言であつたそれにしても彼の聲彼の態度？、惡むべき卑怯を堂々と遂げて憚からぬ廣之の姿を其處に見るやうに、直也は拳を握り涙を呑んだ。

『ほゝほそんな事を察して下さるよか彼の方の事を察して下さいよ、ねえ神木さん』

と喜代子は足を止めて突立つてる直也の顏を見上げて。

『今日は其事で新しい御相談があるのですよ、貴方俥に乘つて早く行つてらつしやいな、妾待つてますから』

『イヤ僕はモウ行くのを廢めます、行くのをやめて雛子姫の御消息でも承はる事にしませう、……僕の如きはそれが相應かも知れん、雛子さんは欺かないからはッはッはゝゝゝ』

云ひつゝクルリと門内へ向つた、喜代子は呆氣にとられて、それでも男が自分の思ふ通りにするのを快く思ひつゝ一緒に二階へ上つた。

『御相談といふのは何です』

『何ッて雛子さんですわ』

『雛子さんが何したのです』

直也はさりげなく裝ふことを努めて居るのであるが陰險を極めた廣之の所爲は思へば思ふ程憤慨の念を強めて、眞しやかに我を欺いた其口を引裂いてやりたい心は自づと荒々しい語氣に出る。

『神木さん貴方何か怒つてらつしやるの』

『イヤ何も怒つてやしないです』

『だつて變だわ』

『變に見ゑるですか……少し氣色の惡い事があつたから……ナニ何でも無いです、雛子さんの話を聞きませう』

口では喜代子の相手になつて居るが、心は今頃東海線を急行で飛ぶ廣之の身に纏ひついた。

『神木さん、貴方旅行をなさらないの』

『旅行ですか』

と答へた直也は今恰度今旅行の事を思ふて居る、愚や大野廣之……天を駈り地を潛らば知らず



東海山陽七百哩を一線の首尾のみを隔て、我を遠ざけ得たる計略の成れるを喜ぶか、さほどの障害に阻害げられて脆くも逡巡する我と見たか……直に彼を追はんか。

『旅行は可いですな、何處へです』

『何處でも可いのよ、雛子さんと妾とそして貴方と三人』

（一四）

『何いふ意味の旅行ですな』

と直也は問返した、喜代子は奥の方で笑つて。

『何いふ意味ッてそれは貴方大抵解りさうなものねわ……そんなに生殺にして置かれては困るのは妾ばかりだもの、いくら相手が雛子さんだつて左樣何時までも引張る譯には行ませんわ……モウ貴方約束を果して下さらなけわ』

『約束を？約束を果す爲の旅行ですか』

『左樣ですよ……何とか其間にねえ、其で無いと妾モウ手段に盡きッ了つて』

『はゝゝゝ新婚旅行とでも云つて欺かうといふのですな』
『欺くといふ事はないけど……其處は貴方巧く遣つて下さいよ約束ぢやありませんか』
『約束なぞを履行する奴は馬鹿ですな』
と云つて直也は冷かに笑つた。
『戯談ぢや無いわ、そんな事を今更云はれて妾何するのですよ』
『絞つた金錢を悉皆吐出したら可いでせうはッはッはゝゝゝ』
『神木さん』
喜代子は態と目に角を立て唇を嚙んで睨んだ。
『貴方眞劍にそんな事が云へるの……眞面目にそんな事を云ふの？』
『はゝゝゝ眞面目だつたら何するですな』
『厭よそんな事を云つて人を脅すのは……貴方だつてチャンと報酬を取つてるぢやありませんか』
『無論僕も吐出すです』
手を上げて叩く眞似をして喜代子はクッ〳〵笑つた。



『さあ神木さんてば、戯談やめて相談しませうね、え、貴方旅行して下さいな旅行して何とか埒をつけて下さいな、モウ妾夫人の承諾を受けて來たのですからさ』
『夫人が僕と雛子さんと旅行する事を承諾してるのですか』
『結婚を承知してる夫人ぢやありませんか、當然ですわ』
『貴方は僕が雛子さんとの結婚を承諾したと云つたのですか』
『夫人だけにはね、今は夫人から伯爵を說いてる最中ですの』
『驚いた亂暴ですなア、ツマリ馬鹿な雛子を僕に背負込そうといふ寸法だね』
『だつて貴方その約束ぢやありませんか』
『結婚するとは僕は云ひはしなかつた』
『ほゝほ結婚といふのはホンの當座の體裁ですわ、直に何なつたつて相手は低能ぬ姫樣ぢやありませんか、此方だけの仕事さへ出來たら其處は又相談の上でお禮を云はせて突戻されるぢやありませんか、そんな事は妾の此胸にあるから安心して下さいよ』
『可愛相ですな、無垢の令孃を傷物にして突戻すなぞは』
『ほゝほ何うしないだつて始めから出來損ねの傷物だわ、あれ程戀して居る貴方と三日でも一

緒に置いたら理想が叶つたといふものよ、滿足したら可いわ』

『そんな事を知らない本人よりも伯爵夫妻は氣の毒ですな』

『何が氣の毒のもんですかよ、罪滅しだわ』

『はッはゝゝゝ彼方にも此方にも罪惡だらけだ、豪いねゝ貴女方の同族仲間は』

『それから掠錢を奪る貴方の方が餘ッ程豪いと思ふわほゝほゝゝゝ』

喜代子は頻に旅行を勸めた、箱根でも日光でも可い、温泉の里に滯在るも面白からう、旅費一切は伯爵夫人から給させるから氣保養と金儲け仕事の爲に是非來て呉れと種々にして說いた、彼の爲に籠絡されて居る足らぬ雛子は旅行さへすれば結婚したと同じものと信じ切つてそれを强請で止まぬのであつた。

直也は耳の穢れを忍んで聞いた、喜代子の勸むる詞を聞きながら何事か深い思案に沈んで居るのであつたが、決意の氣勢を外觀に見せて軈て斯う答へた。

『可しい、旅行しませう、三人一緒に遊びに行きませう、そして貴女の希望通り實行しませうモウ三日ほど後にして下さい』



## （一五）

宍戸良輔の畫室に主人と對ひ合つて椅子に掛けたのは直也であつた、漸く世に知られた青年洋畫家がコヽ兩三年の努力の賜物は靜かな早稻田の片傍にツイ此頃建てられたバラック式の蕭洒な畫室である白い窓帷に和らいだ日光が、製作半ばの彩色生々しい畫面を照す、大小の石膏像は藝術の尊い氣分を清い色に漾はせて並んだ、展覽會戻りの非賣品の大作が蓆包みの儘隅に置かれた、繪の具の汚れもまだ板の間に見ねぬ新築である。

『宍戸、俺はこの畫室を見ると嬉しくて堪らんが……飜つて俺自身を顧ると實に憮然たりぢや

『何故そんな事をいふ……俺は又汝の文名にどれ程鞭打れたか知れん……汝があの「涙」を出した時それを讀んだ俺は實に慚愧に泣いた位ゐぢやそれから俺は大いに奮發したよだから此畫室は云はゞ汝の賜物さ』

『あんな物が何だ……俺の志業は前途遼遠ぢや、宍戸聞いて呉れ、俺は汝の知る通りあの大野廣之を說いて夫人母子を早く救ふて遣りたい爲に一身を拋つてかゝつて居る、それに今度廣

之に會ふ好い機會を捉まへながら實に話しにならん失敗を遣つたよ』

直也は廣之に欺かれた顚末を話した、宍戸は身震ひをして大野を憤り友に同情した。

『實に酷い奴だね、始めから詐つたのだね』

『左樣ぢや、始めから詐られたのぢや、欺して其場さへ遁れたら可いと思ふ彼の心事の卑怯さを知ると、彼に改心させなければならぬ俺の目的は前途頗る遠い感がある』

『ウム左樣だなア』

と宍戸も同じ感に打れた、友の顏を繁々と見て。

『少し痩せた樣だぞ過度に精神を勞らすからぢやないか』

『ナニそんな事は無い、身躰は何もないが……何らの爲にするでも無い俺を全然欺かうとする奴らの所業は隨分不愉快を與へる……』

『榊、俺は此間から左樣思ふのぢやが、汝大野といふ男がそんな無法な奴なら其奴を覺醒させるといふ事は餘程の困難で從つて時間も要る事だから……其間汝が全然自分の職業を拋棄するといふ事も大いに考へ物ぢやなからうか……悲酸な綾子夫人と薫少年の逆境に同情してそれを救ふ事が活きた偉大な文藝だといふ汝の主張は俺にも能く解つて居る、解つて居るか



らこそ俺もどんな應援でも爲る料簡で居るのぢやが……唯複雜な人事に長い間沒頭してる間に汝の筆や思想が荒みはせんかといふ事を俺はフト思つたのぢや、汝の氣象だから決心した以上は成就ねば置ぬといふ事は能く知つてるから俺は目的を捨よといふのぢやない、大野がそんな奴といふ事を知つた此際にぢや、徐ろに作戰計畫を立る爲に暫時其儘にして置いて文壇の方へ身を入れたら何かと思ふのぢやが……』

友情は濃かに言句に現はれた、直也は聞畢つて靜かに面を上げた。

『汝の云つて呉れる事は有難い、有難いが俺はそれに從ふ事が出來んのぢや』

と腹の底から出る重い聲である。

『俺は小說を描く時に悲酸な抒情には自ら泣く、泣く涙が紙に落ちて筆の遣り場が無いに困ることは屢ぢや、これが作家の態度として可いとか惡いとかの批評はある、俺の涙は批評に遠慮なく勝手に零れる……勝手に泣いたり、笑つたりして俺は創作に從事するのぢや』

『ウム面白い』

と宍戸は斯な文藝談が大好きである。

『今俺の前に展げられた活きた小說の原稿は最も悲哀な……最も痛切な……俺の涙を絞るには

格好な悲劇ぢや、俺は涙に筆の遣り場が無い如く綾子夫人母子の救濟には此精神を惱ましてゐる、けれども俺の詩想は涙がポロ〳〵零れる時に最も高潮に達する、宍戸ッ、俺は汝の忠告に逆らつて此際一層の突擊を遣るぞ」

『突擊といふと』

『逃た大野廣之を何處までも追驅ける』

直也の聲が既に突擊の調子であつた。

## （一六）

猛然たる直也の意氣に宍戸は其決心の堅い事を知つて、半ば人を救ふ義俠の精神いよ〳〵旺盛なるに感じ、半ばは友を思ふの情から其身上を憂慮しつゝ、默して云ふところを聞いて居た。

『其場逃れの卑怯を敢てして出發した大野は俺が忠告の精神が了解されんのぢや、俺は何者にか賴まれて報酬の爲に働いて居るとでも自己が心事に較べて思つて居るらしいのぢや、此際彼の爲す儘にして空しく引退いたら彼はますます惡に墮ちて行く、彼が惡に進めば進む程憐



れな夫人母子との距離はいよ〳〵遠ざかる……俺は痛ましい夫人や可憐な少年を殘酷な運命の渦の中から救ひ上げて、あの大野廣之の眼目から悔恨の涙を涌立せなけれァ……俺には文壇で頂く月桂冠よりは彼の親子三人が平和の握手をする光景を見る事が遙かに愉快ぢや…』

『……柳汝は其處まで人道の爲に鬪ふといふのか……其決心の前にはナル程俺の考へは無益だつた……飽くまで遣るか』

『遣るのぢや、俺は音藏に罵倒された時から此決心を定めて居る、元より大野が普通で反省しやうとは豫期しないからな』

『此上の突擊ッて何うする、追駈けると云つたつて山口縣だつたかね、彼地まで行くといふ譯には』

『行く、俺は明日から行く』

『明日から行く？眞實かい』

直也は懷中から平たい包みを取出した。

『宍戸、汝を煩はせて濟んが此を賣つて呉んか』

包みの中は百枚ばかりの原稿紙の假綴であつた。

『全く一夜漬ぢやがあの「涙」の出版元なら買つて呉れるだらうと思ふ、五十圓もあつたら可いのぢや、俺が直接に行つては具合が惡いからな』

『オヽ創作を遣つたか』

宍戸は驚喜して原稿を取上げやうとする直也は其手を押へて。

『まあ待て、汝に讀まれちやア可ん、讀ずに此作の出來た徑路を聞いて呉れ』

『それも聞くがマア一寸見せよ、それが見たい爲に俺は今の樣な事も云のだ』

と强いて取上げて展げやうとすると、紙の間からバラ〳〵と落ちた、それは眞新の百圓紙幣が數へて十枚。

宍戸は頁を摘んだ儘落ちた紙幣と直也の顏を七分三分に見交した。

『はッはヽヽヽ俺が金を有つ事は目を聳てるに足るか』

『何したのだ……金は斯なに有るぢやないか』

『それは俺の有ぢやない、その金に手を觸れるな、穢い、罪に汚れた紙幣ぢや』

と抬ふて紙に包んだ。

『話をした通り佐藤兄妹の秘密を知つた俺を今では唯一の味方と信じて居るのぢや、秘密の口



止料として取つた金やら彼の子供の時に汝に一度渡した金やら總て彼等から請取つた不潔の金はそれぢや、それは俺の爲に何の役にも立ん、俺は廣之を追つて行く爲の旅費が要る、それから今日まであの別莊に居た間の食料を拂つて遣る積ぢや、それからまだ要る、夫人と子供の窮狀も見て居るに堪へん事がある、之は音藏の手を經て密かに力を添へて居る、斯な事の爲に欲しいのぢや』

『それ位の金なら別に此原稿を賣らいでも俺がスグ取つて來る、あの「涙」は四版になつてるぢやないか、二三百の金は出版屋に談判して俺が出させて見せる』

『可ん、そんな事は出來ん、彼作は既に原稿料を受取つた、そんな事は俺は厭だ』

『當然ぢやないか……マアそれはそれとして汝其苦しい中で喜代子から受取つた金には一つも手をつけんのか』

『馬鹿な事を云ふな、俺は惡黨ぢやないぞ、其不潔な金を有つてる爲に何なに苦痛を感じたと思ふ』

『ウム……辛ッ』

『何だ』

『……汝の至誠に動かぬものがあるかッ百の大野廣之が來たつて大丈夫だ、行け、行つて大い
に遣つて呉れ』
宍戸の聲は感激に震へて居た。

（一七）

『俺は大野を追ふて出發する前にモ一つ爲なければならぬ事がある、其事にも汝の力が借りた
いのぢや』
『使役つて呉れ何な事にでも用ひて呉れ、俺もあの少年を奪つた時の事は氣に入つた齋が出來
上つた時よりも愉快に感じたよ』
と宍戸は乘り氣になつてモウ腕を捲るのである。
『俺の第一期の作戰は既に終つた、喜代子們の秘密とあの少年が此方の物にしたらモウあの別
莊に止まる事も醜怪な彼らに隨いて化けて居る必要も無くなるのぢや、それで俺に出發の前
に先づ彼們に目の醒める大打擊を與へて遣らうと思ふ、充分に懲戒を加へて遣るのは要之彼



們の利益ぢやからな』
『痛快ッ』
叫ぶやうに云つて宍戸は其計畫を聞くべく熱心に前へ出る。
『喜代子を懲すと共に一人の人間を救ふ事が出來る、それは彼の低能の令嬢ぢや』
『巽伯爵のか、汝に戀してるといふ』
『はゝゝゝ彼女ぢや、喜代子の爲に低能な子よりも猶馬鹿にされて居る伯爵夫人は俺があの雛
子との結婚を承諾した如く欺かれて居るのぢや、それで喜代子奴は俺と雛子と三人連で何處
かへ旅行しやうと云出したのだ旅行中に醜關係をつけて結婚の眞似だけでもして呉れたら又
莫大の金が伯爵家から取れるといふのぢや』
『凄い女だなア喜代子といふ奴はいよいよ……そんな事を露骨に汝に云ふのか』
『それは同類と信じ切つてるからぢや、俺がそれを承諾したのは此處で低能の令嬢を安全に伯
爵家へ引渡すと共に喜代子の爲に欺かれた伯爵夫人に警戒を與へ、一方は喜代子に向つて惡
事の反省を促す好い機會だからと信じたからぢや』
『驚くだらうなア汝が假面に脱いだら……榊直也を名乘るのか』

『其處ぢや、其を俺は思案して居るのぢや』

神木朱衣の變名と共に一切の假裝を喜代子の前に解いて、榊直也の正躰で彼を懲して遣らうか或は此儘の神木朱衣で知れる限りの惡事を責め改悛を促すが可からうか、二つに一つ此方の好きである、と直也は何方が可いかを相談した。

『俺は二重にも三重にも驚かして遣りたい』

と宍戸は畫架に對つて圖を構ける時の心持になつて。

『榊直也を名乘れば少年の事も知れるだらう、且つ大野廣之に對する此方の計畫も覺られる譯だね、其事は構はんかね、神木朱衣で通せば後になつて榊直也と知つて又肝を潰すだらうぢやないか』

『彼奴們を驚かすのが目的ぢやないが大野に對する妨害になつちや可ん、其點からは此儘の方が可いな、此儘で姿を隱して遣らうか』

『左樣爲い、それが可いやうだ、併し姿を隱すといふのは』

『俺は其事を行ふと同時に出發しやうと思ふのぢや、それで明日停車場までは彼奴們と一緒に出掛けて共に旅行すると見せかけて其前に伯爵家へ密かに事の眞相を密告したい、さうした



ら驚いて屹度雛子を取押へに來るに違ひないからな』

『は、、、これは實に痛快を極めるぞ、ウム汝が小說的に構想した趣向は面白い、其時の喜代子は蓋し觀物だぜ』

『それを汝に見せて遣らうといふのぢや俺の手紙を持つて伯爵夫人に面會して呉れ、そしてスグ迎へに來させるやうにして呉れたら可い』

『可し、それは巧く遣る、此前の人買よりは樂で面白い、明日か、明日ぢや待遠いな』

と宍戸は想ふも快きに堪へぬ喜代子に加へらるべき大破壞の興味に肉を躍らせた。

『俺は今から此處で伯爵夫人と喜代子に與へる手紙を書う、汝は其小說で金策をして呉んか、其奴が出來んと何する事もならんからな、三晝夜の努力ぢや』

『三晝夜で書いた！此作をか』

と宍戸は目を瞠つて改めて原稿を綴りを取上げた「野の家」と題した短篇である。

『榊、安心して待つて居れ、汝の尊い努力に較べてこれ位の事が何だ、出來るだけ調金へで來るから心配するな』

## （一八）

暑熱に都落ちの足が動いて停車場は贅を盡す姿繁く一二等の待合のみが頻りに賑やいだ、涼味を八尺の紗に迸した瀧案内の繪廣告を仰いで華奢な男女が煙霞を語り合ふ中を轟々と涼しい國へ汽車は間斷なく出て行くのである。

驛前の高等休憩所の表二階で先刻から硝子越しに往來を眺めながら椅子に腰を下した兩個の貴婦人がある、流行の粹を穿つた輕羅の盛裝を心憎い夏外套に包んで繪の如く美しう並んで居る

「遲いことね、何したんだらう」

と年層の美人は一寸外を眺めて。

「まだ四時前ですわねね、ほゝほ早かつたこと」

「汽車は五時五十分？」

「はあまだ二時間もありますわ、貴女が餘り急いて被居るものだから」

「だつて妾早く神木さんと一緒に汽車に乘りたいから……」



「また彼な事を……鄰子さんそんな事を云ふものぢやありませんよ、男ッてものはムキ〳〵とそんな事を云ふのを嫌ひますよ」

「……神木さんでも」

「誰だつて左樣ですわ」

「妾嫌ほゝしたら何しやう……」

と泣きさうな顏をする、巽伯の令孃雛子である、付添ふた喜代子は神木と一緒に旅行の企てが巧く運んで今日の出立を約束の時間に此處に待合はすのであつた、極度の近眼鏡の下から涙が垂れて折角歌子夫人が丹誠のお化粧が流れさうなので喜代子は苦い窮め顏を解いて。

「だから妾の敎へる通りにしてね、旅行中でも能く氣を注けて下さい、モウ貴女はお孃樣ぢやないのよ、神木夫人ですわ」

「ほゝほ」

と曇つた顏が一度に輝いた、丸い鼻の紐のやうな眼鏡の金緣ばかり、後は觸らば溶けさうな肉付の、締りの無い姿は喜代子と並んで一際に怪しう目立つ。

「ヤア來て居るですな、待つたですか」

と入口に姿を見せたのは神木の直也であつた。

『オ被入い、待つたわ』

『ヤ雛子さん、お待遠いでしたらう……ウムまだ時間はありますな』

と柱の時計を見ながら両人の向うへ掛ける、サッパリとした飛白の單衣に絽の紋付羽織を着た直也の姿を喜代子は凝と見て。

『貴女洋服屋が行つたでせう、妾間に合うやうに急き立て頼んだのよ、拵へなくつて？』

『有難う來たですがね、僕ア和服が好きだから』

『あら人が折角……旅行には洋服に限るわ、妾達も彼地では着る積で用意して來たのに』

喜代子は怨じる如く云つた。

『山北行でしたね、五時五十分でせう』

『はあ、種々考へたけれど矢張筥根が可いと思ひますわ、お嬢さんも彼地がお好きですから……貴方構はなくつて』

『僕ですか、僕は何處でも構はんです、何處までゝも行くですよ』

『ほゝほ彼な……』



と雛子が堪へ切れぬ嬉しさを笑つた。

『喜代子さんイッツ下關まで行きませうか、然すると貴女の付添になるのぢやがはッはゝゝゝ』

『ほゝほ有難う、それは此次に願ひませうね、今度は妾見せて頂く役！』

『御苦勞様ですな』

と直也は起つた。

『僕切符を買つて來ませう』

『そんな事此家へ云付けたら可いわ』

『イヤ一寸買いたい物もあるです、僕が行つて來ます、此處で待つて下さい』

## （一九）

雛子と喜代子の両人が新橋驛前の休憩所へ入つた頃である、芝山内なる巽伯爵家へ玄關前に佇つた一人の男がある、取次の書生は出された名刺の姓字の横へ「御當家令嬢に關する重大事

件に付大至急夫人へ面會を乞ふ」と鉛筆で記された文字を口の中で讀みながら變な顏をして奥へ入つたが間もなく出て來て。

『あの何な御用ですか……奥樣は……』

『夫人は居られる事を知つて來たのだが面會は出來んかね、何な用事ッて取次の君なぞに話されはせん、遇はぬと云はれるのなら强いては賴まん、後悔されないやうに左樣云つて呉れたまへ』

男は引返しさうな氣勢である、次の間から隙見をして居た歌子は周章て其處へ現はれた。

『貴方でございますか山田さんと仰有るのは、失禮を致しました、萬望此方へ』

山田と云はれた男は左樣あるべき筈だといふ顏をして導かれて應接室に入つた、婦人のみに用ひらるゝ善美の裝飾した室の樣子には目も呉れず、山田は洋服姿を傲然と椅子へ据えて。

『貴女が當家の令孃雛子さんの母堂ですかね』

『は姜雛子の母ですが、御名刺に記してありますのは……』

と歌子は不安の面をして手に持つた名刺を卓子の上へ置く。

『其通りです、御當家の令孃雛子さんはお不在でせうね』



『……只今は一寸外出して居るのですが』

『一寸ぢやありますまい、佐藤男爵の妹喜代子に連れられて旅行の途に上られたでせう夫人ッ僕は一切を知つて居る者ですぞ、お隱しになるのは反つて不利益になるといふ事を御注意申して置きます』

と云つて山田は呆れ惑ふ歌子の樣子を眺めながら。

『併し御安心なさい、突然に伺つて斯な事を申上げるのだから貴女は驚かれたでせう、が僕は決して恐ろしい者ぢやないです、貴女達や御當家にとつて最も恐怖すべきものは彼の佐藤喜代子ですぞ』

『佐藤さんが何うかしたのでございますか』

『貴女達を欺いて令孃を恐るべき危險に陷れやうとして居るのです、雛子さんと神木朱衣といふ男との結婚は喜代子が慾を滿す犧牲に過ぎないのですぞ詐僞の結婚ですぞ』

『エッ』

歌子の顏の色は變つた。

『はゝゝゝ交際社會に實明の聞え高い貴女も子の愛に迷ふて喜代子の爲に瞞着されたですな』

『そ、それは何いふ事でございますか』

『神木朱衣といふ男を令嬢が望まれたでせうそれを媒介する爲に仲に立つた喜代子は普通でない令嬢を思ふが儘に魅して貴女達に秘密で尠からぬ金を奪つて居るですぞ、それから結婚を承諾しなゝ神木に強いて令嬢を押付け今度の旅行中に両人の間に關係を生ぜしめて暫時の間の結婚に男と謀し合せて令嬢や當家から思の儘の利益を掌握めやうとする惡むべき魂膽を有つて居るのですぞ』

『……それは事實でございますか』

と騷ぐ心を強いて制へやうとしたが落付ぬ擧動に我子の上を氣遣ふ劇しい憂慮が見ゐた。

『大事實です、僕は證據を此處に持つて居るですがね、夫人、喜代子に連れられた令嬢は旅行の途に上られたが最後悲酸な運命の爲に弄ばれるといふ事を覺悟なさい』

歌子は衝と椅子を離れた、時計は五時三十分を指して居る、汽車は五時五十分の下りである。

『山田さん、失禮ですが一寸……兎も角旅行を止めませう後からお話を承はる事にして』

『ほゝゝゝゝまあ左樣周章るには及びません、幸ひに神木朱衣といふ男が喜代子の如き惡人でなかつた爲に令嬢は救はれたです、夫人、神木から貴女への手紙を持つて來たです、之を讀んだ上で令嬢を取押へに行れても遲くはありません』



## （二〇）

新橋驛前休憩所の階上には汽車の出るのに十分しか餘さぬのを雛子と喜代子がハラハラして神木を待つて、切符を買つて來ると云つて出た限朱衣はまだ戻らぬのである、喜代子は硝子障子を明けて椽に出た。

『何したといふのだらうねえ、モウ汽車が來て居るぢやないか』

獨り呟く後ろへ雛子も立つた、両人は織るが如き往來を目の痛いほど見下したがそれらしい姿は無つた、喜代子は堪へかねて。

『妾、一寸構内を見て來ませう』

『喜代子さん』

と雛子は頓興な聲をして階段を下りやうとする喜代子を呼止めた、目は往來を見た儘で。

『矢張左樣だわ……喜代子さんお母樣が被入つたわ』

『えお母様が？』

喜代子が不審な顔をして縁に戻つた時は伯爵家の自働車は眼下に止つて、歌子夫人が平常の沈着いた狀に似ず、二階に見える両人の姿に足も空のやう急いで下り立つところであつた、自働車の後に隨いた車からは若い男が飛下りた、両人は何事かと迎へに出やうとする間もなく夫人はモウ部屋へ入つて來た、喜代子は何時も人に對する時は定つて笑顔を前の夫人が苦り切つた面のやゝ蒼白く凄味をさへ帶びて居るのを見て早くも普通事ならぬを覺つた、會釋して椅子を出すとそれは見向きもせず立つた儘で。

『雛さん、お前は此方へお出なさい……喜代子さん妾貴方にお尋ねしたい事があるから、妾と一緒に邸へ歸つて下い』

『妾に……あの何事でございますか』

『斯な所で云はれる事ではありません、雛子は妾が受取ります、さ雛さん歸るのですよ』

『お母様……妾神木さんと……今神木さんを待つて居るよ』

『ほゝほ可愛相に何も知らないで……喜代子さん』

と夫人は屹と其顏を睨み据ゑて。



『普通で無い斯な者は……欺く方の罪も普通ではありませんよ』

『……』

喜代子が何か云ほうとする時、夫人に隨いて來た山田がヌツト入つた。

『貴女が佐藤喜代子さんですね、僕は友人から貴女に届ける物を被托つて來たです、お請取りなさい』

『貴女は……』

歌子夫人の鋭い詞に確か急所の傷を蒙つた喜代子は心の動顛に詞も縺れた。

『僕は貴女の善良なる友神木朱衣と兄弟同樣の者です、神木同樣御交際が願ひたい』

云ひつゝ衣囊から包みを取出す。

『神木さんは……神木さんは何方に』

『神木は既に遠い所へ單獨で旅行したですが彼の精神は此手紙の中に封じてあるのです、貴女は先づ此をお讀みなさい』

『神木さんは獨りで……』

喜代子はヨロ〳〵として椅子を捉まへた漸次に青くなる顏を渡された手紙に向けて石像の如く

突立つた。

『それをお讀みになれば事情は直ちに明白になるです……讀んだら何です……』

『……妾の勝手です……貴方は何の爲に妾に干渉するのです、何方へお出なさい』

『はッはッヽヽ、僕はまだ此處に居て貴女の煩悶を見物する權利があるのです煩悶の後の懺悔まで見届て來て呉れといふ委托を受けて居るのですからね』

『……神木さんは妾を……妾を欺して物を奪って……』

と物狂はしう云つて喜代子は其人を追はんとするが如く入口の方へ歩みかける、山田は其袂を掴んで。

『お默んなさい、神木朱衣は清淨潔白の男兒ですぞ、貴婦人の皮を被つて獸類に近い行爲をする貴女に眞の男兒は判らぬ、物を奪つたといふのは此品ですか、不義不正の罪に穢れた紙幣の數をお檢めなさい、それからこれは貴女の別莊に居た間の宿料です、勘定書が添へてあるから魂を落つけて能く御覽なさい』

紙幣の束をベタリと卓子に叩きつけた、喜代子は『あ』と云つて横に倒れた。



## （二一）

午後七時の下關急行が發車する一寸前である、新橋驛の三等待合室に群集で湧立つ混雜の中で隅の方の腰掛に肩と肩を接して密々と語つて居るのはこの汽車で西へ下る榊直也と今の前自分の任務を仕遂けて其報名に駈け付けた宍戸良輔の両人である、直也は宍戸が手眞似口眞似の話を聞いて自然に催さる、笑みを禁め得なかつた。

『昏倒したとは酷かつたな、餘程徹へたのだね』

『徹へるさ、何しろ伯爵夫人の前だらう、伯爵家に對する罪惡の曝露と、それから汝に握られた秘密といふ事に就て両方とも氣死するに足る大打擊だからね俺はそれでも此奴まだ狂言を演つてるなと思つて抛つて見て居たのさ、すると伯爵夫人が周章だして手を合せる樣にして俺に手當を頼むのだ、そして他人に氣遣はれない樣に何とかして呉れといふ御注文だ、阿呆のお姫樣は汝に逃げられたと云つてオウ〳〵手放しで泣く、眞赤に憤つた夫人がオロ〳〵する青くなつて倒れた喜代子の奴めは目を白黑して唸る、イヤ何も珍絶奇絶の光景を演出した

せ、あれは俺の繪よりも奴の筆で作中の材料とさせたかつたよはッは、、、』

『良心に叱責の堪へられないで悶絶したのか、憤慨に逆上せて倒れたのか……氣を喪ふた喜代子が何いふ風に目を醒すかは俺にとつて重大な關係がある』

と直也は深く考へて云つた。

『俺も左樣思つて介抱しかけたところへ夫人の電話で兄の男爵が飛んで來たから、俺は其時にそつと姿を晦ましたのだ、今の樣子で見ると氣の注いた奴を連れて歸つたのだね』

兄の信明が自働車へ喜代子を乘せて行くそれに續いて歌子夫人も泣き入る雛子を强いて連れて歸つた光景は此處から両人に能く見ねたのである。

『今頃は伯爵邸も男爵邸も大騒ぎだらうよ、斯な痛快な事は無い、手紙と金とを打付けてやつた時の喜代子の顔を俺は何時か描いて見せるぞ』

改札が初まつたと見えて詰つた群集が薄くなつて行く、直也は一枚の着替と二三冊の書籍を包んだ風呂敷を小脇に抱へて起上ると、手に握つた紙包を宍戸に渡して。

『汝に受取つた百圓の中俺に半分だけ持つて行く、これは其半分ぢやから汝これを音藏に渡して呉れ、可いかい、そして俺が歸るまで夫人母子を氣を注けて呉れ、頼むよ』



『可し、それは決して憂慮するな、俺が汝に代つて保護する、此方の事は安心して汝充分彼地で活動して呉れ、大野を降參させて歸つて呉れ』

『極力遣る積りぢや、佐藤男爵が最初に大野を誘惑した恐るべき不正手段と喜代子が欺いた小供の事と、この両つを曝け出して最後の忠告を試みたらイカニ大野廣之でも迷ひの夢を覺すだらう、俺は種々に計畫を立て鬪ふてやる鬪ふて勝なけれア置かぬから』

両人は昇降場に出た、宍戸は直也の背に手を觸へた。

『オイ榊、あれを見い、種々の階級の人達が種々の目的の爲に東西南北に動いて居る、けれども恐く此汽車に乘る人で汝ほど美しい勇ましい目的を有つてる者はあるまいよ』

『はッはゝゝゝ誰でも皆な自分の事業は立派に見ねる、彼でも何か頼む所があるのぢやね』

と直也は腮で數歩の前の光景を指した、艶めかしい群に取卷れて女のやうな男が一等室へ入るところであつた、宍戸は顏を難しくしたが。

『オ、清香といふ藝妓は何したね、骨を折つて呉れたといふ』

『彼女か、旅行するといふことだけは通知して置いたが……』

内と外とに立つて忙しう詞を交はす、と笛が鳴つた。

『母子を賴むぞ』

『凱旋を待つぞ』

聲は動く汽車に引張られて聞ねた。

## (二二)

『兄樣、兄樣……』

と安樂椅子の上に半ば身を起した喜代子が呼んだ、今日を曠の盛裝も化粧も滅茶々々になつて了つた、長い病人のやうな窶れが刺々しう顏に上つた、バラ〳〵亂れてかゝる髮毛に手は觸へす腹立さうに左右に首を振ると『ア』と微かに唸いて痛い頭を矢庭に手で押へる。

『呼んだかね、何だ些と鎭靜つたかね』

と云つて次室から入つて來たのは兄の信明であつた、常時の快濶な顏も今日ばかりは暗く曇つて居る、椅子の下へダラリと解けて垂れた墨繪の絹の帶を直して其處へ腰を掛けた。

『兄樣……何したら可いの』



『……何と云つて……まあ早く氣分を愈すより詮術が無いぢやないか』

見合はす顏は互ひに術無げであつた、喜代子は熱い息をホッと吐いて。

『兄樣……何かしてこの復讐を早く打つて下さいよ、それでなけァ妾……』

『打つよりも打れぬ用心を先に爲なければならぬ、彼男の口から秘密をベラ〳〵世間に喋舌られたら何するのだ』

叱るやうな詞に喜代子は又目が眩みさうに感じて突然兄の手をとつた。

『彼な男とは……妾全く欺されたのね……兄樣許して下さい……』

『今更兩人で愚痴を零し合つて見たところが逃げた奴の足が縛られるでもなしさ、兄さんにも過失はある、あの淸香に油斷したのが怪我の原因だつた、彼奴さへ喋舌らなかつたら神木のやうな彼な靑二才に乘じられる譯もないのだ……惡むべき奴は淸香だ……彼奴は俺が今に酷い目に遭はせて遣る……』

と信明はピリッと眉を動かせたが調子を變へて。

『喜代さん、お互の仕事は詭道を行くのだからね、兩人限だよ兩人の外に味方は無いと思つて居なければ斯な不覺を取るのだ』

『左樣思つて爲た事が然うならないのですもの、神木だつて此方の思ふ儘になる積だつたのが中途で顚覆つて、それが又如此ですもの……妾モウ勇氣も何も無くなつて了ふわ……』

『そんな事を云つたつて……新しい勇氣を盛返して兄妹で鬪ふより道はない』

と信明は物を考へる時の癖で眼鏡越しに凝と天井の一隅を睨みつめて居る、彼の奇智は何時も斯した姿勢から飛出すのである、

『電報用紙をお出しなさい』

『其處に』

と指れた卓子の抽斗から紙を取出すと信明は萬年筆を衣嚢から拔いて又少時考へた。

『兄樣、何するの、何したら可いの、善い工風があつて？』

『一切の秘密を知つてる彼の神木朱衣を放つといふ事がお互にとつて何より危險だ、何うしても彼奴を取押へなければならぬがね……彼奴何して今頃逃出したのか俺にはそれが合點が行かぬのぢや……この手紙で見ると旅行すると書いてあるだらう、これが眞實だとすると彼奴大野と何かの交渉を有つてる奴ぢやないかと思はれる、貧弱な文士風情で一旦握つた大金を耳を揃へて返すといふ事は常識ぢや判斷出來ん、何か他にこれ以上得る物があつて其爲に働いて居たのぢやないかと思はれるのぢやが……大野がそんな事をする筈もないからね、兎も角大野へ電報を打つて置く必要がある、大野へ秘密の漏れる事がお前の仕事には一番恐ろしい妨害だからね』



## （二三）

海峽の夜の微白に下りの急行汽車が着いた、潮の匂ひに眠い顏を撲たせつゝ、旅客は驛を四方に散つて行く、榊直也も今此汽車から下りて始めて見る馬關市街を眼の前に驛前の廣場に巨きな體軀を佇ませた。

大野廣之が經營する阿武鑛山の出張事務所が此馬關にある筈で、其處に就て聞けば廣之の樣子が判るだらう、先づ徐ろに敵の陣地を偵察してそれからの戰ひである、と直也は汽車の中で計畫した豫定行動を執るべく靜かに歩み出す、珍らしい土地訛りやら變つた風俗が耳に目に忙がしく入る、道を尋ねて狹い町を行くと旅の情が涌いて來る、直也は巡査に敎へられた方角サツサと進んだ、山の手側の大きな西洋建築で表に鑛山事務所の標札が出て居る、經營者の大野代

議士はツイ此頃東京から歸つて目下其處で事務を執つて居られる樣であると田舍の巡査は同はぬ事まで鄭寧な詞で云つて呉れた、賑やかな四辻まで來るとツイ一丁ばかりの向うに數へられた西洋館が見ゐる、ピチ〳〵跳ね上る鮮魚の荷をぶち明け威勢の可い聲で商ひを始める魚屋の前に立つて直也は目指す事務所の屋根を眺めつゝ心の躍るを覺え暫時立止つた。

廣之が遇ふであらうか、卑怯な嘘僞に我を欺いた廣之が普通の手段で面會するだらうか、屹度避けるだらうとも思はれ再び隱れて了うとも思はれる、遇はぬのは遇ふまで行くが此處を去られては何時と期せられぬ目的の成就遼遠に、痛しい綾子母子の運命はそれを待つには餘りに悲しい虐遇の月日である、我の吉左右を待つ病夫人と少年薫……忠誠の權化たる音藏……俠氣の清香……正しい道彦老人……同胞に等しい宍戸…我を取圍む數多の人々の期待はまことに重い任務である、それを遂ぐべく乘込んだ最後の今拙劣な事して再び廣之に逃げられては臍を嚙む大事である。

直也は斯考へつゝ、直ちに突進しやうかそれとも今一應樣子を探つた上で逃げる術を與へず肉薄らうかの二つを思ひ惑ふた。

朝出の勞働者の一隊が眞黑に群がつて前方から來た、喧々と語る聲は喧嘩の樣である、いづれ



も色の褪せた汗の浸みが黴に吹出た法被を着て、手拭やら麥藁帽やら思ひ〳〵の冠物、柿汁を塗つた樣な顏を眩しい朝日に曝して土踏み轟かせて此方へ來るのである　直也は其風俗を見て土を弄ふ工夫だなと思つた、魚屋の前に來かゝると先頭に立つた一人が濁みた聲で。

『ヨウお光さあ早いぢやないかのう』

『オ、皆な今行つてかの、歸りにお寄りんさんせや待つて居るぞな』

魚屋の店の納簾から白い娘の顏が出て愛嬌よく應へる、草鞋穿の頑丈な足が水のどよむやうに混雜して止つた。

『ヤイ吉よ、我また今日も一番先にお光坊と物云ひさらしたな、畜生ッ』

『はゝゝゝこれで今日も一日仕事が樂だんべい、眞の事たぞ、暗い穴の底でショボ〳〵岩の小便かけられて釣燈さげて働く時でもの、お光さあの顏思ひ出して見くされ鶴嘴が輕いだあ』

『はゝゝゝゝゝゝ』

『ほゝほゝ可笑しい事を云ふてぢや、歸りにお寄りんさんせ お肴拵へて置くぞな』

『お寄りんさんせずに置くものがはッはゝゝゝ』

と笑ひ興じて通る、汽車便で近い鑛山へ稼ぎに行く人々だなと思つた直也は隨げるともなく足

引返して其勞働者の後を停車場の方へ歩いた。

## （二四）

一團の鑛夫隊が停車場前の廣場に現はれた時劇しい汽笛の音に連れて汽車の搖ぎ出した響きが傳はる。

『ヤッ出て了つたッ』

『汽車出たか仕舞つたッ』

と叫けぶ聲を中にドッと諸聲が上る、毎朝此時間に次の驛まで乘つて其處から鑛山まで敷かれた輕便鐵道に依て銅掘の勞働に就く鑛夫が數多居るのである。

次の發車を三十分待たねばならぬ鑛夫們は驛前の茶店へドヤ〳〵と流れ込んだ、最前から一隊の後を歩んで其雜談でこの勞働者達が大野廣之の經營する阿武鑛山の鑛夫である事を確めた直也は續いて茶店に入つて入口の床几に腰を下した。

奥まつた土間に立跨つて乘遲れた汽車を罵る鑛夫の聲は凄いやうであつたがそれが止むと臭い



煙草の烟が濛々と門へ連なる、茶椀片手に店頭へ駄菓子を捻みに出た年の老いた男がある、直也はそれに聲を掛けた。

『君方は何かね、あの阿武鑛山へ行く方かね』

すると老鑛夫は頰張つた物をクシャ〳〵させながら頷いて床几の端へ掛ける、茶をグッと呑んで。

『ハイ左樣でござります……旦樣は鑛山へ行つてゞござりますかの』

と見掛けに寄らぬ優しい土地訛りで、首に卷いた手拭を取つた。

『僕かね、僕は……鑛山へ來たといふ事もないのだが……、何だね鑛山の勞働は酷いだらうね』

『日樣は東京でござりますな、へ、、、鑛山の仕事は迚も旦樣方には解りはしませんハイ、酷いの何のちうてマア此世の地獄でござります、豪法な仕事でござりますい』

『左樣だらうね、それでもお前達の阿武鑛山は鑛夫の待遇が善いので足尾邊りから逃げたのが遺つて來るといふぢやないか』

『はゝゝゝ』

と老鑛夫は堪らぬやうに吹出した。

『旦様ア、東京邊ではそねい事を云ふて居りますかの、ソラ大嘘の皮でございます、何の善い事が……善い事段でございますかい、ソラ以前はな、以前時分は鑛山も樂でございましたが現時はお話になりません、餘所山から來る者なぞ一人も無い代りに毎日々々逃走る者ばかりでございますが』

『鑛夫が逃走するのかね、フムそれは何故だね』

直也は廣之が今の事情を探るべく正直さうな老鑛夫の口を毫るのである。

『何故チラてソラお話せんにや解りませんがの、あの鑛山は以前は此國の舊藩主の所有でございましたい、それを巽の侯爵様がお讓受けなされてから長い間廢坑になつて居たのを今度は又巽様が大野チウ代議士に賣らしやつたといふのでございます、ところがその大野チウ人が來てから鑛山の規則は全然以前とは變りましてな、ドダイ一にも二にも俺們鑛夫の者を虐めて虐め扱く事ばつかりで、本番チウて一人前の腕エ有つた者は一日に八十錢宛の賃金になつて居りましたのにそれが六十錢、その割合で見習ひの運搬夫まで一統に皆賃ふ物に少なうなる、坑に入る時間は長くなる、病氣になつても怪我ア しても治療代は膏藥料まで取立るといふ酷い遣り方でございますから誰ひとり大野の事を善く云ふ者はございません、何百尺といふ暗い竪坑にカンテラ下げて入る度びが此世の暇乞ひとした危險勞働でございますもの、旦様ア、西洋人引張つて來て掘つたら出ると研究したチウのでございますが、銅が出る迄には鑛山の鑛夫が空になるといふて噂をして居るのでございますハイ』



## （二五）

直也は阿武鑛山の現狀を語る鑛夫の話に耳を傾けた、話す方には新手の若い男が加はつて口を合はした樣に大野廣之を罵るのであつた、その云ふところに依ると苛酷の取扱ひに血の涙を呑んで居る數百の鑛夫は何時不平の勃發に切場で岩を裂く爆彈の樣な恐ろしい騷ぎを起さぬとも限らぬとも思はれる、現に若い方は斯云つた。

『儂なざア鑛山といふ山は經めぐつて來て此仕事では隨分種んな目に遇つたものたがね、恐らくこの鑛山の大將ほど亂暴なのも居ませんせ、これで命がけの鑛夫が働くと思つたら大間違ひでさ急に仕事に離れちやア口が乾上る悲しさに皆が堪へて遣つては居ますが今にドンと鑛山が裂けるやうな騷ぎが持上りまさ、旦那ア此方へ御滯留なら序に其騷ぎも見てお歸りなさ

い善いお家苞ですぜはゝゝゝ』

『鑛山は此處から近いのかね』

『ヘイ汽車で此次の驛で下りると其處から輕便車で直ぐです山の麓までは、大野の大將は毎日此處から通ふて居まさ』

『イヤ此二三日はあの別嬪の所へ根を生やかして居るごとあるぜェ』

『何か大野といふ人には婦人の干係でもあるのかね』

と直也は尋ねた。

『ヘイ東京からは獨身で乘込んだと云ひますがね、來ると間もなくこの馬關の藝妓を落籍せて今ぢやそれを鑛山のスグ傍へ妾宅を拵へてお圍ひといふ洒落でさ、坑の中で瓦斯が苦しくつて仕事が出來ねいのは屹度不淨の女を鑛山へ近づけた罰だらうてんでッイ此間は其妾宅を破壞すと云ひ出してね、面白い騷ぎがありましたぜ、鑛夫を虐使かつて己れば かりが好きな事をしやうぢやァ荒稼ぎの仲間が承知しませんや、昨日今日坑に入つたつて誰も仕事なぞ眞身にする者は居ませんからね』

『フムそんなのねかゝそれぢや大野といふ人に面會するのは鑛山へ行つた方が可いね、その妾



宅とかいふの』

『ヘイ彼處だつたら居るに極つてまさ、旦那は大將に御用の方かね』

『一寸遇ひたいのだがね』

鑛夫達は顏を見せて、大野を罵つた事危む樣子である。

『イヤお前達は心配するには及ばんよ、實はお前達を虐待する風聞があるのでそれを探り旁東京から遣つて來たのだからね、決して心配せんでも可い』

『ぢやァ旦那は新聞社の方だね』

と若い鑛夫は嬉しい顏をして。

『オイ皆な此處へ來いよ、此旦那ァ東京の新聞社の方で鑛山の事を調べて俺らの難義を救つて下さるのだぜ』

勇ましく呼立ると奥に憩んた大勢が忽ちに直也の周圍を取卷いた、直也は思ひがけぬ事態になつたのを驚いたが我に不利でない形勢を見て、即座の分別を立た。

『皆靜かにせんにや可ん、いかにも僕は新聞社の者で諸君の難義に同情して態々探訪に出掛けて來たものだがね、喧ましく云つて僕の來た事を覺られると甚だ困る、靜かにして呉れたま

へ』

## （二六）

豫期らぬ事の行がゝりで直也は虐待に苦しむ阿武鑛山の鑛夫共から自分達を救う爲に出張した新聞記者と間違へられたのであるが迚も正面からは大野廣之に近づく事の困難を知つて居る彼は先づ鑛夫に接近して便を得るが可からうと咄嗟に思案を定めて彼らが想像する救ひの神の如き威嚴を態度に見せた。

『僕はそれからお前達の鑛山へ行つて實地に事情を能く視察しなければならぬ視察した上では大野といふ男に面會する必要もあるだらう、そうして調べた狀況は一々東京の本社へ通信するからお前達がイカニ世間の目を離れた地の底で悲酸な運命に泣いて居るかといふ事は忽ち社會に發表されるのぢや、有力な新聞の記事は社會の反響を招かずには置かんからね、お前達が虐待に惱まさるゝのも今暫時の間ぢやから辛抱するが可しい』

と云つて一時の方便ではあるが心からの同情を傾けて諭した詞は荒くれた鑛夫共が涙を流して



喜んだ。

斯して鑛夫に歡迎された直也は、密かに自分を鑛山へ連れて行つて呉れと賴んで一も二もなく承諾させた、次の汽車で鑛山に近い小驛に下り其處から運搬車で直ちに麓まで運ばれる、屢々大投資された鑛山の設備は素人目にも驚くばかり立派に整ふて居る、發電所の煙は事務所の新しい甍をかすめ山腹を帶の如くに這ふて連峰の彼方へ霞む、眞夏の烈しい日光は摺鉢形の全山を隈なく鮮明に照らし出した。

山腹に事務所があつて其處で出入の鑛夫は點檢を受けるのである、直也は一緒に來た鑛夫に再會を約して麓に止まつた、鑛氣にギラ〳〵する磧の對岸には僅かに殘つた毛のやうに薄い樹立があつて、赤禿山の裾を隱して居る、其處には山の鑛夫によつて店を營む十軒ばかりの商家があつて、大野の妾宅といふのもその町の盡れにあるといふ事を確めた直也は丸木を束ねて流した船橋のやうなのを渡つてその町に入つた、上流數丁のところには大きな架橋工事が始まつて出來上つた曉には大野橋と命名されるといふ事も鑛夫達の話であつた。

敵前偵察の心持で直也は磧に臨んで片側町をズン〳〵と歩いた、蟬時雨に暑い日はせり上つて蔭の無い一文字道の砂は漸く熱して來る、頭を失ふた地藏尊の立つ辻に佇んで赤蜻蛉を追つて

遊ぶ小供にそれとなく目ざす妾宅の在所を聞うとする時向うから一輛の護謨輪が走つて來る、こゝらの俥にしては贅澤な美しさに目を留めて見ると俥上の人は大野廣之であつた、直也はハッとして直に前路に立塞がらうとしたが急に身を轉じて帽子をグッと傾けて地藏尊の後へ小さく隱れた。廣之は之に氣付ぬらしく子供の群を蹴散らすやうにして行く俥上に意氣揚々としてバマナ帽の姿を嚴かに構へた。

『オイ今俥で通つた人の宅は何處だね、知つて居れば敎へて呉れないか』

と直也は俥の後ろを目送しつゝ小供の中の大きいのに尋ねる。

『ハイあれ山の大野樣ぢやのう金平』

『オウ大野樣ぢや豪法えらい人ぢやぜェあの人』

『イヤあの人の家を知らんかね』

『宅そこぢや』

と竹の先で雜木林の彼方を指す。

『あの奇麗な格子のある所ぢや、あそこには美しい奥樣も居られる』



## （二七）

其所には綺麗な美しい奥樣がゐると云ふ子供の一語が、直ぐ大野の妾の姿を直也の眼前に泛べさせた、磧に臨んだこの片側町の盡所、雜木林の蔭に新築の木組みを覗かせてある妾宅、夫は絞り取つた鑛夫の生血に彩られ膏汗で築き上げられた肅洒な一構ゐである、其所に傲然と控ゐてゐる大野の姿が眼に泛んだ。

煙突から吐き出される毒々しい鑛煙も、此鑛山の魔王たる大野の威に恐れて流れるか、全山の草木、生氣なく疲せて褪せた色彩の中に、此妾宅の四邊のみ、青々とした雜木が遶つて、鑛毒に濁つては居れ涼しい流れに望んだ頗る景勝の地である。

『美しい奥樣と、今俥で通つた人と夫から外に誰か居るかい』

直也は又小供に尋ねて見た。

『ウー、下婢が居るぢや、まだ……』

と考へるやうな眼付きをして。

『他には知らんぜェ』

『さうか、奥様と云ふのは今居るか何うか知ならいか』

『奥様は居ッてぢや、ホラ、向ふの垣の所から先刻外を見て居られた』

『さうか、有難う』

直也は小供に會釋して其儘踵を巡らした町を盡外れると直ぐ雜木林にかゝる、寛げた胸元へ一杯に木下蔭の涼風を入れながら妾宅へ乘込でからの作戰を繰り返しつゝも足を運んでゐる中、直ぐ其家の前へ出た、思つたよりは廣やかな、萬事不自由な、鑛山町にしては恐ろしく數寄を凝らした造作で、まだ木の香が新しい。

格子戸へ手を掛けて見て一寸躊躇したが思ひ切つて引開けた、戸は閾のきしりも滑らかにカラリと一杯に開いて、氣魂しい鈴の音と、ガタンと云ふ激しい音が、此邊り眞白晝の靜寂を破つて家内に響き渡つた。

『オヤ、お人が見ねた、誰方か知ら』

と呟き〳〵玄關の障子を開けた下女の前へ押つ冠さるやうにして突ッ立つた直也の偉大な姿を下女は見上げて腰を落してマザ〳〵と見入つた切り、被入つしやいましとも云はず、外した淡



紅色の襷が袂から青い疊の上に流れ出てゐる。

『アノ……と』

と云つて直也は一寸言ひ淀んで立ち竦んだ。

## （二八）

虎穴に入つて斯うして玄關先に立つた直也は、鑛夫の語つた何百尺の坑の中へ引入れらる心持がする『戰線に立つて何たる不覺ぞ』と我と罵りながら、きよとんとして見上げてゐる下女の顏を瞰下した。

此瞬間にも直也は傷ましい綾子と薫の運命を思ふた、遙かに母子の爲に旅に上つた自分の任務は是を最後の戰ひとして今日の今から……イヤ既に火蓋は切られたのである、敵壘深く肉迫してゐるのであると思ふと、意識が俄かに明瞭として滿身の勇氣に五体が引緊るやうに覺ゑるのであつた。

今護謨輪の俥を飛ばした大野が此妾宅に入つたのは確かである、此家にあるのを突き止めて押

しかけた以上、豈夫面會を拒む事は出來まいと靜かに一葉の名刺を出して。

『是を大野廣之さんに取次いで下さい』

澁々受取つた下女は。

『アノ鑛山の御用なら、山の事務所へ行つてつかアされませ』

とひねくり〳〵又直也の顏を無氣味さうにヂロ〳〵と見る。

『鑛山の用ぢやないから此方へ伺つたのです、兎も角此名刺を見せれば判るんだから、早く取次ぎなさい』

女中は面を膨らせて立起つた、例の袂から飜れた淡紅色の襷を垂らしながら奥へ行つたが、間もなく一層嶮しい顏色をして出て來た。

『此所の家は大野でも大野が違ひます、貴方のお尋ねなさんす廣之たら何たら云ふ人は此家ぢやないぞな、妾叱られたがな』

物乞ひを逐ふやうな手付きをして其儘女中は奥へ入りかける。

『お待ちなさい』

聞えぬ風をして行かうとするのを。



『オイ待たんか』

直也は大喝した。

『大野廣之氏の家ぢやない？、今の名刺を主人に取次いで、さう云はれたかね、此家の主人が……フーン』

再び欺かれる我と思ふのかッ……直也は憤怒を一時に發して。

『夫ぢやモ一度取次いで呉れ、榊直也が其麼に恐ろしくて遇はれないのかつて……ウン、其方で遇はなければ此方で遇ふて遣ると、モ一度云つて來い』

『……』

女中は顏色を失つてゐる。

『オイ、早く行け、其方で遇へんけりやア此方で遇つて遣るとさう云つて來い早く行かないかッ、馬鹿ッ』

破れ鐘のやうな聲で吐鳴つた、女中はもう眞つ蒼になつて轉げるやうに奥へ飛んで行つた。

## （二九）

色を青くした女中が奥へ駈込むと暫時して今度は静かな足音がして若い女が其處へ現はれた、際立つた大丸髷の後れ毛をチラ〳〵光る指で押へて團扇片手に物馴れた風情は裙を踏まへて屈み心地に艶めかしい様子にもそれと知らるゝ妾宅の主婦であらう、直也は我を拒む廣之がどんな手段をして再び逃げるかも知れぬと油斷なく目を配りつゝ仕義によつては直に奥へ踏込み呉れんと片足を疊に上げて屹と奥を見込んだところへ、愛嬌を湛へた美人が落着拂つて前へ立つたので一寸氣を抜かれて出した足を引いた。

『あの貴方榊様で居らしやいますか、さ萬望此方へ、只今は女中が不束だものですから飛んだ間違ひを申上げてまことに失禮を、と萬望此方へお通り下さいまし』

打つて變つた挨拶に直也は力抜けがして握た拳の遣り場に帽子を脱いで提つた。

『僕、榊直也です、大野廣之氏が面會しやうと云はれるのですかッ』

『はゝ、主人がお目にかゝると申します、お通り下さいまし』



直也は導かれて女の後ろを歩みつゝ、此女が馬關の藝妓を落籍したといふ妾だなと思つた、そして垢ぬけのした風俗にフト清香の事を思ひ浮べたのであがる、其瞬間の感情は斯る急迫の場合に餘りに不自然な餘りに悠長な事でありながらそれが譬へば決勝線の前に味方應援の聲を聞くが如き勇氣を與へる強い力であるかに覺ゑられて直也は心の琴線が高く鳴り響く。

『暫時此處でお待ち下さいまし』

座蒲團を進めて女の去つた後を直也は不安の胸を抱いて一度びは無禮にも我を逐歸さうとした大野が忽ち妾をして迎へ入れしめた打つて變る態度に其心事を疑ひ惑ふのである、疑へば斯る餘裕の間に何事かの策略をめぐらして己れに肉薄する敵を殪さうとするのではあるまいか……遮莫彼に佛神を欺く詭計あるとも我には天地の心と許す赤誠唯一つ、正邪を最後の一戰に期し長驅して本營に來つた我をいかに欺き僞はらんとする醜き術ぞ來れ廣之……隔ての襖を敵の城塞と睨み据ゑて直也は其人の出て來るのを今か今かと待ち構へた。

『ヤア君でしたか』

と聲をかけて廣之は打寛ろいだ浴衣姿で悠然と現はれた、直也は屹と其面を見ると嚴然たる姿勢に張り切れんばかりの力を籠めて。

『大野さん、榊直也です、約束を履行したい爲に態々遣つて來たです、人道と正義の繩で縛られた貴方が僕から遁れやうとしたつてそれァ駄目だ、繩の端は僕が握つて居る、モウ卑怯な眞似は爲さらんが可んい』

廣之は平然として坐に就くと大きく口を開けて笑つた。

『はッは、、、、榊君、君は相變ず神經過敏ぢや、それぢや困る、まあ可い、それは可いが何して此方へ來ましたね能く訪ねて呉れたねね』

## (三〇)

いかなる辭で我に遇ふだらうかと直也は廣之との會見に先づそれを思ふた、明日との堅い約束に我を欺いて東京を立つた辯解は何と云つてするだらうかと、其人を眼前にしては欺かれた憤りの心頭に燃えるが中に興味を以て始めての挨拶を待つのである、で廣之が事もなげに云放つた今の詞が想像にも及ばぬ餘りの事だつたのに彼は暫時呆れた儘淺い笑みを絶ぬ相手の顏を凝視るばかりであつた、廣之は委細構はぬといつた風で。



『殺風景な鑛山生活ぢやから折角の訪問に何の風情もないがマア緩乎して行きたまへ、鑛山も君方素人には珍らしいだらうから見物を……』

『イヤ僕はそんな閑な遊びに來たのぢやないです、そんな事の爲に貴方との會見を約束したのぢやない』

と直也は砲火相見える戰ひに突進した。

『大野さん、貴方は紳士の體面を保つ爲に先僕に向つて謝罪を爲さい謝罪をするのが當然とは思はないですかッ』

威丈高になつて命令するが如く云つた激しい詞は權勢にも富貴にも屈せぬ彼の魂が宛からに動く聲である。

『俺に謝罪せいと云はれるのかね』

と廣之は洒々たる態度で。

『はッは、、、君はあの時東京で會見しやうと言つた事に就て俺が君を欺いたと云つて居るのだね、はッ、、、君そら誤解だよ、あゝ然かね、その事で君は憤つて居るのか』

『左樣です、苟も第一流の紳士を以て任ずる貴方達が詐欺瞞着の惡德を犯して平然たる態度に

至つては僕は憤慨に堪へない、而も飽くまで非を飾るべく辭を弄して居られる卑怯な振舞は何といふ醜態ですかッ』

『はッはゝゝ君ッラ全く誤解だよ、俺には君を欺いたり瞞着したりする必要は些とも無いからね』

『誤解といふのは何いふ事ですか、貴方は僕は向つて明かに會見を約束したぢやないですか、僕の話を聞くべく特に一日東京に留る事を約束して置きながら何らの交渉もなく此方へ來られたといふ事は人を欺くといふものぢやないですが、何が誤解です、大野さん、貴方はモウ少し堂々たる態度で僕に應接して下さい』

『はッはゝゝゝ可ん、可ん、君の硬直は愛すべしぢやが左樣神經質でも困る、君、ナル程君と又遇ふ約束はしたぬ、けれども其後に至つてそれ以上の緊急を要する用向が出來たで俺は急いで此方へ下つたのさ、君方とは違つて我輩は公私兩面に複雜な交渉を有つた身體ぢやからね、左樣總ての人に滿足を與へるといふ譯には可ん、そこらは君諒して呉れなくちや困るよはッはゝゝゝは』

『左樣ですか、イヤ公德といふものゝ程度が貴方らの紳士仲間にあつてはそれ位ゐと云ふ事さへ豫め知つて居れば憤慨に當らん事です、且つそんな事は枝葉だ、貴方は約束に背いても僕は實行の爲に遣つて來たのだからモウ可しい、謝罪は強ゆべきもんぢや無からうはッはゝゝゝ』



直也は憐むやうな目で廣之を見つゝ笑つた。

『大野さん、これからが僕の使命です、貴方は僕の好意の忠告に對して答辯をしやうと云つた事をお忘れぢやありますまいな、綾子夫人や薫さんの身上に就て貴方の答辯を聞くべく僕は態々東京から訪問したのです、あの御答辯が承はりたい』

## (三一)

『はッはゝゝゝ君はまだそんな事を云つてるのかね』

と云つて廣之は呆れたやうに直也の顏を見る。

『すると君は眞個あの答へを俺から求める爲に此方へ遣つて來たのだね、それは驚いた』

暫時詞を切つて、何處まで餘計な世話を燒く男だらうといふ思ひを不愉快相な色に現はして。

『榊君、君は何故そんなに我輩の私事に干渉しやうとするのかね、ナル程あの時俺は君の熱心な忠告を謝する爲に答辯しやうとは云つた、それは云つたが併し我輩の任意だね、決して答へなければならぬ義務もなければ君に強ひる權利もある譯ぢやなからう、……』

『イヤ貴方に答辯の義務があり、僕にそれを要求する權利があるです、それはお互ひに人道といふもの、存する世界に生れた有難さで、貴方は神に向つてその恩寵を感謝すべきですぞ』

と直也は此聲肺腑を貫けよとばかり、力を籠めた詞を續けた。

『大野さん、貴方は綾子夫人や薫君を捨た代りにこの阿武鑛山を獲た事を喜んで居るのですなイヤ莫大な富を掌握せん爲に平和な家庭を破壞しられたのですな、そして今は富貴權勢の幻影の前に醜惡極まる飽滿を貪つて居られる、併し大野さん、貴方の夢は長くはありませんぞ幻影を吹拂ひ迷夢を打破る機會は既に到來したですぞ』

廣之は何をと嘲り氣味の微笑を浮べて。

俺の爲に機會が來たといふのかね、器械の到着なぞは最も可い辻占だはッは、、、』

と判らぬ酒落めいた事を平然として云つて。

『何な機會だね、俺が夢を見て居るなら夢でも可い、さ、我輩の夢を醒して呉れる樣な機會だつたら歡迎しやうぢやないか』



直也は聲を勵まして。

『地下の黄金を獲て不義不正の富に誇らんとする爲に人道の光明世界に遠ざかり暗黑の地獄に墮ちて行く憐むべき……その貴方を救ふ機會は今眼前に來ましたぞ、大野さん、僕は貴方に覺醒を促がす機會です、貴方が彼の巽一派の奸策に籠絡されて民友黨に多年の重望を負ふ身でありながら正義の信頼に反いて一朝にして敵に降り、その結果として貞操な夫人を去り罪のない小供を苦しめるに至つた、その最初の動機から鑛山を報酬として尊い精神を賣つた秘密の顚末を一切僕は承知して居るのですぞ、イヤ貴方以上に彼巽伯や佐藤男爵の奸計を知り盡した僕は貴方に告ぐべき奇怪な事實をも齎らしたのです』

直也は正面から攻め寄する事の徒らに廣之の反抗を買ふに過ぎない事を思ふて、清香から獲た秘密の口を解きにかゝつた、

『貴方は小仙といふ藝妓の爲に巽伯から預かつた巨額の金を奪はれたのが變節に就いての有力な動機でしたでせう、然るに其小仙といふ婦人は全く巽伯や佐藤男爵が貴方を陷れるに用ひた人形であるのですぞ、貴方は此事實を知りますまい』

## （三二）

小仙の名に定めて顔の色を變へるだらうと思つて直也は凝と廣之の樣子を見つめたが彼には一向深い刺戟を與へたやうにもなかつた、落着き拂つて悠々と葉卷を吹かせ煙の行衛を眺める顏は他人の前をも忘れた風である。

『大野さん、貴方は小仙といふ婦人の名を聞いて當時の事に何な感じを抱かれるですか、貴方から大金を奪つて姿を晦した小仙といふ藝妓は其實巽伯爵の意を受けた佐藤信明が貴方を退引ならぬ窮境に陷いれる爲に使つた木偶であるといふ事を知つたらいかなる感があります か』

と直也は疊みかけて逼つた、廣之は相變らず山の如く泰然と構へ聲の調子も靜かに應へた。

『小仙といふ女の事なら君よりは俺の方が詳しいよはッはゝゝゝ』

意味あり氣に云つて笑つた。

『無論僕はそんな女を知る筈はありません、併し貴方も其女が巽伯や佐藤の廻し者といふ事は



知らなかつたでせう』

『はッはゝゝゝ榊君、君は實に正直な男だね』

と云つて廣之は又止處もないやうに大笑ひをした。

『君の眼から我輩と彼巽や佐藤們とを較べて何方が賢いやうに見へるかね』

異樣な問ひを發して廣之にニヤリ〳〵と笑つた。

『僕の目からはあの一輩は勿論貴方も大きな愚か者ぢや』

『ほッはゝゝゝ人各見る處を異にするからね、俺に曰はせると君も正直過ぎて愚に近いよ、君東京から俺の爲に來たといふのが事實ならその勞に酬ゆる爲に君に紹介する者がある君は今遇つた筈だがね』

と云つて手を鳴らした、暫時すると酒肴の盆を持つて先刻の丸髷の女が入つて來た、廣之は目で何か通じて自分の傍らへ坐らせる、女は改めて直也に會釋をした麥酒瓶を拔きにかゝる姿態から決して普通の女では無いて直也にも解つた。

『僕は酒なぞ飲んで居る隙は無いですから無用にして下さい』

『榊君、そんな事をいふもんぢやない、君まあ暫時堅苦しいことをいふのを止めて我輩とつき

合ひたまへ、君に紹介したいのは此女ぢや、驚いちや可んよ君』
廣之は女の顔を見て笑ひながら云ふ。女も『ほゝほゝ、』と笑つた。
『君、これが君今云つた藝妓小仙さ、今は我輩と同棲してるのぢや、ね、此女に對しちやア君よりは俺の方が詳しからうぢやないかはッはゝゝゝ』

（三三）

直也は『エッ』と思はず驚愕の聲を漏らして女の顔を見た、この女が小仙？、それが廣之の妾？……、呆れ惑ふて物を云ひ得なかつた。
『はッはゝゝゝ何だい、君此女が我輩の所に居やうとは恐らく巽伯爵も佐藤男爵も知るまいよ君が驚くのも無理はないさ』
小仙は晴れやかな笑みに美しい顔を飾つて愛嬌滴るばかり。
『あの和洋酒も持つて參りました、貴郎召上つてお盃を』
と廣之の酌をする、注がせながら。



『榊君、君は我輩の秘密を何うして知つたか知らぬが、君達が秘密と思ふ位ひの事は我輩にあつても何でもない事なんぢや、イカニモ此女を道具に使つて我輩を苦しめたのは伯爵等の智慧ぢやが敵の糧に賴る計略は我輩の方にチャンと講ぜられてあるのさ、惡の上には惡ぢやはッはゝゝゝ』
直也は差れた盃を受けやうともせずハッタと廣之を睨んだ。
『惡に墮ちて自ら其惡を誇る程貴方の精神が腐敗して居やうとは思なかつたそれぢや貴方は巽佐藤らの爲に陷れられたといふ事を知つた後にも猶覺醒しないで欺き合つて來たのですな、敵たるべき此女を身邊に置いて得意で居るとは實に言語同斷ぢや、墮落の極ぢや』
と憤怒の聲は激しい。
『僕に面會を約しながら避けて逃けられたからまだ良心の刺戟があると思つたのは過りだつたすると大野さん、貴方は何處までも自分の非行を遂げやうとするのですな、いかなる忠告にも耳を覆うて飽くまで惡を貫かうといふ決心ですな、最後の御返答が承はりたい』
『これが非行といふのかね、我輩の行ひが墮落といふのかね、その審判が聞きたいのぢやが』
と云つて廣之は美人の酌を左も快さうに甘い酒の香を吹きつゝ、肩聳かして我に逼る猛烈な直

也の態度を巧みに避けて他を語つた。

『まあそんな事は癈さうぢやないか、それより君に我輩は聞きたい事がある、君何だい一番我輩の力になつて呉れんかね、君の硬直は實に頼しい、今我輩は鑛山の方の事業で腹心たるべき人間を物色してるのたがね、君一つ宗旨を變へて我輩の番頭になつて呉んかね、左様して近づいて呉れたら大野廣之の眞相も判るさ、我輩が中途にして方針を變へた理由も主義も合點の行く時があるよ、君だつて其方が利益だ徒らに何の報酬も利益もない詰らん事に奔走して可惜成功期を潰すのは愚ぢや、何だね、我輩の爲にも君の爲にも一番考へて見て呉れたまへな』

直也は悲憤の涙を胸にためて、忌々しい詞を耳に入れぬやうに遙かに綾子と薫の身の上を思ふた。

『君その方が利益だよ、我輩は屢々君が今歩いてる人道といふ道も通つて見たがね、案外に詰らないものさ、君が……』

『お默んなさい』

と直也は相手の詞に大喝を被せた。



『僕を墮落の味方とするよりも正義の敵として救ひを求めなければならぬ時が來る事を覺らぬのですが、その不覺の爲には貴方は毒婦喜代子にも欺かれて居るのですぞ』

（三四）

直也は席を蹴つて大野の妾宅を去つた、小仙を妾として平然として居るに至つてはその根强い墮落の程度も知られ聲を枯す我忠告も覆はれた耳には入るまいと思ふと、一たび退いて攻勢を轉じるの他に此場合策の無い事を知つて廣之と別れたのであるが、直也が不義不正を叱責する激しい態度に引かへて廣之は何處までも悠然とした樣で。

『君そう憤らずに能く考へて呉れたまへ考へが決いたら何時來て呉れても可い出來得る限り優遇しやうぢやないか』

と衣食を求めに來た人に對する口吻で、物をも云はず立去る直也を玄關口まで送つて出た。

『僕は貴方を醒覺させねばならぬ天職を有つて居る、この醜惡極まる夢から覺めて昔の大野廣之氏に復活されるまでは僕は何處までも貴下を去らないから左樣思つて下さい』

とは直也が最後に云つた詞である、廣之は之に應へて。

『面白い、俺は又君が忠告なんテ間違つた態度を執る間は此限り決して遇はないから左様思つて呉れたまへ、正義だの人道だのと因習的な陳腐極まる説法で俺に臨まうとするのは大間違ひだ、それよりは俺に隨いて早く富を獲る考へを起したまへ、俺は切に君の醒覺を望むよ』

と斯云つて物別れに別れたのである。

直也は遙々後を逐うて苦心の末に漸く捉へた廣之がこれだつたので、元より容易なるまじく覺悟した事ながら、他人を動かす事の出來ぬ自分には畢竟赤誠の力が足らぬのであらう、と寂しい事を考へつゝ元來た道を歩んだ。

海拔何千尺の銅山の頂きに黑い雲がかゝつてそれが漸次と展つて行く、發電所の高い煙突から煙は壓へつけられた樣になつて朦々と麓へ亂れ散つた、夕立だなと思つて直也は空を仰ぐと大粒の雨がヒヤリと顏を撲つた、間もなく颯と風に乘つて白い兩脚は南から北へ盆を覆へす勢ひで通つた、裾と肩とを引まくつて駈足で先刻憩んだ茶屋の軒へ飛込んだ時は着換も持たぬ身が肉衣までビッショリと滴が垂るやうに濕れた、生溫い冷氣が全身を襲ふとそれが昂奮した神經を水の火を消す如く鎭めにかゝるやうに思はれた。



『其處は飛沫がかゝりますからお客樣此方へお入りなさんせい』

と奥から老婆の聲が聞へた、直也は此時泌々と旅といふ心持を味はうた、親切な老婆の云ふが儘に着物を脱いで絞つて乾かしにかゝつた、モウけろりと晴れた雨は遠い連峰の彼方に薄ら雲を殘し日は赫々と奇麗に洗はれた往來の砂に輝いた。

『お客樣は旅をなされますのかの』

と土間に流れ込んだ水を掃き出しながら尋ねる。

『左樣だ、東京の方から來たのだがね』

『東京からでござりますか、まあそれは』

曲つた腰を伸しつ、直也の顏を見て。

『お客樣東京は善い所でござりますそうなな』

『東京かね、東京は善い所ぢやないよ』

と云つたが直也は急に胸を突く憂愁に眼を閉ぢた、我が喜びの音信を待つ綾子夫人や薫や、音藏の事なぞが現然と其處に浮くのである、汲まれた澁茶の冷め切るまで直也は腰を掛けた儘深い沈默に入つて居たが、軈て面を上げて眩しい外方を見た、茶店の向ひ側の空家の壁に太い文

字の貼紙したのがインキでボタ〳〵打つた圓い印が今の雨で洗はれて赤い汁が繪のやうに傳はつたのが此時フト目に入つた、鑛夫募集といふ字を讀んで直也はッカ〳〵と其下へ歩んだ。

## （三五）

直也が目をとめた貼紙は此處の鑛山の勞働者を募る廣告であつた、それを繰返して讀むと茶店の椽に立戻つて。

『鑛山で人間が要るんだな』

『ハイあれゝ年中でございますぞな』

と老婆は鑛山の事なら坑の底まで明るいやうな物の云振りをする。

『何時でも人夫が足りませんの、それといふのがお客樣地獄を生でございますけにな』

と卒直な詞で鑛山の現狀を語るのであるが、それは直也が今朝鑛夫達から聞いた虐待の事實と變らぬものであつた。

『すると其大野といふ人の所有になつてから人夫の使ひ樣が酷くなつたのだねそれで不平が絶へないといふのだね』



『ハイ左樣でございます以前はな、銅が出ても出いでもそれ〳〵生活には困らん樣に仕法が立てございまして此町一統古くから鑛山で皆が喰べて來たのでございますが、それを今度の大野チウお方になつてから皆改良々々〳〵で下の喜ぶ事はドン〳〵廢止になりますもんぢやでな』

老婆は軒端を壓する山の頂きを仰いで、渦と噴き出す煙突の煙を左も心地惡げに額の皺を深くして眺めた。

『大野樣の改良々々〳〵で鑛夫も町の者も皆が弱ります、今まに鑛山も町も潰れるじやろと申しまして』

大野の經營よろしきを得ない爲に怨嗟と憤怒は山にも町にも滿ちて居る事を知つて、直也は遠からず大きな騷動が持上ると云つた鑛夫の詞を思ひ合せた、そして何事か深い決心をして軈て茶店を去つたのである。

其日の黄昏町盡れにある長門屋といふ木賃宿の一室に客となつたのは直也であつた、表に掲げた鑛山人夫口入所とした看板が彼を此宿に引つけたのであつた。

亭主らしい男が硯箱と紙を持つて狹い梯子段を上つて來た、突立つた儘粗暴な詞遣ひで。

『お前かの鑛山で稼ぎたいチウのは』

「僕ぢや」

『僕ぢやァ云ふてお前書生さんかね』

と亭主は怪訝な眼を向けた、直也は紋付の羽織を何處へ隱したか、皺になつた着物をダランと着て寢轉んで居た。

『體軀はお前豪法巨大いが力があるけ力が、鑛山は荒稼ぎぢやぞな』

『腕力は自慢ぢや、何か骨を折つて入れる樣にして下さい、弱つて居るのでね』

『弱らんもんが來るかいの、皆喰ひ外して鑛山へ落るのぢやはゝゝゝ』

『手續きは面倒かね』

『ウンにャ今なら簡易ぢや、鑛夫が何ぼでも足らん時ぢやけに、俺が判しさへすればスグ日が日でも入れる、その代り七十錢といふもの口入料が居るぞな、そりや貰ふ錢賃が定るで其時差引いたら可ねのぢや』

『イヤそれ位ひの金はまだ殘つて居るだらう、僕は前金で上げるから其代り明日から鑛山へ入れる樣にして下さい』



『ホお前金有つて居てかい、ソラ話が早い、そんなら此紙へ生れ土地と名前書いちやァたら俺が事務所へ届けて置いて上げる、明日朝一緒に連れて行かが』

と鑛夫志願の零落者に其例の少ない周旋料の前拂ひといふので亭主は始めの調子をズッと狂はせた。

『何かね、鑛山へ入るとなると山の大將に遇ふのかね』

直也は何氣ない風で尋ねた。

『大將チウのは大野樣といふのぢやかの何のソラ豪い人ぢやから滅多に顏見る事は無い、銅糞見たいな鑛夫の顏見る隙があれァ繪にかいた天人より別嬪さァのお妾の所へ行てぢやがはゝゝゝ』

其夜種々の勞働者が鼾の聲に更けて行く木賃宿の一室に直也は筆を執つて細々と東京への手紙を書いた。

## （三六）

人の情は藥よりも能く利いてさしも重かつた綾子の病はモウ床を離れるほどに快く癒えたのである、隨き添ふて看護に力を盡した母親絹子と音藏の喜びは譬ふるに物もなかつた、日蔭の草の手入れ行届く沃土に移し植ゑられた如く薫は目に見ゐて發育盛りを健康に生ひ立つた、直也が不在になつてからは病苦の薄らいだ綾子が教育に深い注意を拂つて、直也の教授振を其儘に形式よりも精神へ精神と、等閑ならぬ薫陶を注いだ。

『お母樣、榊先生から手紙だッ』

と薫は勇ましい聲を上げてバタ〳〵と入つて來た。

『榊樣から？』

『榊さんからお手紙かい』

と絹子も入つて來た、直也の消息は人々の爲に此頃の雨よりも待たれたのである綾子は直也其人を見るやうな筆勢躍る太い表書を凝と眺めた。



『急としてありますから音藏が居ないけれど讀みませうね』

『早く讀んで御覽よ、其後の事が詳しく判るだらう、矢張鑛山まで行れたのかねえ』

直也から來る手紙は音藏に立會はして讀む事に極めてあるのだつた。

『左樣です、山口縣まで行つて頂いてるのですよ……』

『この暑いのにねえ』

綾子の病上りの鋭い神經は忽ち涙催すほど悲しう搖ぐ。

『お母樣……本統に妾斯して居ては濟みませんわねえ』

『又そんな事を……それより早く其お手紙を讀んで御覽なさいよ』

綾子はソッと目を拭いて手紙の封を切つた。

『――其後御病勢いかゞ、日に增し御快方にあることを確信し小生は喜び勇みつゝ豫定の如く猛進しつゝあり、然るところまだ〳〵小生の誠意人を動かすに足らず努力の及ばざる結果第一回の報告としては頗る不愉快なる通信を認むる事の餘義なき面目なき次第に候、そは大野氏の態度却々頑强小生の絶叫も覆はれたる耳に入る由なき事に候併しながら小生の事業はこれからなり足らざるの誠意に鞭ち大勇心を發揮し大野氏は云ふに及ばずこの鑛山をも動かさ

ねば止まざる抱負の實行に只今より着手いたし候間御安心下さるべく即ち明朝より小生は鑛夫といへる新生活に入り申すべく萬事手筈相整ひ候第二便には快心の御報道を致し得べし、薫君の御教養は御病氣加養と共に最も大切、音藏君よ、我らは既に敵の本壘に逼れり、勝利は最後の五分間なり、不在を頼む、阿武鑛山の麓に於て榊直也認む――』

## （三七）

綾子の双眼は涙が一杯になつて、披げた手紙の文字が朧ろにかすむ、耳を傾けて聞いてゐた母様絹子も。

『――ア……』

と云つた儘、其手紙の上から眼を放して綾子の顏に移した、胸が一杯になつて口も利けぬらしい。

『お母様、榊先生は何うなすつて……鑛夫つて鑛夫で鑛石を掘るんでせう、ねお母様、先生が鑛石を掘るんですか』



薫は綾子の膝へ手を掛け搖ぶるやうにして下から涙顏の母を見上げながら。

『先生が何故鑛山で鑛石なんか掘るんですの、鑛石を掘るなんて地の底でせう、深い〳〵坑道の中なんでせう、太陽の光りも見ない所なんでせう、ね、お母様、さうなんでせう』

『ア、さうだよ』

と綾子は首肯いたがハラ〳〵と涙を流した。

『阿母さん、本統に榊様には御苦勞を掛けますわね』

『全くだよ』

絹子も多くは云はなかつた、云ひ得なかつた、口を噤んで深い〳〵思ひに耽けるのである。

薫は今度は祖母の方へ質問を向けた。

『お前は默つておゐでよ……深い〳〵地の底へお入んなさるんだつてて、本統にお氣の毒な……

……』

默つておゐでよと云はれて少年は、ぽつねんと母親と祖母の顏を見競べて、まだ見ぬ鑛山と云ふものを頭に想像して描いて見た、暗い地の底に鶴嘴を揮ふ物凄い光景を思ひ泛べて可愛い眼

を圓らにしてゐる。

『奥様』

と其所へ音藏が顔を出した。

『オ、お歸りかい、音藏や、榊様からお手紙が來てよ』

綾子は繰り返してゐた手紙を両手にすけるやうにして示すと。

『エッ、先生からお手紙……ド、什麽様子で御座います、巧くお逢ひになりましてすか、ド、什麽風で御座います』

『一寸讀んでお聞かせなすつて』

飛び付くやうにして上り框を駈け上り、割膝で綾子の手にある直也の手紙を覗き込むのであつた。

『鑛山の鑛夫にお成りなさるんですつて……小生は喜び勇みつ、豫定の如く猛進しつゝあり』

と聲顫はして綾子の讀んで行くゝ文句を時々力の籠つた『ウム』〳〵と唸るやうな聲を洩らして一字一句聞き落さじと耳を澄した、ソシテ其末文の『音藏君よ、我等は既に敵の本壘に迫れり、勝利は最後の五分間なり、不在を頼む』の所に至つて彼は鼻を詰らせながら眼を異様に輝かせた。



## (三八)

綾子の顔色は熱發した病狀のやうに赤くなつて眉の邊りがピリ〳〵と動くと、涙は止度もなく膝に手紙に注いだ。

『お前何したの、氣分が悪いのぢやないかね』

『お母様』

絹子も薫も様子を氣遣つて覗き込む。

『イエ何もありません』

と云つて綾子は涙を拭くと、直也の手紙を卷き納めてそれを押し戴いた。

『お母様、妾何しても參りますよ』

『エ』

『妾山口縣へ行つて參ります、さうしなければ……それで無ければ妾榊様に濟みません』

『又そんな事を云つて妾を困らしてのかねね、榊様に濟ない事を云へば限りは無いけれど、それはお詫びもお禮もする時があるだらうぢやないかね、まだ漸と床を離れたばかり……それも他が制めるのを氣ばかり焦つてお前無理に起きて居るのぢやありませんか、そんな身躰でこの暑いのに汽車や船に搖られて山口縣三界まで旅行をするなんでそんな事を制めないで妾何の爲に隨いて居るのです』

『お母様、貴方の仰有る事は妾能く解つて居るのです、それですから今日まで凝と斯して居るぢやありませんか』

と甞て一言の物爭もせぬ綾子の詞も今日許りは強い決心を見せて異樣に響いた。

『榊樣は鑛夫にまでなつて妾達母子の爲に盡して下さる……これまでのお世話も濟まない事ばかりですのに……そんな事までお爲せ申してそれを默つて妾達母子が安閑と見て居て人間の道が立つものではありません、あゝ濟ないと思ひながら情ない病氣の爲に捉まつて自由の出來なかつた間は致方もありません、モウ斯なに壯健になつたのですから妾山口縣へ參つて大野に遇ひます遇つて妾の考へた事を……』

『そんな事を云つても、現在榊樣の骨を折つて下さつてもまだ意見を耳に入れて呉れぬと書いてあるぢやないかね、其處へお前が出たら反つて……』



『イヱ妾考へた事があるのですから……假令その事が貫けなくても、此儘にして居ては榊樣に對して濟みません、暑い寒いのと云つて……他人の爲に勞働仲間に入つて銅山の坑の中へ入つて下さる有難いお心に對して……これを此儘にして妾大野と以前の樣になつたつて……身體ばかりが壯健になつたつて何の甲斐があるのです、妾何あつても山口縣へ參ります、モウ片時も斯して居ることは出來ません』

綾子の決心は奪うべくもなかつた、音藏も屢諫めた詞を繰返して制止めたのである綾子は頑として聞入れなかつた。

『此儘にして居ては濟まぬと思ふ苦痛は病氣よりも死ぬよりも酷いのです、妾を助けやうと思つて下さるのなら一度銅山まで遣つて下さい』

と云張る決心の詞には絹子も音藏もそれを制へと術を知らなかつた。

## （三九）

新政黨同志黨の首領巽元卿伯の病氣は發表された。不治の難症胃癌であるといふ診斷が傳はつて敵も味方も驚愕に打れた。

芝の本邸には日々名ある醫學博士數人が詰切つて內外の注目を惹た必死の命の取止むべく術を傾け力を盡すのであつた、公私一切の面會を避ける爲に大玄關前には天幕の假屋を設へて其處を見舞客の受附にしそれより內へは平素の親近者も入る事を許さぬ嚴重な取締は物々しい光景である。

伯の病床には夫人歌子の監督の下に看護婦數人が付添ふて居る、男では家令の老人と新戚の某老男爵が交代して詰る外伯が唯一のお氣に入りなる彼の佐藤男爵が一日に數回外から來て見舞ふのみである、柔い臥床の上に聲あつて伯爵は肉の殺げた面を此方へ向けた、椅子から衝と離れた歌子夫人は靜に寄つた。

『佐藤はまだ來ないのか』



『は、まだでございますが……スグ呼びませうか』

『イヤ呼ばいでも可い、來るだらう、歌子、佐藤が來たら今日はいよ〳〵宣告して遣る積ぢや其方も左樣思つて居て呉れ』

『あの宣告と仰有ると、佐藤さんを…』

『彼奴は長い間俺を欺いて居つたのぢや俺は斯して靜かに寢て居ると頭腦が頗る明瞭する、種々の複雜した事件が面白いやうに處理されて行く、同志黨も今度起きたら大改革を行はねばならぬ』

と皺枯れた聲で云つて、痩せた手で空を摶つやうにした。

『貴郎またそんな……そんなお表の御用の事なぞ御病氣が快くおなり遊ばすまで一切忘れて頂かねば……』

『憂愁しないでも可い、俺は今度の病氣ぢや死なぬといふ自信を有つて居る、俺は公私の交渉を斷つて靜思の機會を與へて呉れた病氣に謝さなければならぬ、靜に考へると失策や過失が一々數へられる』

『そんな事が御腦に障るのですから』

『大丈夫ぢや、それで俺は決心した、佐藤の奴めは遠ざけねば可ぬ、彼の男の爲た事は悉く俺の爲に不利益のみを釀して居る、黨の方が第一にそれぢや、地方へ出掛けて拵らへたといふ黨員名簿も甚だ曖昧な物ぢや、現に黨の勢力範圍と信ずる京阪地方からは今度の俺の病氣に對して見舞に來る奴は極めて少ないぢやないか、其他に彼の男には欺かれた事が甚だ多い、之は俺の不明ぢやつた、彼の機智を愛し過ぎた過失ぢや、現に大野廣之の事でもぢや、銅山と大野を種に俺は大分佐藤の爲に金を奪はれて居ると思ふ』

斯云はれると隱して置けぬ事が夫人の方にもあつた。

『あの、御病氣に觸つては可けないと存じまして、其後も妾の手許で二度ばかり取計つた事がございますが』

『佐藤に金を與へたか』

『はい、雛子の事もございますし妾佐藤さん兄妹は眞個恐ろしいのですけれど銅山の事は貴郎が承認して居らつしやる事と思ひますし、それに外國から器械とかゞ着いたので大野さんから此通り電報で賴んで來るからと仰有るから……』

『從前の事は仕方が無い、要するに俺の不明ぢやつた、雛子の事もお前が云ふ通り或は兄妹一



緒になつて何らか利益にする爲に遣つた事かも知れん、可しい、俺は決心した、彼の男には斷然絶縁の宣告を與へて遣らう』

## (四〇)

佐藤男爵は最も得意の時代を揚々として自働車に風切り鼻眼鏡を光らせて駈廻つて居る、總ての人の遠ざけらるゝ中に己れ獨り主人伯爵の病床へ出入する特權を誇り顏に今日も大玄關に姿を現はした。

『佐藤さんがお見ゑになりました』

といふ夫人の聲に目を開いた伯爵は病ひの惱みよりも猶苦い顏をして襖を明けて入る其人をヂロリと見た。

『歌子、暫時彼方へ……誰も寄越すな』

といふ聲も憤りを帶びて聞えた、男爵は例時の通り敬禮をすると椅子を引寄せて寢臺に近く。

『如何でございます、今日はお熱が下つた樣に申して居りますが』

伯爵はそれには答へず、窪んだ大きな眼に凄い光を湛へて物の底まで見抜くといふ風に凝と信明の顔を眺めた。

『本日も相變らず表は一ぱいお見舞客で滿ちて居りまするが、一同御容態を聞いて愁眉を…』

『佐藤』

と伯爵は詞半ばに鋭く名を呼んで。

『客の來るのは乃公の爲ぢや、決して貴公のお蔭ぢやないよ……』

信明は思ひ設けぬ主伯の詞に惑ふて默つて其顏を見た。

『貴公の如きが居ると乃公は死んでも會葬者も來なくなる、佐藤、貴公は今日限り乃公に近づく事を止めて呉れ、乃公は貴公の爲に悉く欺かれて居つた、その一々は擧げて云はぬが貴公の胸に覺えがあるだらう、黨の組織から總ての事を任かせて骨を折らせて居るからそれに酬ゆる積で貴公には隨分と……』

『閣下』

と信明は堪らず遮へて。

『何か御立腹の樣子でございますが、萬望その事を仰有つて……私が閣下を欺くなぞと』



顏を眞赤にして云つた。

『一々は云はんといふに、悉く非ぢや、貴公の爲る事は一も誠意が無い、乃公の爲に計て何處に善意があるか、貴公が黨勢擴張の爲に遊說した結果の報告は數字の上ばかりぢやない、根本から虛僞ぢや、それから黨の爲に投じた金の精算も貴公には出來まい』

『閣下、何者か私を傷ける爲に左樣の事を閣下に申上げたのぢやございませんか、別格の御信任を辱くして居る爲に私は數多の敵を有つて居りまするから……』

『誰にも聞かぬ、乃公は乃公ひとりで心眼を開ひたのぢや』

と云つた伯爵の聲は信明を顫ひ上らせた壯年の當時奇兵隊中に曉名を轟かせた、その時の武勇を宛がらに見る如き一喝は相手の肝を奪ふて餘りあるものであつた。

『一々云はぬのは寧ろ貴公の利益ぢや、それから貴公の妹も實に怪しからぬ奴ぢや、姫があの通り不具なのに乘じて大膽なる惡事を企て危く回復のつかぬ大事を惹起しかけた、これも貴公知らぬとは云はれまい、イヤその辯解は云ふな、乃公は既に決心しとるのぢや』

伯爵は靜かに身を起して。

『實に憎むべきは貴公兄妹の行爲ぢやが併し貴公とは長い間一緒に遣つて來た今乃公と手を切

つたら忽ち困るだらうそれでこれを貴公に渡すから」

伯爵は枕元の手文庫から袋入の書類を取出して。

『阿武銅山の一件書類ぢや、既に今日迄に大野廣之の名義で支出して遣つた金も莫大の額に上つて居る、銅山は大野に譲與して遣つたのぢやが其後の結果は此書類と共に乃公の方にある又其債權を貴公に贈つて遣る、歌子に聞くと貴公其後も大野の請願と云つて多額の金を持つて行つたらしい、そんな事は一切これに合して置く、之は乃公が貴公に對する情義ぢや、之を持つて行くが可い』

## （四一）

雨と共に懐かしい新涼が來て夕月の影鮮やかな巷には初秋の氣が頻りに動く。

人通りの途切れた芝山内を背の高い洋服姿の紳士が歩む、其後姿を最前から尾行するもの、如く隨けて來る男が居た。

『モシ御前樣ぢやアございませんか』



後ろの聲が耳に入らぬのか紳士は沈み切つた姿勢で俯向勝に歩いた。

『モシ佐藤の御前樣ぢやアございませんか』

と二度目の聲をかけて商人風の男はツカ〳〵と近づいた、紳士は始めて振顧いた、烏打帽を脱いでペタ〳〵と頭を下げる男の顏を凝と見下して。

『オ、金太ぢやないか』

『ヘイ御前樣へツへヽヽヽ、お久振にお目通りを致しまする』

『汝東京に居るのか』

『ヘイ、御前樣、それがお話を申上げなけれアッ…ツイ今朝新橋へ抛り上げられた許りでヘイ』

『馬關で両人暮らして居ると思たが……小仙は何した』

『その小仙ぢやア酷い目に遇はされましてね、面目なくてお話も出來やアしません、彼女俺に寢返を打つてね、逃亡を極めやがつたのでございますよ』

『は、ヽそれは馬鹿な目を見たね、盛んに料理屋を遣つてると聞いたが、喧嘩でもしたのか』

『奪られたのでございますよ、馬鹿々々しくつてね』

と男の苦み走つた淺黑い顏には苦痛の色は見ねた。

『人の女を奪つたつて奪られる汝ぢやあるまい』

『そ、それが俺の油斷でございまさ、御前樣奪つた奴といふのがあの大野廣之でございますよ』

『大野？、大野か小仙を奪つたといふのかね』

紳士は先刻巽伯の邸を出た佐藤信明である、我を待つ自動車にも乘らず、大きな煩悶を抱いて獨り歩むともなく歩んで居たのである。

『御前樣、惡錢身に付かずの譬へでございまさ、あの大野の野郎奴今銅山のお大盡で彼地ぢや何も大した勢ひでございますがね、馬關に來る度に俺に所へ遣つて來て、何時か燒木杭で以前の仲になりやがつたのでございますよ』

『それぢやア當時の狂言を知つて居るのかね』

『ヘィそれア女郎が喋舌あがつたと見ゐて散々俺ア油を取られましたよ、今ぢや銅山へ妾宅を構へたデコ〳〵大丸髷で祭り込んで居まさア』

『汝能く默つて居るな』

『イェ默つて居ませんかね、何と云つたつて地から金を掘り出すお大盡とは太刀打が出來ませんや』



『は、〻、〻、すると幾らか金にして小仙を大野に渡したのだね、それなら不足を云ふな、あの女ぢやア大分甘い汁を吸つたぢやないか』

『御戯談ぢやございませんせ、甘い汁はこれからといふところで野郎に引浚へられたのでございます、それから彼地で種々手を出して見たのでございますが、惡い時は可けませんや、スッカリ損つ了つてこの態でヘッヘ〻〻〻〻何かして御前樣に御目通りをして又何か御用に使つて頂きたいと思つてね、歸ると直お邸へ伺つたのでございますよ、すると巽樣へお詰切と聞いて此方へ遣つて來たのでヘイ』

『又何か御用は凄い事を云ふねは〻〻〻〻』

『イェ御前樣、モウ旅稼ぎなざ懲々でさ、何と云つたつてお膝元で、御前樣方のお引廻しを蒙らなけア嘘でございますよヘッヘ〻〻〻〻、御前樣の評判は田舍まで大層な事でございます せ、同志黨だつて唯一人巽樣のお名前なぞ云やアしませんや皆が御前樣の物だつて左樣云つて居るのでございますからね』

『は、〻〻〻』

と信明は寂しげに笑つた、そして四邊を見廻すと。

『金太、汝今夜向嶋の別莊へ密と來い、そんなに困つて居るなら又儲け仕事の智慧を授けてやらう』

（四二）

佐藤男爵の向嶋の別莊には病と云つて其後交際界と絶つた喜代子が閉籠つて居る新橋驛の事あつて以來巽邸内の寓居へは流石の彼も行く事が出來なかつた、伯爵夫人歌子は事を荒立てては家の名と雛子の身の恥辱を思ふて極めて穩便な所置をとつた、喜代子にして前非を悔いさへすればと此方から折れた使ひさへ出したが喜代子は病氣の一點張で招きにも應じなかつた、兄信明はそれらの事には一切無頓着で何の知るところも無い風を裝ふて相變らず伯の腰巾着を以の任じて居たのである、

喜代子は登りつめた山の頂きから底知れぬ谷へ蹴落され微塵に碎けた屍とも形容さるべき淺ましの狀態で極度の煩悶に日を送つて居る、信明はそれを慰めて『今に總ての復讐をしてやる、大野廣之とも屹度結婚させて見せるから』と堅く信ずるところのあるやうに何時も大丈夫らしい詞を繰返した。



信明は今夜珍らしく早い時刻に別莊へ訪れた、隔日位の夜遲く酒氣に滿ちて喜代子の居室へ飛込み、面白い話をして無理に妹を笑はせ又フイと出て行くのが例であるから、玄關で番の夫婦が迎へる聲を聞いて喜代子は何か變つた事が？、と懶い身體を強いて表へ運ばうとするところへ、信明は帽子を冠つた儘で入つて來た、喜代子は其顏を見ていよ〳〵普通でなく思つた、

『兄様、何かして』

信明は默つて帽子を隅に投るとドカリと坐つた。

『エ、何うかして、何かあつて』

『何うかしたやうに見ねるか』

と兄の聲は沈み切つて聞えた。

『お顏の色が惡いわ、それにお酒の氣が無いもの』

『酒はこれから飲む、オイ喜代さん、俺とお前の財産は今日から此袋の中に限られたぞ』

と云つて信明は衣囊から書類入の紙袋を攫み出し妹の前へ置いた、阿武銅山書類と表に書いた文字は讀んだが喜代子には何の事とも解り兼ねた。

『詳しい話は後からするがね、俺は今日限り巽の狸爺とは提携を斷つたのだ』

『エ』

と喜代子は目を睜つた、兄が今の地位も聲望も巽伯を頂けばこそである、その巽伯と斷つたとは兄にとつて容易ならぬ大事である、平日に變る樣子も俉はと知ると共に、喜代子は胸を抉るばかり辛い事に思ひ當つた。

『兄樣、それ妾の事からでせうね』

『イヤ左樣ぢやない、そんな事を憂慮しないでも可い、ナニ彼な狸爺とはモウ可い加減に手を切つた方が此方の利益だからね、此方から斷てやつたのさ』

『だつて兄樣』

と喜代子は心細いなうに身體を寄せて。

『今そんな事になつては忽ち兄樣の位置が……』

『大丈夫だ、これからが兄さんの眞價を發揮する時ぢや、幾ら働いても犬馬の勞に過ないのぢや見込みが無い、爺にこびりついて大臣になる運を待つよりは俺の力で巨きな富をつくつて見せるその銅山の權利を握つて遣たからね』



『銅山の權利つて……銅山は大野の……』

『左樣さ、表面はさうなつて居るがまだ所有權は何にでも動くのぢや、巽に對する債務を果さなければ容易に大野の銅山にはならぬからね、債權は其書類と共に俺に移つたからそれを振廻せばあの阿武銅山は俺とお前の物ぢや、それに就てお前に聞かなければならぬ事がある、何だね、お前が大野と結婚しやうといふのも此銅山といふ富が目的だらう、この富が他へ轉じたらお前の大野に對する戀は當然冷めなけりやならぬ道理だが』

此時襖の外で。

『旦那樣、あの旦那樣とお約束をして置いたといふ方がお越でございますが』

と取次の聲。

『左樣か、二階へ通して置け、喜代さん、お前にモ一つ大野といふ奴に愛想の盡る事を聞せやう、兄さんと一緒に二階へお出、珍しい男が來て居るのぢや』

## （四二）

別荘の夜は三人鼎坐の密談に更けた、今日の晝間芝山内で信明を呼止めた男は本名よりは蛙の金太で悪黨仲間に通つた詐欺脅迫の前科者で、嘗て信明に頼まれて大野廣之から大金を奪ふた藝妓小仙の情夫であつた、小仙が身を隠す時手をとつて一緒に下關まで下り彼處で料亭を開いて居たのであるが小仙が信明から貰つた報酬金も費ひ果すと斯いふ男女の常例で戀は水臭くなるばかり、女の方から別れ話が度々持上る、その内に小仙は計らず大野廣之に遇つた、廣之は強いて以前の事を訊ねなかつた、そして度々車を其門に止めた、廣之の名は銅山の大盡と崇められ、其地方の不景氣を救うべく天降つた黄金の神の如く尊まれて居るのであるからお大盡の車が下さるゝ小仙の家は人々を羨ませた、小仙と金太は算盤づくから佐藤に頼まれて悪事を働いた始終を打明けてお詫をする、その上に金太は金にさへなれば女房同様の小仙をも廣之の自由に任せやうと持掛たのであるが、廣之はそれよりも疾くにモウ小仙と昔の情交を温めて居た知らずに居た金太は口惜しがつて銅山の事務所へ凄い事を云つて出掛けたが望み通り紙幣束で



面を殴られて小仙と手を切つて了つた、それから後は田舎の賭場荒しやら密航婦の周旋なぞに手を出したが悉く失敗して身を置く所もなく、高嶺の花の小仙の妾宅へ押掛けて厭がらせの無心を吹掛けた事も度々でいよ〳〵これでの最初には纏つた金を絞つて今度東京へ歸つて來たのである、斯る男を迎へ入れて『また金儲けを敎へて遣らう』と云つた信明の心事は……。

『すると神木つて野郎が御前樣お兄妹の邪魔になるでゞせいますな』

と金太は低い聲で云つた、新橋界隈を出沒する頃はそんなでもなかつが旅に窶れ日に燒けた面は眼の光怪しく一癖も二癖もある氣に見ゐる。

『左樣だ、その男の爲に散々惱まされたのだ、今云つた大野の子も其奴に奪はれたのさ』

『ちあ云はゞ人質をお奪られなすつたんだね、御前樣にも似合はねね、チョッ俺が居れアそんな事は』

と金太は拳で膝を叩いた。

『その神木の野郎は何處へ逃けつたかお判りになりませんね』

『さあそれだよ』

と喜代子が口を出した。

『妾屹度銅山の大野の所だらうと思ふのよ、今になつて考へると大野の間諜ぢやなかつたか知らと思はれる事もあるのだから……』

『俺はそんな事は無いと信ずるが、何方にしても其奴の爲には兄妹とも全然欺されたのだからね、秘密といふ秘密を悉く握つて居られるのだ、あの男を放つて置いちや頗る不安に堪へない、今後の事業も妨害されるぢや、それで汝に頼まうと思ふ、先づ所在を突止めて其上の所置は幾らもある』

金太は默つて考へて居たが。

『御前様、これア お嬢様の仰有る通り野郎大野の間諜かも知れませんぜ、それで無くつちやア御前様やお嬢様から頂いた金を返して行く筈がありませんや子供を連れて大野の所へ引上たに違ひない、俺アそう睨みますぜ』

『兄様矢張左様だわ』

と喜代子は兄を見た。

『斯なると流石の兄さんも頭腦が混線して何が何やら判らない……併し大野の夫人は東京に居るに違ひないからな、神木が果して大野の方の奴とすれア子供は先づ手近の母親に渡さうぢ



やないか』

『これは御前様の仰有る通りです、すると先づ其見當を觸つて見るのですね、可うがす、俺が歸り新參の働きに一番大骨を折つて見ませうよ』

『頼むよ、急に遣つて呉れ、俺は妹と一緒に銅山まで行かなければならぬ用事が出來た、それが判りさへすればスグ出立するからね、汝も連れて遣るかも知れぬ、働き次第に依つては小仙も奪り返して遣るさ、蛙の金太の本領を見せて呉れ、可いかね』

『へヘヘヘヘヘ御前様、旅ア稼ぎやしたが腕は鈍りませんぜ、今に神木も子悴も束にしてお目にかけますよ』

## （四四）

『はヽヽヽ坊様面白うございましたかね』

と云つて音藏は車を止めた、淺草公園の入口で、日は黄昏であつた。

車の上には足の不自由な薫が居る、綾子は思立つた決心を遂に飜へさなかつた、病の床を離れ

た今榊直也が自分達母子の爲に鑛夫といふ勞働仲間に入つて辛酸を嘗めて居るといふ事を知つては一刻も斯しては居られぬから、自分も阿武銅山に赴き、夫廣之に面會して最後の決心を身體と共に投げ出し、我身を犧牲にしても夫の精神を正しい道に引戻さねば置かぬと固く覺悟を定めたのである、この覺悟は誰も打破る事が出來なかつた、母の絹子も我を折り音藏も制る詞に盡きた、此上はといふので玉川在の父道彦の許へ相談すると、道彦はスグ斯答へた。

『その決心があつてこそ今日迄離緣さるゝ覺えがないと云つて實家の敷居を踏まなんだ凜々しい精神が貫くといふものぢや、病ひ上りの身を厭ふて徒らに人の情にのみ縋る卑屈の譏受ては榊氏にも恥かしい、父は綾子に贊成する』

中に狹まつた絹子は當惑して音藏と密々相談を重ねる間に綾子はズン〳〵と旅行の用意を調へた、到底引止める事は不可能となると絹子は急に周章だし、汽車の汽船のと道中を氣遣ひ着いての後の種々やら、老いたる女親の子を思ふ眞心を備さに傾けて苦勞するのであつた。

無論薫を連れて行くのであるが、音藏も供をする事になつた、これは絹子の注意もあつたが音藏自身は始めから左樣極めて居た、制止て聞れなければ自分も隨いて行き何處の何處までもこの不幸不運な母子の主人を離れる事では無いと堅く心に誓ふて居るのであつた。



いよ〳〵三人で銅山行となると、さてこれが何時歸られると豫定のつく旅では無い、山と河との道程は遙かでも極つた時間に汽車も汽船も往來する、人の心の奥庭には目に見ぬ險しさ恐しさが潜む、夫廣之の精神が遂に善に立戻らぬ時櫓櫂もない捨小舟の、三人の主從は此儘漂浪の旅に上らねばならぬ……と悲しい事も流石に思はれる、明後日は出立といふ日綾子は音藏に賴んで薫を連れさせ名殘の市中見物をさせた、父に捨られ直也に別れた後の薫は不具の身といふばかりでなく喜代子らの目を避ける爲に絶て外へは出さなかつた、その痛ましさも度々母に涙を催さしめた、でこれが東京への別れになるかも知れぬと思ふと、綾子は思ふ心を音藏に告げて、今日の一日を薫の爲に充分樂しませて遣ることにした、音藏も同じ思ひである、眞心から勞を惜しまぬ彼は朝早くから薫を車に乘せ、少年の目を喜ばせる彼處此處の盛り場を巡つた上野の動物園にも行つた、そこの茶店で晝飯を濟せると、それからそれへと盡きぬ少年の慾望を飽かしむべく方々を曳き歩いて今此處の淺草公園へ來たのである音藏は走る間も憂ひに胸を鎖された、薫は小供心の眼前の觀樂のみに喜んだ。

『活動寫眞見て歸らう、ね音藏、活動見せてお呉れよ』

## （四五）

面白かつた一日を猶飽き足らで活動寫眞を見せて呉れといふ薫の詞を音藏は拒むことが出來なかつた、長い間寂しい思ひを堪へて穩順しくして居た小供ごゝろを思ひ遣ると今日を別れの繁華の都に心殘りのないやうに充分遊ばせたいは山々である、美しい燈火に裝飾された夜の淺草公園は少年の眼前に繪の如く展がつて、奥山から傳はる樂隊の音色は來いよ來いよと招くやうである。

『ねゑ音藏、活動寫眞僕長いこと見ないよ、一寸見ても可いだらう、八時か九時頃に歸れば可いだらう』

『へェ餘遲くなるとお母様が御心配なせいますからね』

『だから一寸だよ、一寸見たらスグ歸るから、ね可いだらう左樣すれァ……田舍へ行つたら活動寫眞なんか有りはしないから』

音藏は之を制る酷い詞を知らなかつた。



『ぢや坊樣眞の暫時でございますよ』

と云つたが此處から内へは俥の入れられぬのに當惑した。

『坊樣、下りて下せいまし、俥を何處かへ預けませう』

薫は我が願ひの許されたのに雀躍して俥を下りた。

『俥何處へ預けるの』

『へェ、此處らへ置いちやャ巡査に叱られますからね』

音藏は一寸考へて、向うの辻の方を見た。

『オ、彼處の帳場へ頼んで置きませう』

『ぢや音藏早く行つてお出よ、僕此處で待つて居る』

『この軒の下を離れちやァ可けませんせスグ來ますからね』

と空俥を曳ひて向側へ扳けやうとする、夜の人の出盛りを滿員の電車が矢の如く馳せ違ふ、縫ふやうにして音藏は漸と角の帳場の前へ行つた。

薫は玩具屋の横手に佇んで音藏の來るのを待つて居た、今の電車から下りた人だらう急に混雜して來て狹い仲店通りは忽ち身動きもならぬ樣になつた、薫は不自由な身躰を用心して杖を確

りと支へ片手でそこの柱に倚れて居た、顔を袖や袂が觸つて通る、暗い人穴の底へ落ちたやうな氣がする、早く音藏が來れば可いなと思つて背伸びをして人の林を見透さうとする時、強い力がドッと肩に當つた、吃驚して振顧いた時は大きな手が自分の二の腕を痛い程引掴んで居た

『オイ坊、此處へお出』

と低い聲で云つたのは顏の恐い眼の鋭いヂゴマの張本にあるやうな男だつた。

『厭だい、何をするッ』

と薫は一生懸命に捉まつた手を振放さうとしたがそれは何の甲斐もなかつた。恐ろしい男は默つてグッと小さな姿を引寄せると突然口に手を當て抱へるやうにして。

『親の目を盗んでは心配をかけやがる』

と大きな聲で云つて忽ち群集の中へ姿を消した、この出來事を目擊したのは其處の玩弄屋の老婆ばかりであつた。

『坊樣、坊樣』

と人波を押し分けて音藏が歸つて來た。

『坊樣、豪い人だね』



と云つて漸と軒下へ出た、其處に我を待つべき筈の薫の姿は見えぬ、音藏はハッとして聲を振り絞つた。

『坊樣、坊樣、何處に入らつしやる、坊樣、坊樣』

いよ〳〵返詞の無いに音藏は顏色を變へた、人々は狂氣の樣に叫ぶ車夫を何事かと取卷いた。

『モシお前さんの探してる小供といふのは十ウ位ゐの杖持つた方かね、それなら今の前其子の親らしいのが大きな聲で叱つて抱いて行つた樣でしたよ』

と玩弄屋の老婆が云つて出た。

## (四六)

『お孃樣、却々剛情な餓鬼ですね』

と金太は今入つて來た喜代子を見て云つた、薫は投げつけられたやうに暗い座敷の眞中に惡い方の足を長くして座つて居る、彼を淺草公園の混雜から此別莊へ連れて來たのは金太である、昨夜から今迄かゝつて金太は薫を脅しつ賺しつ種々の事を訪ねたが何の答へをも得なかつた、

薫は覺へのある別莊へ連れて來られたのだから小供心にも分別は敏く屹度喜代子が此男に賴んで自分を捉まへさせのだらうと思つた、それなら決して榊先生の事を云つてはならぬ、お母樣の事も音藏の事も何も云つてはならぬ、既に二度の悲しい經驗に少年の心は難に處して惑わぬだけの鍛練を積んで居る、拳を振上げるかと思ふと忽ち猫撫聲で手段を盡して我に逼る金太を冷やかに遇らつて涙一滴零さぬ度胸に流石の惡漢も舌を卷いて驚いて居る。

『妾が代つて聞いて見ませう』

と喜代子は靜かに薫も近づいた。

『オ、薫さん、お前まあ能く無事で居て呉れたねね、妾だよ、妾忘れはしないだらうね』

聲は優しく云つたが深い憤怒は睨みつけた眼に現はれる。

『お前今日まで何處へ行つてたの、妾何なに心配したか知れなかつたよ』

『嘘を云つてらア』

と今まで眼を閉つた薫は喜代子の方へ向き直つて大きな聲で云つた。

『そんな嘘を云つたつて僕知つてらア、何も彼も知つてらア、嘘ばかり吐いてるとおばさん今に酷い目に遇ふよ、嘘を吐く奴は惡人だ、嘘をつく奴は盜賊より惡いといふことおばさん知



らないの』

『あの此子は相變らず、人を怒らせるやうな事ばかり云ふのねね、憎らしいッたらありはしない』

と突然小さい身體を力任せに突く、突かれて薫は横に轉げ音のする程頭を打つた痛いのを堪へて唇を咬みしめる。

『オイモウ可い加減に强剛を張りな、よお前このおぢさんやお嬢樣が眞實に怒つたら何する積りだい、小供らしく知つてる事を皆な云つて了ひねね、お嬢樣の所から母親の所へ連れてつた神木つて奴は今何處に居るか、それを一番に云つて見な、正直に云つたらお前の德だ、お嬢樣が御自分の子の樣にして可愛がつて遣ると仰有のだ、あんな路次の奥で貧乏人の母親と暮してるよかな御華族の坊樣で威張られるのだせ、好きな事が何でも出來らア、よ、考へて見な、何方が德だか考へて』

『失敬な事いふなッ』

と薫は顏に朱を注いで金太を見据へた。

『路次の奥でも貧乏人でも汝の知つた事ぢやない、華族が何だい、華族だつてこのおばさん見

たいに嘘ばかり吐いて惡い事する人が居るぢやないか、僕のお母様は決して嘘をつかないから、惡い事は少しでもしないよ、華族が何だい、平民の子の方が豪いつて榊先生が云つたい

馬鹿ッ」

『コン畜生、老せた事を吐かしやがる』

と金太は拳を固めた。

『ほゝほ榊先生といふのはね、此子の家庭教師だつたのよ、それが面白いぢやないかね、この子のお母さんと姦通合つたのさ、それが原因で離縁されたのにまだ一緒になつて居ると見へるわねあんな事を云つてるから』

『榊先生がそんな事するかい』

と少年の憤怒は絶頂に達した。

『おばさんが僕のお父さんを奪つたぢやないか、自分が僕のお母さんのを奪つて置いてあんな事を云つてらア、おばさんは惡い人間だなア』



## (四七)

痛い目に遇はせても泣ぬ代りいかに攻め問ふても薫は其後一言の詞も出さなかつた、喜代子も金太も手のつけやうのないのに困つた顔を見合せるばかり空しく半日を消した、すると午後になつて信明が遣つて來た、薫の捉つた話を聞くと。

『それは大成功だつた、ところで彼子を逃さんやうに連れて行かなければならぬ、それも金太汝に頼むぞ』

金太は第一着の手柄に鼻を蠢かして。

『それア大丈夫でとぜいます、探す骨折に較べたら譯はございませんや』

と暗に薫を奪つた手際を誇つた。

『この路次と突止めてから三日といふもの朝から晩までピッタリ網を張つたのでございますよ近所で聞くていと滅多に出た事は無いといふのですから音藏つて俥夫の居ぬい間に踏込んで浚つて來やうかと既に荒仕事にかゝらうとする三日目の朝出た事の無い小僧奴音藏の俥に乘

りやがつて方々を飛廻はるのでがさあ、此方は自轉車で一日尾行て居ると到頭淺草でね』

と苦心談に尾鰭をつけて褒美の量を增さうとばかり。

『それから御前樣音臧つて野郎斯な事を云つて居ましたせ』

と金太は耳に挾んだ主從の談話を告る。

『これが暫時東京のお別だからつてね、何でも何處か遠い所へ出掛けるからその名殘に見物に連れて歩く樣な口吻でこせいましたせ』

『遠方へ？、あの子供がだね』

『それが誰と何處へ行くんだかイクラ口を毟つたつて剛情でね、ねえお孃樣』

『妾萬一や銅山へ行くんぢやあるまいかと思つて種々賺して訊ねたつて默つて居るばかりだもの、兄樣聞いて下さいよ、妾達の手に負ふ子供ぢやないわ』

信明は首を傾て居たが忽ち膝を叩いた。

『オイ喜代さん、これア躊躇しては居られない、あの子供が遠方へ行くと云へば大野の居る銅山に極つてるさ、無論誰か連れて行くのだが……すると神木といふ男は或は大野の間諜かも知れないな、何にしても先んずれば制すぢや、誰が行つたつて寄つけない樣に此方が急に乘込む必要がある、神木といふ男が行つても決して面會するなといふ電報はあの時發して置いたが……小仙も直接に知らなければならぬ、喜代さん、すぐ旅行の支度を爲さい、今夜の急行で立つとしやう、金太、汝も支度をするが可い、子供を屹度賴むぞ』

信明は出發の用意萬端を命ずると、一室に喜代子を招いて密々と彼の地に着いて後の事を云ひ含めた。

『可いかね、よく決心をして行かなけれアならぬぜ、大野の態度一つで此方の計畫を變へるのだ、此方の云ふ通りを容れゝば可、承諾をしなければ債權を絕對に行使して阿武銅山を直に取上げて遣るのだ、其場合になつてお前兄さんと大野との板挾みになつて去就に惑ふ樣な事はあるまいね』

『ほゝほ兄樣大丈夫よ、始めから判つた事ぢやなくつて、妾の戀はね』

と喜代子は兄から預つた銅山の一件書類を手文庫から取出すと、その袋に一寸接唇する眞似をした。

『これを離れた大野なんかに誰が何するもんですかよ』

『可、それで兄さんも心强い、巽の老爺に離れたつて兄妹であの銅山さへ握つて居れア』

と信明は會心の笑みを漏した。

## （四八）

御神燈の門口で郵便の聲、清香は手紙を受取つて差出人の名を讀んで美しい眉を顰めた。

『山口縣……阿武銅山新開地……町大野方せん』

二度三度繰反して讀んだが不審の晴れぬ顏、それでも自分の宛名に違ひないので封を切つた。

『……今更手紙の出せる義ぢやありません姉さんどうぞ勘忍して下さい……』

と話の樣な冒頭を讀んで、清香は始めて手紙の主を知つた、馬關に居る筈の小仙からである、佐藤男爵に賴まれて大野の金を奪はせ好きな男と一緒に旅に落してやつた小仙からは其後何の消息も無つた隨分と陰に陽に世話を見て遣つた妹分の小仙が不義理の仕業は腹が立ぬでは無つたが當時の事に良心を責めらるゝ清香はイツソ彼の人々との交際が此儘斷つて了ひたいと思つた、銅山へ行つた榊直也からは宍戸良輔を通じて細い消息があつて、倚賴の無い綾子夫人母子の上を他所ながら護つて呉れとの賴みもあつた、直也を中心にして正しい道に勇み進む人々の



行動を見ては一たび機に觸れて發した彼の本然の良心は磨けばます〳〵光る珠の如くであつた清香は二度ばかり自身に綾子の許を訪問れたのであるが、人の目に立ち易い自分が度々出入することの反つて綾子らに苦痛を與へるだらうと思ふ遠慮から其後は時々の使ひに見舞物を托けたり薫の喜びさうな品を送つて寂しい人達を慰めて居たのである。

今頃に小仙から手紙を寄越さうとは思ひがけぬ事であつたが、清香はそれよりも中の文句を見て顏色を變へて驚いた、小仙の手紙の大略を摘むと。

自分は其後馬關で金太と共に料理屋の店を出して居る中計らずも大野の旦那に遇ひ今では金太と手を切り其人の世話になつて銅山の妾宅に居るのであるが、苦勞をかけた情夫を捨て慾に迷ふた報いは早く來て、此頃東京から佐藤男爵が妹喜代子を連れて此銅山に乘込んで來た爲に自分は邪魔物にされ今日にも追ひ出されんばかりの場合となつた、これといふのも身から出た錆であるから、モウ自分は恐ろしい大野達の居る銅山を我から逃げて東京へ歸る積である、歸れば詫びをするから以前の樣に引立て呉れ……。

これだけが主な文意であるが清香を驚かせたのは小仙が大野の世話になつて居るといふことでなくて、末の方に書き加へられた數行の文句であつた。

『男爵さまの妹喜代子さんは可愛らしい十う位ゐの薫さんといふ男の子を連れて來ました、それが大野さんの子といふ事で今は山に居ります、何でも大變な秘密があるらしく、山の事で大野と佐藤さんは毎日激しい議論をして居るのです、どちらも恐ろしい大惡黨ね、いろ〳〵お話がありますよ、薫さんといふ子供は可愛想ですわ、憎い喜代子が番をして外へは一寸とも出しません此子のお母さんに知らせて上げたいと思ひます、何でも無理に連れて來たらしいのです、こんな惡い人達にかゝつたら誰でも酷い目に遇されてよ……』

薫が喜代子に連れられて銅山に?、清香は手紙を讀み了ると帶引締て起上つた。

## (四九)

手紙を讀み了つた清香は取る物も取りあへず綾子の詫住居へ駈けつけたのであるが、家に入るとスグ果して變のあつた事を覺つた、老人は眼を泣腫して居る、綾子は出て來たが憂愁の現はれた顔は病氣が後戻りした態である、音藏の姿は見えなかつた。

清香は綾子の顔を見るなり。



『奥樣、坊樣が居つしやらないでせう』

『お前何してそれを知つて?、薫は又奪られました……』

と云つて綾子は涙ぐんだ。

『奥樣、坊樣の居らつしやる所妾能く存じて居ります御心配なさいますな』

『エお前が薫の居所を?清香そ、夫は眞實の事』

『ハイ坊樣は且那樣の居らつしやる銅山へ、あの佐藤男爵兄妹に連れられて』

と小仙から來た手紙を出して見せると綾子も母親も呆れて顔を見合はせる所へ表から音藏と連立つて宍戸良輔が入つて來た。

『ヘイ奥樣只今』

といふ音藏の聲は泣くやうである。

『今日も得る所がありませんがね、チト搜索の方針を變へて見やうと思つて歸つて來たのです』

と宍戸は禮を明けた、彼は直也が居ぬやうになつてから綾子母子の身を保護すべく繁々往來し今度の銅山行にも種々の盡力をしたのであるが、災厄の手は執念くも再び母子を捉へ薫は誰と

も知れぬ曲者の爲に浚つて行れた、其時の油斷の過失に、音藏にあるが不在を請合ふた自分も榊に對して申譯が無いと、それ以來宍戸は音藏と両人で毎日薫の行衛を探すために有ん限りの手段を講じた、音藏は死んでも申譯が立ぬと夜も碌々寢ず東京中の町々を隅から隅まで一軒づゝ探す氣根で駈け廻つたが今日まで何の手索りも得られぬ、無論一番に巽邸の樣子と佐藤男爵兄妹、その向嶋の別莊なぞ悉く手を入れて見たが皆目知れぬ、喜代子は病氣で別莊の奥深く閉籠つて居るとばかりで其他の事は判らなかつた、すると宍戸は今日の出先で佐藤男爵兄妹が何處かへ旅行したらしいといふ噂を耳にしたので、その事と薫の事が干聯して居るやうに思はれてならぬので、急に音藏を促がして今歸つて來たのである。

『オ、清香さんか』

『宍戸の旦那、妾今日はお家苞を持つて參りましたよ』

『宍戸さん、音藏も早く來てお呉れ、薫の居所が知れましたよ』

坐敷は喜びと驚きの聲に滿ちた。

『妾 それでは少時も早く立ませうね、ねえ宍戸さん』

『無論それが可いですが……』



と宍戸は何か考へて居る、清香は膝を進ませて。

『奥樣、彼地へお越しになりますなら妾お供をさせて頂きます』

人々は清香の顏を見た。

『この手紙を寄越した小仙つていふのは妾の妹分で、詳しい事は榊樣にお詫をいたしましたからお聞でございませう此小仙を玉に使つて妾大野樣に對して犯した罪の爲に良心の苦痛は片時止む時もございません、そのお詫の爲には何な事を致しましても……御病氣上りの奥樣が長の旅行に御苦勞なさいますのを妾素知らぬ顏して見て居られるものでございますか、音藏さんが居らつしつても女の妾がお供をすれば又お話相手も出來まする、彼地へ參つて小仙に遇ひましたら屹度此方の利益になる事を探る便利かございませう、妾是非お供をさせて頂きます』

清香の詞の終るを待つて宍戸が口を開いた。

『ウム清香さん、それは可いだらう、君行つて下さい、それから僕も行く、僕も一緒に行きまするぞ、何も此手紙の樣子ぢや佐藤兄妹は何か大な計畫を有つて乘込んで居る樣です、彼らを相手に榊が一人で鬪ふといふ事を知つては僕も安閑として殘つては居られぬ、此方も榊の援

軍として皆が揃つて押寄せませう、それが可い、さあ左樣極めて用意しませう』

## （五〇）

『待て、待て、早まつちや可ん、早まつて亂暴をすると俺は味方をせんぞ、待てと云つたら待たんかッ』

疊み上つた岩壁は光線の乏しいカンテヲの赤い焔に微かに照し出される、蒼黑い鑛物の溶け汁が氷柱のやうに岩角に垂れかゝつて、硫氣鼻を撲つ冷たい雫は絃を鳴らすやうな音で頻りに落ちる、此處は地の底二百尺の別乾坤阿武銅山の坑內に最も難場と稱へられた第三番の竪坑を登り盡した六疊敷ほどの仕事場である、今七八人の鑛夫は何事か激しい聲で云交して、鏨を持つもの鐵棒を提げたもの、いづれも荒くれたつたのが油煙と泥土に汚れた顏を目ばかり光らせ、殺氣に岩天井も突拔ん勢ひで起上つた、そこへ待てと大喝を放つて梯子口から現はれた巨漢がある、一同は振顧つた、一人はカンテラを高く上げた。

『オヽ新聞の兄貴か』



『お前達が此處で相談してると聞いて駈つけたのだ大概聞かなくても判つて居るが俺に考へがあるからまあ待て、何でも早まると失敗するからな、遣るなら遣るで充分用意してかゝらぬと駄目だ、まあ俺の考へを話すから聞け』

巨漢の鋭い聲は不思議に鑛夫を柔順にする、中での年長な眞向に凄い傷痕のある熊といふのが手で皆を制して以前のやうに蹲まつた。

『新聞の兄貴に味方を爲んと云はれちやア出來る仕事ぢやア無いからの、オイ兄貴お前今更そんな事を云つて脅すのは厭だぜ、兄貴といふものが居て呉れてこそ命がけの兇行も遣つて見る氣に皆がなつたんだぜ、兄貴が東京へ歸つて新聞に銅山の事を明白に書いて呉れたら俺らが大野を遣つけたのが決して無理ぢや無え、非分は大野の野郎にあるつてことが世の中に知れ渡らうぢやア無ねか、そうなれア俺らの罪も自然に輕くなると云つた道理だ、それが賴みと云ふ事は兄貴此前の相談に能く知つて居て呉れとるぢや無いか』

『それは知つて居る、知つて居るから大事をとるのだ、それでお前達はいよいよ何いふ手段を執るといふのだ』

巨漢は岩に腰をかけ腕を組んで一同を見廻はした。

『オイ吉公、手前誰か上つて來やしねいか見張りな』

と云つて熊は巨漢の傍に寄つた。

『何と云つて兄貴の知る通り此儘默つて居ちやア皆が饑死するのを待つ樣なものだからの、聞けア今度は又鑿からカンテラの油代まで賃金の中から引くといふのだ、米が高くなる反對に賃金は漸次下げやがる、二十時間の荒稼ぎに其日々々の命を拾つて宅へ歸ると嬶や子供に空腹で泣きつかれちやア……愛相が盡きた暇を呉れろと云やア證文を楯に身體を縛りやがる、俺らの事を穴の鬼といふが鬼はあの大野の野郎さ、そこで今日の相談はね、大野の野郎を坑內へ連れ出して、否と曰やア文句は無い、岩と一緒に火藥で碎ばし了うか梯子を切つて落して遣るか、それで脅して見る積さ、それから癪に觸るのはあの妾宅だ、俺が大野を坑內に連れ込んで仕事をして居る間に妾宅も序に飛して遣ろうてんで、チャンと手別けが出來て居るのだ』

『はッはゝゝそれは痛快だ、併しそれ程思ひ來つた事を遣る決心なら猶更念の上の念が要る待て、待つて呉れ、俺に面白い考へがある』

巨漢は榊直也である、彼が變裝してこの銅山の鑛夫に交らうとは大野廣之も知らぬのであるが直也は新聞の兄貴の異名に鑛夫仲間の尊敬を受けて居るのであつた。



## (五一)

不意に阿武銅山に乘込んだ佐藤男爵兄妹は何の先觸れもせず直に大野の妾宅を襲ふたのである廣之は例の沈着きはらつた態度を見せて居るが內心は安靜ならぬ感情に滿ち切つて居る、信明と喜代子は元より大衝突を起すべく豫期して押掛けたのである、小仙の口からそも〳〵の當初の秘密が大野に漏れて居ると知つては廣之が自分に對する感情も推測する事が出來るのであるが、そんな事に構はず薫を連れ妹を伴うて堂々と乘込んだ信明は胸に普通ならぬ計畫を有つて居るのである。

信明と廣之は昨日來石と石と相搏つ如き激論を鬪はして居る、小仙を睨めつけて一言も詞を交はさぬ喜代子は薫を放さず二階座敷を我家の如く占領して居る、物靜かな別莊は暴風雨の前觸れに來るやうな人を壓つける空氣が重く漂ふて居る。

『すると君は何うしても我輩の要求を聞く事が出來ぬと云ふのだね』

『聞かぬのぢやない、聞く事が出來ないぢやありませんか』

と一室に對座した廣之と信明は互ひに穩かならぬ色をして爭ふた。

『出來ぬといふのは君の慾望が大き過るからぢや、當初の事を考へて見たまへ、此銅山を巽伯爵の手から君に贈與する事になつたのはそも〳〵誰の發意ぢやと思ふのだね、悉く我輩の盡力ぢやないか、我輩といふ者が仲介に立なかつたら此銅山は決して君の手に入るべきぢやない、そこらの事を考へて見たまへ、我輩の提出した條件が決して無理ぢやなからう』、

信明は阿武銅山の經營を自分に讓り受けたいと云ひ出したのである、所有權は其儘に大野の所有として、經營だけを引受けたい、無論利益は兩人で分配するといふのである、廣之が今となつてそんな事を承諾しさうな筈のない事は信明は能く知つて居る。

『はゝゝゝそんな事を今更云ひ出すのは貴方の人格上好しい事ぢやありませんね』

『人格上？、我輩の人格問題ぢやない、銅山の問題だよ』

と信明は躍起になつた。



## （五二）

互ひに一歩も讓らぬ廣之と信明との爭論は漸次に激く高い聲は襖の外へ漏れた。

『可しい、君が飽くまでも頑强に出るのなら我輩止むを得ない、君に對して債權を行使するばかりぢや、巽伯から我輩が讓り受けた君に對する債權といふ物は我輩が任意に行使する事が出來るのぢやからね』

と信明は待つてたといふ風で衣嚢を探り一件書類の袋を取出した。

『證書を一々展げなくとも君の記臆に新しからう、前後四回で十二萬圓餘の債務を巽伯に負ふて居る事は認めるでせうね、其債權證書は現に斯して我輩の手に占有して居る事も認めない譯には行きますまいね』

信明は勝ち誇つたる態度で冷やかなる笑を浮べつゝ返答いかにと逼るのである、廣之は色も變へなかつた。

『はッはゝゝ男爵、貴下にも似合はない幼稚な恫喝を試みられるね、其債權證書が貴下の手

許にあれば何といふのですな、それを行使すると曰はれるのは何いふ意味ですな」

『問ふまでも無いぢやないか、君に對つて債務の實行を逼るのさ、直に十二萬圓餘の償却をせなければ此鑛山は君を離れて我輩の物になるよ』

『はッはゝゝゝゝ』

と廣之は再び哄笑をした。

『貴下も隨分鋭い方ぢやがそれでも御華族ぢや、僕がそんな證書位ゐに怖れて折角これ迄にした鑛山を抛り出す正直者と思はるゝのかね、男爵、貴下に口說かれ小仙を種の計畫に乘つてお味方をした當時の大野廣之とは大分人間が變つて居ますからを、其積で交際て下さいはッはゝゝゝ』

『人が變らうが證書の文字は消えないからね、之を避け得る術は君にもあるまいよ、何して呉れるね、君が金の償却に應じないと云へば我輩は野暮臭いが止むを得ない、鑛山に對する假所分に出るばかりぢや』

『假所分？法律上ですかね』

『無論』



『裁判所でゝすな、はゝゝゝそれは妙だらう、一ッお互ひに法廷に起ちますかね、巽伯は差詰證人かね、面白いでせう、併し僕が入黨の顚末を自白すると貴下は忽ち被告になるかも知れないその邊の御用心を爲さらんと可けませんぞ』

可なり信明を威迫する詞であつた。

『それを頼んで君は我輩の要求を拒まうといふのだね、そうは問屋で卸さないよ、大野君、我輩はモウ巽の鈴とは何の干係も無いのだよ、伯爵が引張出されやうが我輩の遣つた事が曝れやうがそんな事にビクとするのぢや無いからね、この債權さへ有功に保護すれば其他の事は些とも構はない、華族の禮遇を停止されて平民仲間に蹴落されやうが、罷り違つてフロックを赭い奴に着換へたつてこれだけの金は握らなければ置かないのだから君も左樣思つて居て呉れたまへ』

信明は自棄の詞を吐き散した、廣之もそれに應じて大膽な放言をした、何時果つべくもない爭ひの中へ喜代子が入つて來た。

『兄樣、何時まで同じ事を云つてゝも仕樣が無いから妾に仲裁させて下さいよねゝ大野さん、貴郎だつて何時迄も妾を困らせないで、兄の云ふ事にも少しは讓つて下さいよ、両人、喧嘩

をなさつたら双方詰らないぢやありませんか薫さんを連れて來たのでも妾の心は能く判るでせう、一旦他所へは遣つたけれどそれは妾の辛抱が足りなかつたのだから此處で御一緒に幸福な家庭を作りたい爲に、種んな困難をして如彼して連れて來たのぢやありませんか、妾の苦勞を思つて下すつたら貴郎だつて……早くあの小仙を追ひ出して了つて下さいよ、そして三人が提携して事業に力を盡して行つたら可いぢやありませんか』

## （五三）

信明は一擧に敵を屠る心算が外れたけれど喜代子の云ふ通り何と云つても此方は權利者である暫時好機會の來るのを待つのも可からうと妹の言に從ふ事にした廣之も表面は利益の折半といふ喜代子說に讓步し、両人が共に銅山を經營する契約を結んだ、

夫から三四日を經て新たに契約を結び提携して行くべく誓つた廣之と信明は相共に輕裝して坑內視察に出掛けた、事務所には凡そ三千人餘りの事務員が居てそれ〳〵擔當の任に當るのであるから專閒の智識に乏しい廣之は一切の事を監督の某と技師長の外人に任せ自分は唯財政上の



ことにのみ主に當つて居たのである、で銅山に來てからも坑內へ入るのは之で二度目である、信明は此際すべての事務に刷新を加ふる必要がある、それには直接鑛夫の勤怠を視察しなければならぬ、坑の底まで目が光らねば駄目だと主張して廣之を促し今日の坑內視察を企てたのであつた。

『何も事務所の奴らも怠けて居るやうだね、田舍に來ると人間が鈍くつて困るね』

と信明は後ろを顧みた、草いきれのする熱い山腹で、三ケ所の坑の入口へ上るには運搬車の軌道が急勾配で麓に幾筋も這ふて居る、両人は故意と其道を避け麥を潛めて間道を進み不意に坑に近き鑛夫の仕事振を視やうといふのであつた、それで事務所からの先導も連れず脚袢草鞋に身を固め密々語り交はして嶮しい阪を上つた。

『鑛夫らに至つては彼輩以上に怠けて居る樣だ、これからは貴下に直接監督して頂かう』

『はゝゝゝ、差詰鑛夫頭といふ格だね、我輩大いに鞭韃して遣らう、暗い中で油を取るのぢやア厄介だ』

『他の勞働者と違つて殆んど野獸に近い奴らだから甘い顏を見せたら直に咬ひつくのだ、それで僕はあの猛獸遣ひが食餌で獅子や虎を猫同樣に扱ひますねあの術を應用して鑛夫に臨む積

でね、此間から從來の規則を改めて居ますよ』

『ウムそれが可い、彼奴らを人間扱ひにするのがそも〳〵間違つてるさはッは、、、』

## （五四）

廣之と信明は不意に坑口に現はれた、其處の小家に群つて居た鑛夫らは此不意の視察に面食つたやうであつたが大野は鋭く聲をかけて案内を命じた。

鑛夫頭は幾度も廣之の前にお叩頭をして斯云つた。

『旦那方がお入りになるといふ事を一寸坑内へ觸れて遣りたいのでございますが……』

『馬鹿な事を云ふなッ』

と信明は大喝した。

『先觸れをした視察が何になる、そんな事を云つてるから仕事の成蹟が擧らんのだ、視られて惡い事を坑内でして居るのか』

『汝らも器械が出來たら不必要な奴ぢやなは、、、、』



と信明も罵つた。

『ヘイ……決して惡い事をして居るといふのでは先觸れをしやうといふのぢやございません、御承知の通り火藥をかけたり運搬車を走せて居りますから、旦那樣方に危險があつては大變でヘイ』

『危險？、それ位ゐの事は知つて居る、汝らが怠けるのが此銅山には一番危險ぢや、詰らん事を曰はんと早く案内せい、馬鹿なッ』

『頭が汝の樣な奴ぢや部下も知れて居るな、大野君、此奴らに任せて置いちや事業は絶望だよ坑内も大體想像がつくぢやないか』

『何でい』

と後ろの方から唸る樣な聲が聞ゐた、頭は其方を一寸睨んで。

『ヘイ……御免なさつて、ッイ旦那方に危險があつてはと思つたもんでございますから、お氣に障る事を申上げて濟みませんヘイ、萬望御勘辨なさつて、さ此車へお乘りなさつて下さい御案内を致します』

分別のあるらしい年とつた鑛夫頭は運搬車の側臺に立つてカンテラを提げた、廣之と信明は彼

らに對する唯一の策を威壓と心得て居るので、散々叱りつけ其處らを睨み廻はしながら車に運ばれて奥深く進んだ。

「チ、畜生ッ、彼奴が此間から別莊へ來て居やがる男爵の野郎だな」

「器械が出來たら俺らは要らねいと吐しやがつたな、糞ッ、要ると云つたつて此方で居ねいや斯な地獄に誰が居るかッ」

「オイ彼奴と大野が一緒になつて銅山を經營ことになつたつて云ふぜ、それに違ひねねや如彼して両人で來やがるのを見ると」

「左樣だ、モウ此銅山には居られねい」

「オイ退がけの駄賃だ、遣付やうか」

と闇の中から日陽へ現れた荒くれ漢は口々に罵つた、坑口外の番小屋からも大勢飛び出して來た。

「ウ、、遣付けれア今日だぜ、遣付けろ遣付けろ」

此に合してウワーと大勢は鯨波の聲を上げた、此時麓の方から息急き駈つけたのは鑛夫姿の柳直也であつた、將に暴擧に出んとする殺氣立つた鑛夫の群へ飛込むと。



「待つた、待つた、亂暴をしちやア可ん、大野と佐藤は此坑へ入つたのだね、俺が坑内で捉まへてお前達の利益になる樣に談判するからな、暫時待つて呉れ、俺が談判の結果を待つて呉れ、可いか決して逸まるぢやないぞ」

云擧ると直也はカンテラ振照し坑内へ突進した。

## （五五）

行路の闇を裂いてパッと照したカンテラの光の中に見上げるばかりの巨漢は岩の如くに立つた廣之信明の両人は鑛夫姿の其男を朧ろに眺めたが仕事を爲て居るものだらうと思ふ外には何の注意も起さなかつた、モウ運搬車も通らぬ狹い通路は危險の難場と聞ゆる竪坑に近く氷を踏むやうな足許の冷めたい土泥に草鞋を濕して両人は猶も奥深く進まうとするのであるが、狹い道を塞いで立跨かつた巨漢はカンテラを目よりも高く差上げた儘疑と此方を見て身動きもしなかつた。

「オイ退かんかッ」

と廣之は大喝した。

『傍へ寄れ、大野樣だぞ、馬鹿奴ッ』

と信明も罵つた。

『大野氏といふ事も佐藤男爵といふ事も知つて居るから先へ廻つて待つて居たのぢや、此處は退かん、一歩も退く事はならん』

巨漢は斯云つてカンテラの火を自分の顏に近づけると。

『大野さん、榊直也を忘れはなさるまい』

『エッ』

と廣之は驚いて其顏を見据ゑた。

『オッ君は』

と信明は叫ぶ樣に云つた。

『はッはゝゝゝ佐藤男爵は猶忘れる事は出來ますまいな、神木朱衣ですよ、其後も依然惡事に耽つて居るですな』

信明は倒るゝばかりに驚いた、二三歩後へ退ると、滴の垂る岩壁に手を支へて屹度直也の顏を



睨んだ。

『兄妹で此地へ乘込まれた事も能く知つて居る、大野さん、家庭教師で知己の僕にはモウ面會せぬと曰はれたから榊直也は今改めて貴方の使用人たる鑛夫でお目にかゝる、地下百尺の暗い闇の底で對面するのは僕が貴方達両人に對する敬意ですぞ』

『君は悉皆狂人ぢや、狂人に相手になる爲に斯な處へ入つては來ぬ、邪魔をしないで通したまへ』

と廣之は心の動搖を隱して强く云つた。

『はッはゝゝゝ大野さん、地の底までも附纏ふ僕を退ける事は出來ますまい貴方は記憶して居るでせうな、僕の此胸に存する或物は總てに於て貴方より强いと云つた事を、正義の力の前に貴方は早かれ遲かれ跪づかねばならぬと云つた事を』

『エヽ狂人の詞に貸す耳は無いッ』

『僕の詞に耳を貸さなかつたら貴方は恐ろしい事を目に見なければなりませんぞ、大野さん、貴方が正義の前に跪づく時は眼前に來た、塵界を離れた地下の靜寂は貴方にあつて最も善い瞑想の機會だ、岩から滴る清水は貴方が既往の罪を悔い復活の洗禮を受けるに極めて適當だ

其處へお坐りなさい、僕が今貴方の許す可らざる罪狀を一々數へる、それに對して貴方は』

『大野君、此男が君の家に居た家庭教師榊直也かね』

と信明は口を挾んだ、其聲は震へて居た。

『はッはゝゝ榊を二字に讀んだ神木朱衣の本體は此直也だ、男爵、貴方も大野さんと一緒に此處で一切の懺悔をして尊い洗禮を受けるが可しい、互ひに欺き互ひに詐はる醜惡と汚辱の結晶たる貴方両人が提携してそれで事業が成就すると思ふのがそも〳〵迷ひだ、僕が知つた一切を告げたら、貴方両人は忽ち爭はねばならぬ』

信明はそつと衣嚢を探つた、彼は瞬間に恐ろしい事を決心したのである。

『併し僕には正義に組する人は誰も味方ぢや、貴方達の非行を世間と絶つた此地の底で責める僕の精神を察する事は出來るでせう、さ大野さん、男爵、一切を懺悔なさい、この坑内の暗黑にも似た從來の不義不正を懺悔して明るい光明世界に出る心は起らないですか』

『既に云つた事ぢや、我輩らの行動は君達には解らん、そんな馬鹿な眞似をして自ら苦しむ樣な君に我々の心事が解つて堪るものか、詰らん事は廢したまへ、邪魔だ、退きたまへ、退かんと命じて警察へ引渡すぞ』



廣之が憤りの聲を物ともせず。

『大野さん、命ずるとは誰に何を命じるのです、貴方が正義の敵たる間は此銅山には貴方の命を奉ずる者は今は一人も居りませんぞ、此場に於て猶改心なさらんと此坑内の暗黑は永久に貴方達両人を葬りまするぞ』

『何』

『貴方の虐待に苦しむ鑛夫は恐ろしい暴動を企てゝ居るのですぞ、今は僕の命令一つで何なにでもなる鑛夫ですぞ、貴方両人が飽くまで正義に反抗して顧みない決心ならば止むを得ん、人道の破壞者を生きながら此暗黑の地底に葬る支度が調ふて居るですぞ、これでも貴方は改心を拒むのですかッ』

廣之の面は青くなつた、何か曰うとして一歩を進む時、後なる信明は何時の間にか取出した短銃を直也に向けて放つた、爆然たる音は岩壁に反響して凄く響く。

## （五六）

百千の雷一時に鳴りはためくかとばかり物凄い大音響は阿武銅山の頂上に起つたそれと同時に地震の如き大鳴動は山麓の人家の戸障子を破り人々は悉く心も空に飛出した、見上ぐる山腹の鑛山事務所は炎々たる焔に包れ煙は朦々と山と山とに流れた、黄昏頃の銅山の町は忽然として呵鼻叫喚の巷と變じた、豫て企まれた鑛夫の暴動は遂に發せられたのである。

直也が制し止めて坑内に入つた後、怒氣滿々たる鑛夫の大勢は直也の返詞を今や今やと待ち構へた、一人二人は様子を見るべく坑内へ入つたのもある、暫時すると突然起つた銃聲に一同は顔を見合はせた。

『オイ今日は爆裂はかけねい筈だな』

『左様だ、あの音は何だらう』

『オイ變だぜ』

『變だな』



と不審の最中へ坑内から疾風の如く駈け出た一人がある。

『オイ大變だッ、あの男爵の野郎短銃でもつて新聞の兄貴を射殺しやがつた皆な早く復讐をしろッェッ』

と鑛夫は總立になつた、此注進は凄惨なる大暴動の導火となつた。

『それ遣付けろ』

『大野の野郎を云はしつ了へ』

『男爵が兄貴の敵だッ』

と口々に喚いて坑口へ潮の如く押寄せる中に早くも一隊は嫉視の的となつて居た大野の妾宅襲撃を試み、殘る別働隊は事務所裏の火藥庫を襲ふたのである。

妾宅の二階には喜代子と薫が居た、小仙は階下の一室で密かに此間中から取かゝつて居る荷物の形付をして居た、彼は喜代子が來ては此儘に居らるゝ身でない事を知つて逐はれぬ中に此家を逃げ東京に歸るべく其用意に怠りなかつたのであるそして廣之等の油斷を考へて居ると、毎日爭論ばかりして居た両人は今日珍らしく連立つて銅山に出掛けたので、此隙を見て逃げ出さうと先刻から二階の喜代子に覺られぬ様に風呂敷包やら信玄袋を揃へ、日の暮るゝのを待つて

居たのである。

待つ日は暮れぬ中思ひ掛けぬ人が來た、それはモウ手を切つた金太であつた、小仙には一寸物を云つて其儘二階の喜代子の處へ行くと、何事か密々と長い話を續けて居た。

二階の簾には金太と喜代子の對坐の姿が艶めかしう電燈の光りに影を見せた。

『モウお歸りの筈だがねゑ、何して斯なに遲いのか知ら』

と喜代子は立上つて欅に出た、簾を卷くと銅山の眞黑な姿は軒を壓して逼る、電燈がチラ〳〵見えた。

『眞逆銅山で又喧嘩ぢやァございますまいね』

と金太も續いて立上らうとする時轟然たる大音響と共に眼の前に大きな火柱が立つた、『アレー』と喜代子は思はず其處へ俯伏した、此時火藥庫が破裂したのである。

『お孃樣何でございませう、オヤ山で騷いで居るやうだな』

『屹度何事か起つたのだよ、金太、お前早く樣子を見て來てお呉れ』

と喜代子は今の響に倒れた襖の上へ半身をのつけ顏の色も蒼白くなつて居る、

金太は階段を駈け下りた。



金太が表の入口を出かゝつた時密集した猛獸の群の如き鑛夫は手に手に兇器を提へ堤を切つた洪水の勢ひで此妾宅へ押寄せたのである。

『それ其奴が血祭だッ』

大きな鶴嘴は空に鳴つて金太の躰は血煙の中に碎けてケシ飛んだ。

『オウ衒妻は二階だッ、遣付ろ』

バラ〳〵拋打る、爆彈は一つ宛恐ろしい音をして柱を碎き瓦は飛ばした、煙は焔を吹き焰は廻て家を包んだ、喜代子が最後の悲鳴は。

『ソレお妾の往生だ』

と云つて暴徒の大喝采を博した。

## (五七)

妾宅を灰にした鑛夫の群は天を焦す山の火焔を望んで更に勇氣を加へ事務所の攻擊隊に加はるべく凱歌を奏して引上げた此一隊が山麓を走る時妾宅の後の藪に覆れた磧からそつと這上た黑

い影がある。

『坊様モウ可いのよ、皆な山へ去つて了つたから、モウ出ても可いのよ、恐かつたわねえ』

『モウ居ないかい』

と草を捉まへて這上たのは薫であつた。

『おばさん有難う、僕おばさんが連れて逃げて臭れなかつたら死んて了つてるのだ』

『オ、喜代子さんは』

女は小仙である、二階から轉げ落ちた不具の姿の薫を見捨られず引抱へて此磧まで走つた事は覺ねて居るが後は夢心地であつた、今まで有つた家は影もなく火はまだ盛んに地に燃ねて居る喜代子と金太は燒死んだのであらう、小仙は怪しい臭氣と熱い風にプル〳〵と震へた。

『モウ彼なに警察の方が見ねたから恐い事はありません、兎も角停車場まで一緒に行きませうね』

小仙は薫を連れて警官や人々の雜沓を避け裏の田甫道から停車場へと走つた。

停車場は今恰度新橋からの急行列車が着いた所である、阿武銅山大暴動の急報に接した非常召集の巡査憲兵隊やら見物の野次馬が此汽車で運ばれたので小さな驛は鼎の涌く大混雜である。



『オイ御免ねい、退いた退いた』

と群集を押分け前に立つたのは音藏、それに續いて綾子と清香、後には宍戸良助が歩んだ、綾子の一行は汽車が馬關に着いた時始めて銅山の大變を知つたのである、人々は僅か數哩の此驛に走る汽車を年を越すやうに長く思つた、窓から望むと、夕の空を焦して火の手は面も熱るばかり近く見えた、顏を見合せて何事も云ひ得ない心は皆一つである、雲に映つてパッと紅ゐに其底には微かに物凄い叫喚も聞ゆる、と思ふ度に綾子は夫の上薫の上榊直也の上を神佛に念じた、清香は肌に着けた守札を押戴いた、音藏は拳を握て車中をウロ〳〵する、宍戸は。

『榊が居るから大丈夫だ、氣遣はなくても大丈夫だ』

と些とも見當のつかぬ事を云ひながら顏色を變へて乘合の人々から情報を聞くべく躍起になつた。

驛前の交番所には硝子障子にベタ〳〵と掲示が貼られた、今汽車を出た人々は雪崩をうつて此に群つた、綾子と清香に音藏を付けて待合に待たせ掲示を見るべく走つた宍戸はスグ引返して來た、人々は其顏色を見て胸を轟かせた。

『殘念な事をした、今朝着く樣にすれば斯な事は無つた、銅山の事務所は悉く燒けて……坑内

も、瓦斯爆發の爲に事務員は大抵死んだとあるですそれから大野氏の別邸とありますがね、別邸も燒打されて其處に滯在中の婦人と小兒が……』

『エッ』

と綾子は氣も遠くなるばかり、此時群集を搔き分けて此處へ現はれるのは薫の手を引いた小仙であつた。

『お母樣』

『オ、、薫ッ……生きて居て呉れたねえ……』

と母子は確と手を取つた、小仙は計らずも清香の姿を見つけて夢かとばかり駈寄つたのである

## (五八)

停車場の奇遇に人々は勇み立つた、此上は一時も早く夫や榊の安否を確めんものと綾子は人々と共に山の麓まで進んだ、小仙の話に依ると、夫は佐藤男爵と共と坑内視察に出掛けたとの事である、交番の掲示にも大野氏及佐藤男爵が坑内視察中の出來事で其生死は未だ判明せぬとあ



る、此暴動に加へて瓦斯爆發の變事が重なつては坑内に居たといふ夫や鑛夫に身を落した榊の身の無事は萬が一にも望まれぬ事であらう……と綾子の悲嘆は人々も同じ思ひである、宍戸の盡力で緣故の者である事の證明が立つて警戒線の内へ進み、猛烈な瓦斯の惡臭を堪へながら麓から二三丁の雜木林まで進むと、其處には今着いたばかりの憲兵巡査が屯をつくり此處からは危險だからと云つて一行の上るのを許さなかつた、此から上の樣子はまだ知れぬのである、武裝した憲兵巡査は今から危險を犯して突進すべく指揮の號令に列をつくつたところである、遙かの山腹事務所の邊りの火は漸く白くなつたが山も搖ぐやうな鯨波の聲はまた盛んに起つた。

『抵抗する奴は構はん、非常手段をとつて可しい、鑛夫と思はるゝのは悉く縛する』

と指揮官が訓授の聲は寒い山嵐に冴えて聞わた憲兵は悉く銃を握り巡査は劍の鍔止めを外した

『貴方らはこれから一歩も上る事は出來ませんぞ、危險である上に搜索上の妨害になる、可しいか、此處で待つて居られたら安否は直に判る』

と云ひ捨て警部は隊の後を追ふた。

『待つて居られるものぢやねい、俺が行つて』

と音藏は走らうとする、人々が之を制止めて爭ふ時、道の下なる叢にガサ〳〵音して人の氣勢

がした、宍戸と音藏は女と子供を後ろに屹と其方を見た、梢を漏るゝ月の光りは草の中の黑い人影を照した微かな唸き聲も聞えた。

『榊先生ッ』

と薫は無意識に叫んだ、人々は吃驚して其聲を押へるやうに取圍んだ。

『何をいふのだね、恐ろしい鑛夫だつたら何うします、逃げるのだらうねえ』

と綾子は薫を抱やうにして身を屈めた、人々も圓く蹲つて怪しい人影を凝視た。

『薫君かッ』

『エッ』

と人々は一時に起上つた、薫と云つた聲は正しく榊直也である。

『榊先生ッ』

『オ、薫君かッ』

草踏み分けて直也は近づく、薫は駈付くやうにして縋つた。

『オ、綾子さん、音藏君、ヤ清香さんも』

『榊ッ、オ、生きて居て呉れたか、俺だ、宍戸だッ』



『ヤ宍戸も居るか、ウム可い所だ、さ薫君、約束したお父様に遇はすぞ、綾子さん、御主人を確かにお渡ししますぞ、傷は淺いから大丈夫だ、早く麓へ連れて行つて手當をなさい』

直也は背中に負ふた廣之を靜かに其處の草の上に下した。

綾子は物を得云はず夫の傍の土に坐つた廣之は額から頰にかけて石に傷ついたのだらう點々血が浸染んで居る。

『其傷は崩れた岩の中から引張り出す時に擦たのだから格別は無い、暫時蟄忌の爲に腦をやられたらしいが決して大した事は無い、大野さん、夫人も薫君も皆が迎へに來られたのですぞ今道々で貴方が云はれた事を誓はれるには眞い好い機會だ』

と直也は嚴かに云つた、廣之は痛む頭を押へて首肯いた。

## (五九)

廣之は草の上に痛む身體を正く座つて。

『綾子ッ赦して呉れ、薫もお父さんの罪を赦して呉れ、俺は榊君に依て復活の洗禮を受けた、

音藏、汝も實に苦勞をして呉れたさうだ赦して呉れ、多くの人達に迷惑を掛けたのは悉く俺の迷ひの心の爲であつた、嘗て稱せられた俺が正義の名は虛僞であつた、正義に反抗した今日迄の行動も虛僞であつた、黃金萬能の夢を見て地の底を掘る事を企てたが一切の富貴も權勢も遂に人の眞の心に及ばぬ事を今日始て覺つた俺は實に愚かぢやつた、己れの危きを顧みないで敵視さるべき俺を救つて呉れられた榊君の偉大な人格の前には、黃金崇拜の爲に妻子の愛を忘れた俺は愧死すべきぢや皆な俺の罪を赦して呉れ、崩かゝつた岩の下敷になつに時榊君に引出されて岩から落ちる清水を喉に入れて貰つた時あの清冽な一滴の水はまことに穢れ切つた俺の肺腑を洗つた……榊君此通り君の前で宣誓する、只今綾子の離緣は取消しますぞ』

人々は泣いて廣之を介抱し直也を勞はつた、麓の木の間に提灯の火が赤い線をつくつて上る、頂きには又一頻りの物凄い叫びが起つた。

『オヽ俺は可愛相な鑛夫を救はねばならぬ、罪を輕くして遣らねばならぬ、宍戸汝に賴むぞ皆の保護を賴むぞ』

直也は繩帶をグッと締めて再び頂上へ駈け上らうとする、清香と音藏は兩方から其手を捉へた



綾子と薫は前を塞いで。

『怪我があつては可けません、一應麓迄下りて下さい、お賴みでございます』

『榊の旦那、お願ひだから一緒に下りて下せい、モウ俺ア此處から放しやせんせ』

『ねゝ榊さん、皆さんが彼んなに仰有るのだから萬望麓へ下りて下さいまし、オヽ貴郎も負傷をなすつたぢやありませんか』

清香は始めて直也の後頸に痛々しい裂傷のあるのに氣付いた、帶を探つて半巾を取出すとさと引裂いて繃帶を拵へる。

『はゝヽヽヽ梅の花を挿して戰場に向うやうだな、こんな佳い匂ひのする半巾を首に卷くと』

と云つて直也は笑つた、清香は後ろに廻はつて裂いた半巾でそつと涙を拭いて傷を押へた。

『ヤ有難う、それちや宍戸、大野さんを早く靜な所を寢せて手當をして呉れ、俺は斯してゐられぬ、暴動を演つた鑛夫は實に憐れむべきものぢや、俺が佐藤男爵の爲に殺られたと思つて其復讐が此騷動の動機になつたのぢやからな、何とかして彼らの罪を輕くしてやらねばならぬ、現場に行つて俺が辯解をして遣らなければならぬ』

『待て榊、そんな無謀な事をして萬一兇行の連累にでもなつたら何するかッ、君の大事業は既